平成12年度

神戸市埋蔵文化財年報

2003

神戸市教育委員会

平成12年度

神戸市埋蔵文化財年報

2003

神戸市教育委員会

fig. 1　深江北町遺跡　第９次調査　掘立柱建物群

深江北町遺跡では、奈良時代前期～平安時代後期にかけての掘立柱建物群が確認された。溝、流路からは『承和』銘の支給伝票木簡、『驛』の墨書土器などが出土し、葦屋驛屋との関連が注目されている。（本文 149頁）

fig. 2　寒風遺跡　第８次調査　古墳時代の竪穴住居群（本文 141頁）

fig. 3　寒風遺跡　第８次調査　人形土製品

古墳時代後期の人形土製品は、これまでに静岡県や九州地方での出土が知られていたが、近畿地方での出土は少なく、神戸市内における出土例は貴重である。（本文 141頁）

序

阪神・淡路大震災の発生から８年が経過し、街角はようやく平静を取り戻し、街並みの復興も進んでまいりました。復興事業はこれまでのハード面を主体とした復興から、より内面的な復興をめざすとともに、港湾都市として、さらなる創造と発展、活気ある街としての活性化とまちづくりへの取組みが行われております。

さて、このたび年報でご報告いたします平成１２年度におきましては、多数の復興関連の発掘調査事業が引き続き実施され、葦屋(あしやのうまや)驛家に関連すると考えられる深江北町遺跡や、寒鳳(かんぷう)遺跡における古墳時代の人形土製品の出土などの、貴重な発見がありました。また、地方分権推進の流れのなか、より一層の充実した文化財行政をめざして、大幅な組織改変を行いました。

これらの遺跡をはじめ、本書に掲載いたしました、数々の成果を通じて埋蔵文化財に対するご理解を深めていただければ幸いです。

最後に、この年報を作成するにあたりまして御協力いただきました関係諸機関、関係各位に対し、厚くお礼申しあげます。

平成１５年３月

神戸市教育委員会

例　言

1．本書は、神戸市教育委員会が平成12年度に実施した埋蔵文化財調査事業の概要である。事業に関わる発掘調査は、神戸市文化財保護審議会の指導を得て、下記の調査組織によって実施した。

調査関係者組織表

神戸市文化財保護審議会　（史跡・考古資料担当）

檀上重光　前　神戸女子短期大学教授

工楽善通　ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所研修部長

和田晴吾　立命館大学文学部教授

教育委員会事務局

教育長	木村良一
社会教育部長	矢野栄一郎
文化財課長	大勝俊一
社会教育部主幹	渡辺伸行
（埋蔵文化財指導係長事務取扱）	
事務担当学芸員	西岡誠司
	東喜代秀
	橋詰清孝
埋蔵文化財調査係長	丹治康明
文化財課主査	宮本郁雄
	丸山潔
	菅本宏明
事務担当学芸員	山口英正
調査担当学芸員	千種浩
	黒田恭正
	谷正俊
	山本雅和
	池田毅
	阿部敬生
	川上厚志
	中村大介
	中谷正

㈶神戸市体育協会

会長	笹山幸俊
副会長	木村良一
同	鞍本昌男
（専務理事事務取扱）	
同	山田隆
同	家治川豊
相談役	加茂川守
常務理事	静観圭一
参事	財田美信
総務課長	前田豊晴
事業係長	瀬田吉則
事業係主査（兼務）	丸山潔
同（兼務）	菅本宏明
事務担当学芸員	斎木巌
調査担当学芸員	西岡巧次・口野博史
	安田滋・前田佳久
	須藤宏・富山直人
	佐伯二郎・内藤俊哉
	浅谷誠吾・井尻格
	石島三和・関野豊
	阿部功・平田朋子
	中居さやか

2．本書に掲載した位置図は、神戸市立中学校教育研究部編集（神戸市体育協会発行）の5万分の1神戸市全図を、各遺跡の位置図は、神戸市発行2500分の1地形図を使用した。

3．本書は、埋蔵文化財発掘調査一覧表に示した各調査担当者が執筆し、Ⅰ．平成12年度事業の概要については西岡誠司・東喜代秀が執筆した。Ⅴ．平成12年度の保存科学調査・作業の概要については千種　浩・中村大介がそれぞれ執筆した。本書の編集については、丹治康明の指導のもとに阿部　功が行った。

また、白水遺跡第６・７次（新次数白水遺跡第２次－６・７調査）調査出土の動物遺体の分析については、鹿児島大学　西中川　駿・小山田和央両氏、下山手北遺跡出土遺物の自然科学的調査については、㈱元興寺文化財研究所　川本耕三・尾崎　誠・井上美知子の各氏、下山手北遺跡の土壌分析はパリノ・サーヴェイ株式会社によるものである。

4．市内の各遺跡の調査次数については、現在改正作業中である。平成12年度より北区、西区以外については新次数による調査次数表記となっている。

5．表紙写真は深江北町遺跡出土の木簡（本文 149頁）で、裏表紙写真は、同じく深江北町遺跡出土の蓮華文軒丸瓦（本文 149頁）である。

目　次

序
例　言

Ⅰ．平成12年度　事業の概要 …… 1
　平成12年度　埋蔵文化財発掘調査一覧 …… 11
　平成12年度　神戸市埋蔵文化財調査位置図 …… 20

Ⅱ．平成12年度の復興事業に伴う発掘調査 …… 27
　1．郡家遺跡　第67次調査 …… 27
　2．郡家遺跡　第69次調査 …… 31
　3．篠原遺跡　第21次調査 …… 33
　4．日暮遺跡　第19次調査 …… 37
　5．生田町古墳群　第1次調査 …… 41
　6．下山手遺跡　第3次調査 …… 45
　7．兵庫松本遺跡　第3次－1～5調査 …… 47
　8．上沢遺跡　（第37・39・42・43・44次調査） …… 51
　9．中遺跡 …… 63
　10．五番町遺跡　第7次調査 …… 67
　11．五番町遺跡　第9次調査 …… 71
　12．御蔵遺跡　第32次－1～8調査 …… 75
　13．御蔵遺跡　（第33～36・39～43次調査） …… 77
　14．御蔵遺跡　第38次－1～3調査 …… 79
　15．長田神社境内遺跡　第14次調査 …… 81
　16．水笠遺跡　第4次調査 …… 87
　17．水笠遺跡　（第5～15次調査） …… 89
　18．松野遺跡　第16次－1～7調査 …… 93
　19．松野遺跡　（第17～23・25・26次調査） …… 99
　20．松野遺跡　第24次調査 …… 105
　21．二葉町遺跡　第12次－1～7調査 …… 107
　22．二葉町遺跡　第13次調査 …… 111

23. 二葉町遺跡　第14次調査 …… 113
24. 戎町遺跡　第31次調査 …… 117
25. 行幸町遺跡　第１次－１・２調査 …… 123
26. 垂水日向遺跡　第33次調査 …… 133
27. 寒風遺跡　第８次調査 …… 141
28. 日輪寺遺跡　第７次調査 …… 145
29. 今津遺跡　第14次調査 …… 147

Ⅲ. 平成12年度の通常事業に伴う発掘調査 …… 149
1．深江北町遺跡　第９次調査 …… 149
2．西平野遺跡　第３次調査 …… 153
3．都賀遺跡　第16次調査 …… 157
4．小野柄遺跡　第１次調査 …… 163
5．上沢遺跡　第38次－１～３調査 …… 167
6．勝雄遺跡　第７次－１・２調査 …… 169
7．勝雄遺跡　第８次調査 …… 171
8．野瀬遺跡　第１次－１・２調査 …… 175
9．五番町遺跡　第８次調査 …… 177
10. 五番町遺跡　第10次調査 …… 181
11. 御蔵遺跡　第37次－１～４調査 …… 183
12. 戎町遺跡　第32次調査 …… 185
13. 今池尻遺跡　第２次調査 …… 189
14. 新方遺跡 …… 193
15. 寺谷遺跡 …… 197
16. 居住小山遺跡 …… 201

Ⅳ. 平成12年度の大規模試掘調査 …… 203

Ⅴ. 平成12年度の保存科学調査・作業の概要 …… 209

Ⅵ. 神戸市白水遺跡（６、７次調査）出土の動物遺体　（西中川　駿・小山田和央） …… 217

Ⅶ. 下山手北遺跡出土遺物の自然科学的調査　（㈱元興寺文化財研究所） …… 223

挿図目次

fig. 1　深江北町第９次調査　掘立柱建物群 …… 巻頭
fig. 2　寒風遺跡第８次調査　古墳時代の竪穴住居群 … 巻頭
fig. 3　寒風遺跡第８次調査　人形土製品 …… 巻頭
fig. 4　特別展『色彩の考古学』展示風景〔写真〕 … 2
fig. 5　企画展『神戸の古墳』展示風景〔写真〕 … 2
fig. 6　親子で体験考古学講座風景〔写真〕 …… 4
fig. 7　体験考古学講座風景〔写真〕 …… 4
fig. 8　地図情報システム画面 …… 7
fig. 9　検索機能画面 …… 8
fig. 10　調査地位置図 …… 27
fig. 11　調査区全景〔写真〕 …… 28
fig. 12　調査区平面図 …… 29
fig. 13　出土遺物実測図 …… 30
fig. 14　調査地位置図 …… 31
fig. 15　調査区東壁土層断面図 …… 31
fig. 16　調査区平面図 …… 32
fig. 17　出土遺物実測図 …… 32
fig. 18　調査地位置図 …… 33
fig. 19　調査区東壁土層断面図 …… 33
fig. 20　第１・２遺構面平面図 …… 35
fig. 21　壺棺検出状況〔写真〕 …… 35
fig. 22　第３遺構面平面図 …… 35
fig. 23　壺棺平面図・断面図 …… 35
fig. 24　出土遺物実測図 …… 36
fig. 25　調査地位置図 …… 37
fig. 26　調査区南壁土層断面図 …… 37
fig. 27　第１遺構面全景〔写真〕 …… 38
fig. 28　調査区平面図 …… 39
fig. 29　第２遺構面全景〔写真〕 …… 40
fig. 30　出土遺物実測図 …… 40
fig. 31　調査地位置図 …… 41
fig. 32　ＳＸ01遺物出土状況〔写真〕 …… 42
fig. 33　ＳＸ01半面図 …… 42
fig. 34　調査区平面図 …… 43
fig. 35　調査区全景〔写真〕 …… 44
fig. 36　出土遺物実測図 …… 44
fig. 37　調査地位置図 …… 45
fig. 38　Ｊ区西壁土層断面図 …… 45
fig. 39　調査区平面図 …… 46
fig. 40　調査地位置図 …… 47
fig. 41　第３次－１調査区平面図・土層断面図 …… 48
fig. 42　第３次－２調査区土層断面図 …… 48
fig. 43　第３次－２調査区平面図 …… 49
fig. 44　調査地位置図 …… 51
fig. 45　調査区地区割図・土層断面図 …… 52
fig. 46　調査区平面図 …… 53
fig. 47　調査区東壁土層断面図 …… 54
fig. 48　第１遺構面平面図 …… 54
fig. 49　第２・３遺構面平面図 …… 55
fig. 50　調査区土層断面図 …… 56
fig. 51　遺構平面図 …… 57
fig. 52　調査区平面図・土層断面図 …… 59
fig. 53　調査区東壁土層断面図 …… 60
fig. 54　調査区平面図 …… 61
fig. 55　調査区全景〔写真〕 …… 61
fig. 56　調査地遠景〔写真〕 …… 62
fig. 57　調査地位置図 …… 63
fig. 58　調査区東壁土層断面図 …… 64
fig. 59　調査地全景〔写真〕 …… 64
fig. 60　調査区平面図 …… 64
fig. 61　牛の蹄あと検出状況〔写真〕 …… 65
fig. 62　出土遺物実測図 …… 66
fig. 63　調査地位置図 …… 67
fig. 64　２区西壁土層断面図 …… 67
fig. 65　第１遺構面平面図 …… 68
fig. 66　第２遺構面平面図 …… 69
fig. 67　ＳＥ201・202平面図・土層断面図 …… 69
fig. 68　第３遺構面平面図 …… 70
fig. 69　調査地位置図 …… 71
fig. 70　Ａ区土層断面図・第１遺構面平面図 …… 72
fig. 71　Ａ区全景〔写真〕 …… 73
fig. 72　Ａ区第２遺構面平面図 …… 73
fig. 73　Ｂ区平面図 …… 74
fig. 74　調査地位置図 …… 75
fig. 75　調査地位置図 …… 77
fig. 76　第34～36次－１調査区全景〔写真〕 …… 78
fig. 77　調査地位置図 …… 79
fig. 78　第38次－１調査区全景〔写真〕 …… 80
fig. 79　調査地位置図 …… 81
fig. 80　土層断面図 …… 82
fig. 81　第１遺構面平面図 …… 83
fig. 82　第２遺構面平面図 …… 84
fig. 83　第３遺構面平面図 …… 85
fig. 84　調査地位置図 …… 87
fig. 85　調査区平面図 …… 88
fig. 86　調査地位置図 …… 89
fig. 87　第６～11次調査区平面図 …… 90
fig. 88　ＳＰ03遺物出土状況〔写真〕 …… 91

fig. 89　第13・14次調査区平面図 …… 91
fig. 90　調査地位置図 …… 93
fig. 91　第16次－6調査区平面図 …… 95
fig. 92　第1遺構面遺構検出状況〔写真〕 …… 96
fig. 93　第16次－7調査区平面図 …… 97
fig. 94　第1遺構面全景〔写真〕 …… 97
fig. 95　第2遺構面全景〔写真〕 …… 97
fig. 96　調査地位置図 …… 99
fig. 97　第19・20次調査区平面図 …… 101
fig. 98　ＳＫ01全景〔写真〕 …… 101
fig. 99　ＳＫ01下層出土遺物実測図 …… 101
fig.100　ＳＫ01上層出土遺物実測図 …… 102
fig.101　調査地位置図 …… 105
fig.102　調査区北壁土層断面図 …… 105
fig.103　掘立柱建物全景〔写真〕 …… 106
fig.104　調査区平面図 …… 106
fig.105　黄色泥砂（洪水砂）出土遺物実測図 …… 106
fig.106　調査地位置図 …… 107
fig.107　第12次－2調査区全景〔写真〕 …… 108
fig.108　遺構検出状況〔写真〕 …… 108
fig.109　第12次－3調査区全景〔写真〕 …… 109
fig.110　第12次－4調査区東半全景〔写真〕 …… 110
fig.111　調査地位置図 …… 111
fig.112　調査区平面図 …… 112
fig.113　調査地位置図 …… 113
fig.114　2・3区調査区半面図 …… 115
fig.115　調査地位置図 …… 117
fig.116　第4遺構面平面図 …… 118
fig.117　第3遺構面平面図 …… 119
fig.118　第2遺構面平面図 …… 119
fig.119　ＳＢ201全景〔写真〕 …… 120
fig.120　ＳＢ201平面図・断面図 …… 120
fig.121　第1遺構面平面図 …… 121
fig.122　ＳＴ101断面〔写真〕 …… 121
fig.123　ＳＴ101平面図・断面図 …… 121
fig.124　ＳＥ101断面〔写真〕 …… 122
fig.125　ＳＥ101平面図・断面図 …… 122
fig.126　調査地位置図 …… 123
fig.127　第1次－1Ａ区第1遺構面全景〔写真〕 … 124
fig.128　第1次－1Ａ区第1遺構面平面図 …… 124
fig.129　第1次－1Ａ区第2遺構面全景〔写真〕 … 126
fig.130　第1次－1Ａ区第2遺構面平面図 …… 126
fig.131　第1次－1Ｂ区全景〔写真〕 …… 127
fig.132　第1次－1Ｂ区平面図 …… 127
fig.133　第1次－2調査区平面図 …… 129
fig.134　大溝土層断面図 …… 130
fig.135　大溝全景〔写真〕 …… 130
fig.136　大溝内遺物出土状況〔写真〕 …… 130
fig.137　調査地位置図 …… 133
fig.138　基本層序模式柱状図 …… 134
fig.139　調査区配置図 …… 135
fig.140　調査地遠景〔写真〕 …… 136
fig.141　1～3区第1遺構面平面図 …… 136
fig.142　1～3区第2遺構面平面図 …… 138
fig.143　4区平面図 …… 139
fig.144　調査地位置図 …… 141
fig.145　調査区平面図 …… 142
fig.146　ＳＢ01平面図・断面図 …… 142
fig.147　ＳＢ07平面図・断面図 …… 142
fig.148　調査区東半部全景〔写真〕 …… 142
fig.149　出土遺物実測図 …… 144
fig.150　調査地位置図 …… 145
fig.151　調査区全景〔写真〕 …… 146
fig.152　調査区平面図 …… 146
fig.153　調査地位置図 …… 147
fig.154　ＳＤ01－①区遺物出土状況図 …… 148
fig.155　ＳＤ01－①区遺物出土状況〔写真〕 …… 148
fig.156　調査区平面図 …… 148
fig.157　調査地位置図 …… 149
fig.158　地区割図 …… 149
fig.159　1区第1遺構面平面図 …… 150
fig.160　調査区西半平面図 …… 150
fig.161　木簡実測図 …… 151
fig.162　墨書土器『罫』実測図 …… 152
fig.163　調査地位置図 …… 153
fig.164　ＳＸ02平・断面図・出土遺物実測図 …… 154
fig.165　第1トレンチ平面図・北壁土層断面図 …… 154
fig.166　第2・3トレンチ平面図 …… 155
fig.167　第2トレンチ遺構検出状況〔写真〕 …… 156
fig.168　調査地位置図 …… 157
fig.169　第1遺構面平面図 …… 158
fig.170　第2遺構面平面図 …… 160
fig.171　第3・4遺構面平面図 …… 161
fig.172　調査地位置図 …… 163
fig.173　第1遺構面平面図 …… 164
fig.174　第2・3遺構面平面図 …… 165
fig.175　調査区遠景〔写真〕 …… 166
fig.176　調査地位置図 …… 167
fig.177　第1・2遺構面平面図 …… 167
fig.178　第3遺構面・第38次－2調査区平面図 …… 168
fig.179　調査地位置図 …… 169
fig.180　Ａ区平面図・土層断面図 …… 170
fig.181　調査地位置図 …… 171
fig.182　22区平面図・土層断面図 …… 173

fig.183 竪穴住居検出状況〔写真〕 …… 173
fig.184 11・12区平面図・11区土層断面図 …… 174
fig.185 調査地位置図 …… 175
fig.186 第１次－１調査区全景〔写真〕 …… 176
fig.187 ＳＫ06全景〔写真〕 …… 176
fig.188 調査地位置図 …… 177
fig.189 東区全景〔写真〕 …… 178
fig.190 ＳＢ01平面図・土層断面図 …… 179
fig.191 東区平面図 …… 180
fig.192 調査地位置図 …… 181
fig.193 第１遺構面平面図 …… 182
fig.194 第２遺構面平面図 …… 182
fig.195 調査地位置図 …… 183
fig.196 第37次－４第１遺構面全景〔写真〕 …… 184
fig.197 第37次－４第２遺構面全景〔写真〕 …… 184
fig.198 調査地位置図 …… 185
fig.199 調査地区分図 …… 185
fig.200 １・９・10区土層断面図 …… 186
fig.201 17区第１遺構面〔写真〕 …… 186
fig.202 12・13区第２遺構面〔写真〕 …… 187
fig.203 調査区平面図 …… 188
fig.204 調査地位置図 …… 189
fig.205 掘立柱建物群検出状況図 …… 190
fig.206 掘立柱建物群全景〔写真〕 …… 191
fig.207 ＳＰ1164遺物出土状況〔写真〕 …… 191
fig.208 ＳＰ1158遺物出土状況〔写真〕 …… 191
fig.209 調査区全景〔写真〕 …… 192
fig.210 調査地位置図 …… 193
fig.211 調査区平面図 …… 194
fig.212 Ｅ－１区全景〔写真〕 …… 194
fig.213 ＳＫ02遺物出土状況〔写真〕 …… 195
fig.214 ＳＤ01遺物出土状況・断面〔写真〕 …… 195
fig.215 Ｅ－２区全景〔写真〕 …… 196
fig.216 ＳＢ01全景〔写真〕 …… 194
fig.217 Ｅ－２区落ち込み遺物出土状況〔写真〕 …196
fig.218 調査地位置図 …… 197
fig.219 ３区平面図・ＳＫ02平面図・断面図 …… 198
fig.220 ７区平面図 …… 199
fig.221 ７区全景〔写真〕 …… 199
fig.222 ８区平面図 …… 200
fig.223 ８区全景〔写真〕 …… 200
fig.224 調査地位置図 …… 201
fig.225 調査区平面図・ＳＤ01断面図 …… 202
fig.226 雲井遺跡試掘調査地点 …… 204
fig.227 日暮遺跡試掘調査地点 …… 205
fig.228 西区試掘地域全体図（１） …… 206
fig.229 西区試掘地域全体図（２） …… 206
fig.230 青谷南地区試掘調査地点 …… 207
fig.231 寺谷地区試掘調査地点 …… 208
fig.232 取り上げる遺物の周囲を掘り下げる〔写真〕 …209
fig.233 遺物をアルミ箔で保護し、周囲の枠に設置する〔写真〕 …209
fig.234 発泡ウレタン樹脂を流し込み、補強する〔写真〕 … 209
fig.235 土掘具で起こし、取り上げる〔写真〕 …… 209
fig.236 Ｘ線透過像を撮影する〔写真〕 …… 210
fig.237 事前調査をもとにクリーニングを行う〔写真〕 …210
fig.238 クリーニング完了後（二葉町）〔写真〕 …210
fig.239 取り上げ直後〔写真〕 …… 211
fig.240 Ｘ線透過像80Kvp.3mA 30sec〔写真〕 …… 211
fig.241 クリーニング完了後〔写真〕 …… 211
fig.242 高級アルコール法による保存処理〔写真〕 … 212
fig.243 含浸終了後〔写真〕 …… 212
fig.244 深江北町遺跡出土木簡〔写真〕 …… 212
fig.245 御蔵遺跡出土動物遺体〔写真〕 …… 213
fig.246 裏側より基盤層を掘削〔写真〕 …… 214
fig.247 樹脂による骨の強化、裏打ち〔写真〕 …… 214
fig.248 保管ケースに収納する〔写真〕 …… 214
fig.249 腰椎に見られた病変（13号人骨）〔写真〕 … 215
fig.250 鹿角製指輪装着状況（12号人骨）〔写真〕 … 215

Ⅰ．平成12年度　事業の概要

1．はじめに

平成12年度は、本市の埋蔵文化財行政にとって大きな節目の年となった。それは地方分権に伴う文化財保護法改正により、平成12年４月から埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の届出受理、開発を行う事業者への発掘調査の指示（文化財保護法第57条の２）、遺跡の発見に関する届出、停止命令等（文化財保護法第57条の５）などが政令指定都市の自治事務となったことである。このことにより、従来県で行っていた事務が市の事務となり、また民間開発事業についてすべて掌握する必要が生じ、より一層の行政責任が求められるようになった。

これに対応するために、文化財課では職制改正を実施し、従来の埋蔵文化財係を埋蔵文化財指導係と埋蔵文化財調査係に分割し、発掘調査の指導と調査を受託する部門を分離した。具体的には、埋蔵文化財の保護、指導及び相談、情報収集及び統計、埋蔵文化財に係る事務の連絡調整が、埋蔵文化財指導係の事務分掌となり、埋蔵文化財調査、普及啓発、埋蔵文化財センターが埋蔵文化財調査係の事務分掌となった。

また、もう一つの大きな出来事は隣接する芦屋市への支援を開始したことである。兵庫県の阪神・淡路大震災復興10大プロジェクトにあげられている都市計画道路山手幹線の早期開通のため、芦屋市内で埋蔵文化財発掘調査の必要が生じた。本来なら芦屋市教育委員会が対応すべきものであるが、芦屋市では復興区画整理が始まったばかりで、それに伴う発掘調査の対応に追われており、調査担当職員が不足して、山手幹線関連の調査の対応は不可能な状況であった。このため芦屋市教育委員会より本市に対し発掘調査の支援の要請があった。

山手幹線は本市にとっても重要な幹線道路であり、また隣接する芦屋市からの依頼ということもあり、広域支援を所管する兵庫県教育委員会、及び事業実施部局である兵庫県街路課、芦屋市街路課を交えた五者で協議を実施した結果、職員の派遣という形ではなく、地方自治法第252条の14に基づく発掘調査事業の受託という形で、平成12年度より平成15年度まで支援を行うことを決定した。

なお、震災復興関連事業についての文化庁次長通知「阪神・淡路大震災の復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財の取扱いに関する基本方針について」の適用期間は平成12年３月31日で終了したが、発掘調査に至った場合の調査費用の負担について、補助の適用範囲が変更され、復旧・復興事業として被災者である個人及び中小企業が建設する建物についてはこれまでどおり補助の適用を受けるが、被災者のために住宅を供給する事業（共同住宅・賃貸住宅等の建設）については、適用が除外されることとなった。当初は、かなりの混乱が予想されたが、ほぼ大きな混乱もなく進捗した。

2．普及啓発　〔埋蔵文化財センター〕

事　業

神戸市埋蔵文化財センターでは、特別展示・企画展示・速報展示を年数回実施し、調査成果を公開している。

特別展示

本年度は『色彩の考古学』と題した特別展示を開催した。今回の展示では、各時代の人々

が、どのような色に関心をもち、憧れてきたかという観点から、「玉」・「ガラス」・「金属」・「赤彩」・「漆」等のテーマ別に、縄文時代から近世の出土遺物を展示した。これらの考古資料を通して、古代の人々とわれわれ現代人がどこまで「いろ」の世界を共有できるのかについて探ってみるという趣旨で実施した。期間中の11月11日には、奈良国立文化財研究所主任研究官・村上隆氏の講演会『「もの」から見た歴史の色』を開催し、120名の聴講を得た。特別展示の入館者数は1,725名である。

企画展示

縄文時代から近世までの神戸市内からの出土遺物と近代から現代までの生活用具を展示し、縄文時代から現代までの間に使われた道具が、どのように変わっていったのかを紹介するという趣旨で『かわった？かわらない？－道具の今・昔－』を開催した。小学生を対象に展示しており、灘区西求女塚古墳出土の三角縁神獣鏡と現代のガラス鏡を並べて配置したり、垂水区舞子浜遺跡の勾玉や垂水区高塚山２号墳の金環と現代のピアス等のアクセサリー類を展示したり、また、縄文時代から現代までの台所道具を合わせて展示することによって、それぞれのテーマごとに生活用具の変遷を示した。

また、史跡五色塚古墳の復元整備完成25周年を記念して、神戸市内の古墳から出土したさまざまな遺物を通して、神戸の古墳を紹介するという趣旨で企画展示『神戸の古墳』を開催した。灘区西求女塚古墳の三角縁神獣鏡をはじめ、西区白水瓢塚古墳・垂水区舞子浜遺跡の埴輪棺や東灘区住吉宮町遺跡の人物埴輪、垂水区狩口台きつね塚古墳の馬具等を展示した。企画展示の入館者数は、２回合わせて、15,419名である。

展示会名称	開催期間	入館者数
『かわった？かわらない？～道具の今・昔～』	H12.3／25～6／4	12,020名
『神戸の古墳』	H12.7／20～9／3	3,399名
『色彩の考古学』	H12.10／21～12／3	1,725名

fig. 4　展示展『色彩の考古学』展示風景

fig. 5　企画展『神戸の古墳』展示風景

速報展示　平成11年度に実施した新方遺跡・野手西方第５次調査で出土していた弥生時代前期の男性の人骨（第12号人骨）は、現地から土ごとウレタンで梱包して、埋蔵文化財センターに搬入していた。その後、土を取り除き、詳細に調査した結果、右手に鹿角製である可能性が高い指輪が２個１対として３対分（計６個）検出された。特に大きな成果は、右手の人指し指・中指・薬指のそれぞれの指に、２個ずつ装着した状態で発見されたことである。また、１体につき６個の指輪を装着した例はなく全国最多で、確実に指に装着された状態で出土した例としても、最古級の資料である。そのため、記者発表を行い、12月９日～12月17日に、埋蔵文化財センター企画展示室において、１号人骨・３号人骨・13号人骨と共に、一般公開を実施した。

学校展示　遺跡から出土した資料を子供たちが直接目で見て触れながら、地域の歴史や文化を学ぶことを目的に、社会科教育の一環として平成10年度より市内の小学校で展示会を開催しており、本年度は５校で実施した。

館外展示　地域の身近な遺跡を紹介し、地域の歴史について理解を深めてもらうため、地域の施設を利用し展示会を開催した。

学　校　展　示		
展　示　会　名　称	開催期間	場　　所
昔のくらし－上小名田遺跡の出土品－	６／５～６／９	北区西山小学校
弥生時代の須磨	６／９～６／16	須磨区北須磨小学校
発掘された石の道具 須磨区の遺跡－最新版－	６／16～７／21 11／１～11／30	須磨区若宮小学校
発掘された石の道具	７／３～７／10	北区君影小学校
弥生人がやってきた	９／12～10／27	兵庫区兵庫大開小学校
館　外　展　示		
展　示　会　名　称	開催期間	場　　所
長田区歴史変遷展	４／30～５／30	アスタギャラリー
新方ムラのまつり	６／24～７／３	玉津南公民館
発掘された道場の歴史	11／２～11／３	神戸市立農業振興センター
淡河の埋蔵文化財	11／18～11／27	淡河地域福祉センター

考古学講座　『親子で体験考古学講座』は学校の休日である第２・第４土曜日の催しとして、体験学習を通じて、先人の生活や技術を学び、歴史に興味を抱いてもらう目的のため、小学校高学年から高校生までを対象として開催した。また、平成10年度より実施している親子で『赤米作りに挑戦しよう』は本年度も開催した。さらに、成人対象の『体験考古学講座』も昨年に引き続き開催している。参加者数は、合計531名である。

また、『出張考古学講座』として、本年度より市内の小学校13校において、６年生を対象にした体験考古学講座の開催を始めた。本年度は、勾玉づくり・土器づくり・貫頭衣づ

fig. 6　親子で体験考古学講座風景

fig. 7　体験考古学講座風景

親子で体験考古学講座			
講座名	開催日	内容	参加者
石包丁をつくろう	7／22	滋賀県産高島石で石包丁などの磨製石器をつくる。	101名
勾玉づくりに挑戦	8／5	印材の青田石や寿山石で勾玉をつくる。	195名
土器をつくろう	8／26	乾燥すれば硬化する粘土で土器をつくる。	142名
		合計	438名

親子で『赤米作りに挑戦しよう』			
講座名	開催日	内容	参加者
貫頭衣を着て、田植えに挑戦	6／24	神出自然教育園の水田において、古代米である赤米に田植えから収穫までを体験する。	6名
がんばって、草取りをしよう	7／29		6名
石包丁で、収穫に挑戦	10／28		2名
		合計	14名

体験考古学講座			
講座名	開催日	内容	参加者
土器をつくる（成形）	2／17	粘土から土器を成形する。	31名
土器をつくる（焼成）	3／3	乾燥させた土器を野焼きによって焼成する。	31名
勾玉をつくる	3／24	印材の青田石や寿山石で勾玉をつくる。	17名
		合計	79名
		考古学講座・総合計	531名

出張考古学講座			
講座名	開催日	学校名	参加者
勾玉づくり	4／27	千歳小学校	37名
土器づくり	5／2	高和小学校	17名
勾玉づくり・貫頭衣づくり	5／10	六甲小学校	45名
ドングリクッキーづくり	5／12	大黒小学校	52名
ドングリクッキーづくり・貫頭衣づくり	5／16	湊山小学校	45名
勾玉づくり・貫頭衣づくり	5／19	高丸小学校	77名
ドングリクッキーづくり・貫頭衣づくり	5／24	五位の池小学校	79名
勾玉づくり	5／26	西灘小学校	47名
勾玉づくり・貫頭衣づくり	5／29	花山小学校	68名
貫頭衣づくり	6／4	桜の宮小学校	72名
勾玉づくり・貫頭衣づくり	9／14	南五葉小学校	55名
ドングリクッキーづくり・貫頭衣づくり	10／13	有野東小学校	60名
土器づくり	11／28	狩場台小学校	108名
		合計	762名

くり・ドングリクッキーづくりを実施した。合計762名の生徒が参加した。

考古学講座と出張考古学講座の総参加者数は、1,293名である。

〔文化財保護強調週間の催し〕

大歳山遺跡公園では、11月3日から5日までの期間、復元した竪穴住居の内部を公開するとともに、古代人の生活の一部を体験できるように、舞錐による火起こしや臼・杵による米の脱穀等をおこなった。また、火起こしが成功した参加者には、「古代人認定書」を配付した。3日間の参加者は、499名であった。

〔発掘調査現地説明会の開催と報道関係資料提供〕

発掘調査及び出土遺物の整理において重要な発見があった場合、市役所内の市政記者クラブで発表を行っている。また、現地調査期間中であって安全管理上可能であれば現地説明会を開催している。本年度は、現地説明会は開催しなかった。調査の都合上、現地説明会が開催できない場合は記者発表のみおこなっており、本年度は、3件の記者発表をおこなった。さらに、要望があれば地元住民対象の説明会も開催している。本年度は別表のとおり1件の地元説明会を開催した。

〔資料等の貸出〕

平成12年度に各機関等に貸し出した資料は、写真11件78点、出土遺物（レプリカ・土層転写を含む）7件216点である。

記者発表及び地元説明会

発掘調査　地元説明会			
遺跡名	開催日	内容	見学者
灘区都賀遺跡	平成12年4月1日	弥生時代の集落跡	75名

報道関係　資料提供		
遺跡名	発表日	内容
東灘区深江北町遺跡	平成12年9月21日	幻の「葦屋驛家」関連遺跡の発見
西区新方遺跡	平成12年12月7日	弥生時代前期人骨に装着された3対の指輪
灘区西求女塚古墳	平成13年1月30日	墳丘前方部の構造や形状の確認調査

〔刊行物〕

平成12年度の刊行物は以下の12点である。

(1) 平成10年度　神戸市埋蔵文化財年報　平成13年3月発行　頒価1,600円
(2) 住吉宮町遺跡第19次・第20次発掘調査報告書　平成13年3月発行　非売品
(3) 住吉宮町遺跡第24次・第32次発掘調査報告書　平成13年3月発行　頒価2,600円
(4) 上沢遺跡発掘調査報告書　－第35次調査－　平成13年1月発行　頒価　900円
(5) 萩原城遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書　－第1・3・5次－
平成13年3月発行　頒価1,300円
(6) 松野遺跡発掘調査報告書－第3～7次調査－　平成13年3月発行　頒価3,000円
(7) 二葉町遺跡発掘調査報告書　第3・5・7・8・9・12次調査
平成13年3月発行　頒価3,000円
(8) 御蔵遺跡　第4・6・14・32次発掘調査報告書　平成13年3月発行　頒価2,500円
(9) 御蔵遺跡　第17・38次発掘調査報告書　平成13年3月発行　頒価　600円
(10) 神戸の古墳（企画展示図録）　平成12年7月発行　頒価　500円
(11) 色彩の考古学－「もの」から見た歴史の色－　（特別展示図録）
平成12年10月発行　頒価　600円
(12) 神戸市埋蔵文化財分布図　平成13年3月発行　頒価　800円

3．文化財保護条例　平成９年度に制定された『神戸市文化財の保護及び文化財等を取り巻く文化環境の保全に関する条例』に基づき、平成12年度に文化財保護審議会に諮問し、答申を受けた指定文化財・登録文化財等のうち、埋蔵文化財に関係するものはなかった。

4．指導事業　平成12年度の文化財保護法に基づく届出・通知については別表のとおりであるが、前年度に比較すると、32件増加している。先年度より開始された『神戸市民の住環境をまもりそだてる条例』に基づく事前届出制度における事前届出書の閲覧により、発掘届の提出の指導をさらに徹底してきた。その結果、周知の埋蔵文化財包蔵地内における建築行為に際しては、ほぼ遺漏なく、発掘届が提出されるようになってきた。開発行為事前審査等各種申請や工事立会の件数は、ほぼ前年度と同じである。試掘調査は、前年度に比較すると若干減少している。

また、本年度より埋蔵文化財届出事務に関する地図情報システムの運用を開始した。このシステムは、埋蔵文化財が影響を受ける土地の、地区別、事業別のデータの統計処理及び埋蔵文化財の取扱いの細目を把握するために導入したもので、開発される土地が周知の埋蔵文化財包蔵地であるかどうか、過去の取扱いの有無、周辺地の取扱い等を把握し、届出・申請に対する迅速かつ正確な回答を行うためのものである。

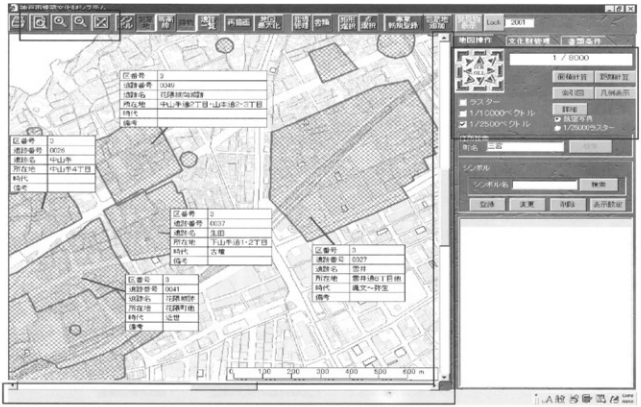


fig. 8　地図情報システム画面

このシステムの特徴としては、申請地における届出・通知ならびに各種開発申請にかかる埋蔵文化財の保護に関する取扱いなどの行政指導情報および、試掘調査や発掘調査の記録情報も、地図情報上で管理する機能を有する点である。埋蔵文化財包蔵地や開発事業範囲などの図形情報を入力、管理するとともに、それに関連する文字情報データベースも入力、管理できるものである。

機能概要一覧表

地図基本機能	地図切り替え・拡大・縮小	地図を切り替え，任意の拡大表示を行う。
	地図スクロール	マウスの右ボタンで，画面上をスクロールする。
	地図印刷	画面表示地図をプリンターで出力する。
	地図レイヤー表示	詳細図表示時に地図表示のレイヤーを選択する。
検索機能	住所検索	住所リストから住所を指定し，その領域で地図表示を行う。
	属性検索	年度や届出別で事業地を検索し，その場所を地図表示する。
事業地管理機能	申請地入力・編集・削除	申請地をポリゴンで入力し，形状の編集を行う。
	申請地情報入力・参照	申請地の属性情報の入力・スキャナー入力書類の登録・表示を行う。 申請地の管理状況を色別表示する。
	届出・通知書回答書類出力	申請者への回答書（決議書）を出力する。
包蔵地管理機能	包蔵地入力・編集・削除	包蔵地をポリゴンで入力し，変更の際は形状の編集を行う。
	包蔵地情報入力・参照	包蔵地の属性情報を入力し，参照する（遺跡名・時代・内容）。

事業地検索機能（地図上から）　事業地検索機能（属性から）　住所検索機能　シンボル検索機能

地図情報・属性データ（文字データベース）の検索機能として以下の機能を用意した。
- 住所検索機能
- 事業地検索機能
- 届出書類検索機能
- シンボル検索機能
- 包蔵地種別検索機能
- 遺跡検索機能

fig. 9　検索機能画面

5．調査事業

平成12年度の発掘調査事業は、民間事業関連のすべて・公共事業関連の調査の一部及び補助事業の大部分については教育委員会の直営で実施し、公共事業関連の調査の大部分と補助事業の一部を㈱神戸市体育協会に委託して実施した。

本市では便宜上、阪神・淡路大震災に起因する復旧・復興事業関連調査と起因しない通常事業関連調査を区別し処理している。全体の調査件数及び発掘調査面積は別表のとおりである。平成11年度と比較すると調査件数はほぼ同数であるが、調査面積が約３割増加している。ただ長期的に見れば震災後の事業量は減少しており、調査面積の増加は本年度に限ってのものである。

また、前年度まで復興事業に該当していた住宅供給事業が、通常事業に当てはまるようになったため、通常事業の調査件数が約３割増加しており、調査面積でも約６割増加している。特に、民間の通常事業関連で増加が顕著である。

調査面積を個別に見てみると、ほぼ前年度と同じく、100㎡以下のものが、全体の５割を占めており、500㎡以下のものが全体の約８割を占めており、小規模な発掘調査が主になっている傾向にある。

今年度の発掘調査に要した総費用は754,317千円である。

復興事業に伴う調査

復興事業に伴う調査は７２件で、このうち５６件が個人及び中小企業が事業者の国庫補助事業で、大企業及び公共の事業者の経費負担による受託調査は１６件である。

前年度に比べると、調査件数、調査面積とも約１割程度減少している。

国庫補助事業は168,684千円で、内訳は事前の試掘・確認調査が12,305千円、個人及び中小企業の発掘調査が144,247千円、その他整理・報告書作成等が12,132千円である。

6．市内発掘調査の概要

平成12年度の主な調査成果を時代順にまとめる。

長田区**長田神社境内遺跡**では、古墳時代前期の柱穴・溝・落ち込み等が検出された。落ち込み内より、旧石器時代の尖頭器や縄文時代の異形石器等が出土している。当遺跡において、旧石器時代の遺物が確認されたのは、はじめてである。

西区**寒風遺跡**では、古墳時代後期の竪穴住居・掘立柱建物・土坑等が検出された。特筆すべきものとして土坑内から人形土製品が４点出土した。以前の第２次調査でも１点出土しているが、神戸市内では寒風遺跡でのみ確認されている。全国的にみると、静岡県や九州地方で比較的多く発見されているが、近畿地方では発見例は少ない。

東灘区**深江北町遺跡**では、平安時代後期の掘立柱建物や溝・土坑等が検出された。特に「驛」の墨書土器がまとまって確認できたことから、古代山陽道の「葦屋驛家」に関連する官衙的な施設である可能性が推定される。

文化財保護法に基づく届出・通知，試掘依頼等

No.	内容		件数
1	発見，発掘届・通知（保護法57条関係）		813件
	i 調査のための発掘届（57条第1項）	2件	
	民間事業に伴う発掘届（57－2）	759件	
	通常事業関連	613件	
	復興事業関連	146件	
	ii 公共事業に伴う発掘通知（57－3）	52件	
	通常事業関連	35件	
	復興事業関連	17件	
	iii 発見届・発見通知（57－5・6）	0件	
2	発掘調査の報告（保護法98条2）		87件
3	開発行為事前審査等各種申請		149件
4	試掘調査（依頼件数）		302件
	i 通常事業関連	234件	
	通常公共関連	25件	
	通常民間関連	209件	
	ii 復興事業関連	68件	
	復興公共関連	10件	
	復興民間関連	58件	
5	工事立会		39件

発掘調査，整理作業件数一覧

No.	内容		件数
1	発掘調査（大規模確認調査も含む）		116件
	i 公共事業に伴う発掘調査	33件	
	通常事業関連	16件	
	復興事業関連	17件	
	ii 民間事業に伴う発掘調査	75件	
	通常事業関連	20件	
	復興事業関連	55件	
	iii 圃場整備事業に伴う発掘調査	8件	
2	整理作業（復興調査整理作業を含む）		7件

発掘調査面積（単位：㎡）

	公共事業関連	民間事業関連	計	延べ調査面積
通常事業	16,371	4,669	21,040	27,835
復興事業	17,184	6,326	23,510	36,502
計	33,555	10,995	44,550	64,337

発掘調査面積別件数

調査面積	件数	調査面積	件数
～ 100㎡	58	1,001 ～ 2,000㎡	6
101 ～ 300㎡	26	2,001 ～ 5,000㎡	7
301 ～ 500㎡	12	5,001㎡以上	0
501 ～ 1,000㎡	7	合計	116

平成12年度埋蔵文化財発掘調査一覧表（復興事業に伴う調査）（1）

No.	遺跡名	所在地	調査主体	調査担当者	掘削面積 試調査面積	調査期間	調査内容	調査原因
1	住吉宮町遺跡第35次調査	東灘区住吉宮町1丁目7～26	神戸市教育委員会	阿部 敬生	180㎡ 360㎡	13．2．27～13．3．31 次年度継続	須恵器窯から須恵器、土師器、埴輪、瓦器出土	個人住宅建設 （国庫補助事業）
2	郡家遺跡第67次調査	東灘区御影町御影字下山田71－5～7	神戸市教育委員会	池田 敏 阿部 敬生	230㎡ 460㎡	12．8．9～12．8．30	古墳時代後期の落ち込み、溝、平安時代前期の掘立柱建物、溝	個人住宅建設 （国庫補助事業）
3	郡家遺跡第68次調査	東灘区御影町字郡本1557番地	神戸市教育委員会	阿部 敬生	65㎡ 65㎡	12．8．25～12．8．30	古墳時代須恵器、土師器	個人住宅建設 （国庫補助事業）
4	郡家遺跡第69次調査	東灘区御影中町2丁目1282－7	神戸市教育委員会	中谷 正	27㎡ 46㎡	12．11．16～12．11．28	古墳時代中期～後期の溝、土坑、ピット、中世の溝、ピット	個人住宅建設 （国庫補助事業）
5	篠原遺跡第21次調査	灘区篠原南町2丁目26－3	神戸市教育委員会	黒田 恭正	98㎡ 278㎡	12．9．19～12．10．16	弥生時代後期竪穴、掘立跡跡、中世の掘立住建物、土坑	個人住宅建設 （国庫補助事業）
6	大石東遺跡第3次調査	灘区大石東町3丁目116・119	神戸市教育委員会	池田 敏	40㎡ 40㎡	12．7．6～12．7．13	平安時代末～鎌倉時代初頭の溝	個人住宅建設 （国庫補助事業）
7	西求女塚古墳第12次調査	灘区都通3丁目	神戸市教育委員会	内藤 俊彦	150㎡ 150㎡	13．2．1～13．3．31 次年度継続	前方部墳丘裾部、段築、テラス部	範囲確認調査 （国庫補助事業）
8	甘藷遺跡第19次調査	中央区東雲通1丁目4－24	神戸市教育委員会	黒田 恭正	153㎡ 306㎡	12．12．14～13．1．30	平安時代～鎌倉時代の溝、ピット、安土桃山時代の溝、土坑	診療所再建 （国庫補助事業）
9	生田町古墳群第1次調査	中央区生田町2丁目385他	神戸市教育委員会	谷 正俊	440㎡ 440㎡	12．4．1～12．4．14 翌年度から継続	古墳時代後期の溝または土坑状遺構、近世の溝、ピット、土坑	共同住宅建設 （国庫補助事業）
10	下山手遺跡第3次調査	中央区下山手通8丁目－14	神戸市教育委員会	池田 敏	400㎡ 400㎡	12．4．25～12．5．29	弥生時代後期末～古墳時代後期掘立柱建物、落ち込み	共同住宅建設 （国庫補助事業）
11	兵庫津遺跡第23次調査	兵庫区西柳原町8－17	神戸市教育委員会	岡邨 功	266㎡ 266㎡	12．6．20～12．7．7	近世後半～末の溝、ピット、落ち込み	共同住宅建設 （国庫補助事業）
12	兵庫松本遺跡第3次－1～5調査	兵庫区松本通2丁目	財神戸市体育協会	口野・阿部 浅谷・阿部 中谷	320㎡ 380㎡	12．8．2～13．3．15	弥生時代後期の溝、落ち込み、ピット、河道	区画整理事業
13－1	上沢遺跡第37次調査	兵庫区松本通8丁目5－8	財神戸市体育協会	平田 朝子	300㎡ 630㎡	12．4．17～12．6．2	中世の河道、ピット	教会再建 （国庫補助事業）
13－2	上沢遺跡第39次調査	兵庫区松本通5丁目5	財神戸市体育協会	能伯 二郎	117㎡ 351㎡	12．4．27～12．6．1	弥生時代後期の土坑、溝、弥生時代終末～古墳時代初頭の土坑、落ち込み、古墳時代～平安時代のピット	共同住宅建設 （国庫補助事業）
13－3	上沢遺跡第42次調査	兵庫区松本通8丁目	財神戸市体育協会	須藤 宏	75㎡ 300㎡	12．9．5～12．9．29	弥生時代末の溝、平安時代の掘立柱建物、平安時代～中世の河道	個人住宅建設 （国庫補助事業）

平成12年度埋蔵文化財発掘調査一覧表（復興事業に伴う調査）（2）

No.	遺跡名	所在地	調査主体	調査担当者	掘削面積 延調査面積	調査期間	調査内容	調査原因
14	上沢遺跡第40次調査	長田区五番町２丁目７－13	(財)神戸市体育協会	関野　豊	20㎡ 20㎡	12．5．23～12．5．30	飛鳥時代～奈良時代の溝	事務所建設 (国庫補助事業)
15	上沢遺跡第41次調査	兵庫区上沢通７丁目１番	(財)神戸市体育協会	関野　豊	100㎡ 100㎡	12．9．4～12．9．19	弥生時代～奈良時代の溝、土坑、自然流路	山手幹線道路拡幅
16	上沢遺跡第43次調査	兵庫区上沢通８丁目９・12他	神戸市教育委員会	中谷　正	81㎡ 126㎡	12．10．19～12．11．8	古墳時代初頭～平安時代溝、土坑、中世の溝、土坑	共同住宅建設 (国庫補助事業)
17	上沢遺跡第44次調査	兵庫区上沢通８丁目９・38、39	神戸市教育委員会	池田　敏	83㎡ 83㎡	13．2．20～13．3．21	古墳時代初頭～中期の竪穴住居６棟、掘立柱建物１棟、ピット、落ち込み	個人住宅建設 (国庫補助事業)
18	中遺跡	北区八多町中	(財)神戸市体育協会	須藤　宏	280㎡ 280㎡	12．5．8～12．5．22	縄文時代二次石器、弥生時代石器、鎌倉時代～室町時代の溝、ピット、土坑	区画整理事業
19	五番町遺跡第７次調査	長田区五番町７丁目３－１・５・６	神戸市教育委員会	川上　厚志	268㎡ 804㎡	12．6．2～12．7．31	縄文時代晩期の流路、土坑、ピット、弥生時代末～古墳時代初頭の溝、土坑、ピット、井戸、中世の大型土坑	共同住宅建設 (国庫補助事業)
20	五番町遺跡第９次調査	長田区四番町５丁目	(財)神戸市体育協会	佐伯　二郎 井尻　格	600㎡ 950㎡	12．8．15～12．10．19	古墳時代以前の流路、古墳時代の溝	山手幹線道路拡幅
21	御蔵遺跡第32次調査	長田区御蔵通６丁目	(財)神戸市体育協会	西岡巧・中野雅美・内藤雅規・井尻　格・石黒立人・岡野・阿部功	522㎡ 1,000㎡	12．4．5～13．2．27	古墳時代初頭の溝、落ち込み、ピット、奈良時代～平安時代の溝、ピット 平成12年度報告書刊行済	区画整理事業
13-4	御蔵遺跡第33次調査	長田区御蔵通６丁目19－14	(財)神戸市体育協会	須藤　宏	30㎡ 180㎡	12．4．6～12．4．21	古墳時代前期の溝 平成14年度報告書刊行	個人住宅建設 (国庫補助事業)
13-5	御蔵遺跡第34次調査	長田区御蔵通５丁目40－３	(財)神戸市体育協会	内藤　俊哉	62㎡ 62㎡	12．4．10～12．5．16	奈良時代の掘立柱建物 平成14年度報告書刊行	個人住宅建設 (国庫補助事業)
13-6	御蔵遺跡第35次調査	長田区御蔵通５丁目40－４	(財)神戸市体育協会	内藤　俊哉	68㎡ 68㎡	12．4．10～12．5．16	奈良時代末の掘立柱建物、平安時代時代後期の井戸 平成14年度報告書刊行	個人住宅建設 (国庫補助事業)
13-7	御蔵遺跡第36次－１・２調査	長田区御蔵通５丁目40－５	(財)神戸市体育協会	内藤　俊哉 井尻　格	68㎡ 96㎡	12．4．10～12．5．16 12．9．29～12．10．19	奈良時代～平安時代の掘立柱建物、溝、ピット 平成14年度報告書刊行	個人住宅建設 (国庫補助事業)
13-8	御蔵遺跡第39次調査	長田区御蔵通６丁目50他	(財)神戸市体育協会	阿部　功	70㎡ 210㎡	12．8．1～12．8．19	奈良時代、奈良時代～平安時代の溝、ピット 平成14年度報告書刊行	個人住宅建設 (国庫補助事業)
13-9	御蔵遺跡第40次調査	長田区御蔵通４丁目７－１他	(財)神戸市体育協会	阿部　功	118㎡ 118㎡	12．8．24～12．8．30	奈良時代～中世の遺物包含層	個人住宅建設 (国庫補助事業)
13-10	御蔵遺跡第41次調査	長田区御蔵通５丁目41、41－２	(財)神戸市体育協会	井尻　格	50㎡ 100㎡	12．9．29～12．10．19	奈良時代の落ち込み、奈良時代～平安時代・中世の掘立柱建物 平成14年度報告書刊行	個人住宅建設 (国庫補助事業)

平成12年度埋蔵文化財発掘調査一覧表（復興事業に伴う調査）（3）

No.	遺跡名	所在地	調査主体	調査担当者	掘削面積 確認調査面積	調査期間	調査内容	調査原因
13 -11	御蔵遺跡第42次調査	長田区御蔵通4丁目8　7、12	神神戸市体育教会	石島　三和	45㎡ 90㎡	12.12.6～12.12.14	中世の溝、掘立柱建物	個人住宅建設 （国庫補助事業）
13 -12	御蔵遺跡第43次調査	長田区御蔵通5丁目73－19他	神神戸市体育教会	阿部　功	30㎡ 30㎡	13.3.26～13.3.29 平成14年度報告書刊行	自然流路	個人住宅建設 （国庫補助事業）
22	御蔵遺跡第38次・1～3調査	長田区御蔵通4丁目	神神戸市体育教会	阿部　功	139㎡ 139㎡	12.6.30～12.9.5 平成12年度報告書刊行済	奈良時代～中世の溝、ピット	区画整理事業
23	神楽遺跡第13次調査	長田区神楽町4丁目7－3	神戸市教育委員会	川上　厚志	22㎡ 22㎡	12.9.4～12.9.12	中世のピット	個人住宅建設 （国庫補助事業）
24	長田神社境内遺跡第14次調査	長田区西山町1丁目2－6	神戸市教育委員会	須藤　宏	320㎡ 690㎡	13.1.18～13.3.22	縄文時代黒曜石器、古墳時代の溝、落ち込み、中世の溝、土坑、掘立柱建物、近世の掘立柱建物	寺院本堂再建 （国庫補助事業）
25	松野遺跡第16次調査	長田区松野通4丁目	神神戸市体育協会	黒田・佐伯 阿部敬・ 岡野	537㎡ 822㎡	12.5.8～12.11.27	弥生時代のピット、土坑	区画整理事業
13 -13	松野遺跡第17次調査	長田区松野通4丁目	神神戸市体育協会	阿部　敬生	22㎡ 22㎡	12.9.4～12.9.7 平成14年度報告書刊行	弥生時代のピット	個人住宅建設 （国庫補助事業）
13 -14	松野遺跡第18次調査	長田区松野通4丁目	神神戸市体育協会	岡野　豊	40㎡ 40㎡	12.10.4～12.10.6 平成14年度報告書刊行	弥生時代？の溝	個人住宅建設 （国庫補助事業）
13 -15	松野遺跡第19次調査	長田区松野通4丁目	神神戸市体育協会	岡野　豊	80㎡ 80㎡	12.10.19～12.11.13 平成14年度報告書刊行	鎌倉時代の掘立柱建物、井戸、土坑、ピット	個人住宅建設 （国庫補助事業）
13 -16	松野遺跡第20次調査	長田区松野通4丁目	神神戸市体育協会	岡野　豊	50㎡ 50㎡	12.10.19～12.11.13 平成14年度報告書刊行	弥生時代？のピット	個人住宅建設 （国庫補助事業）
13 -17	松野遺跡第21次調査	長田区松野通4丁目	神神戸市体育協会	岡野　豊	44㎡ 44㎡	12.11.7～12.11.13 平成14年度報告書刊行	弥生時代？の溝、土坑、ピット	個人住宅建設 （国庫補助事業）
13 -18	松野遺跡第22次調査	長田区松野通4丁目	神神戸市体育協会	岡野　豊	45㎡ 45㎡	12.11.14～12.11.24 平成14年度報告書刊行	弥生時代のピット	個人住宅建設 （国庫補助事業）
13 -19	松野遺跡第23次調査	長田区松野通4丁目	神神戸市体育協会	阿部　功	56㎡ 56㎡	12.12.18～12.12.25 平成14年度報告書刊行	弥生時代？の土坑、ピット	個人住宅建設 （国庫補助事業）
13 -20	松野遺跡第25次調査	長田区松野通4丁目	神神戸市体育協会	口野　博史 浅谷　誠彦	60㎡ 60㎡	13.2.21～13.3.1	古墳時代のピット	区画整理事業
13 -21	松野遺跡第26次調査	長田区松野通4丁目	神神戸市体育協会	岡野　豊	60㎡ 60㎡	13.3.15～13.3.27	弥生時代？のピット、古墳時代後期の土坑	個人住宅建設 （国庫補助事業）

平成12年度埋蔵文化財発掘調査一覧表（復興事業に伴う調査）（4）

No.	遺跡名	所在地	調査主体	調査担当者	調査面積 届出面積	調査期間	調査内容	調査原因
26	松野遺跡第24次調査	長田区若松町7丁目	神戸市教育委員会	口野 博史 浅谷 誠吾	300㎡ 300㎡	13．1．29～13．2．27	古墳時代の掘立柱建物、溝、ピット、中世の耕作痕	新長田駅南再開発
27	水笠遺跡第4次調査	長田区水笠通3丁目	財神戸市体育協会	吉岡 巧次	250㎡ 250㎡	12．5．8～12．6．2	弥生時代の溝、落ち込み、ピット	区画整理事業
13-22	水笠遺跡第5次調査	長田区水笠通3丁目	財神戸市体育協会	吉岡 巧次	46㎡ 46㎡	12．6．20～12．7．3	弥生時代？の柱列、溝、ピット 平成14年度報告書刊行	個人住宅建設（国庫補助事業）
13-23	水笠遺跡第6次調査	長田区水笠通3丁目	財神戸市体育協会	関野 豊	40㎡ 40㎡	12．7．13～12．8．1	弥生時代？の溝、ピット 平成14年度報告書刊行	個人住宅建設（国庫補助事業）
13-24	水笠遺跡第7次調査	長田区水笠通3丁目	財神戸市体育協会	関野 豊	600㎡ 2,400㎡	12．7．13～12．8．1	弥生時代の溝、ピット、落ち込み 平成14年度報告書刊行	個人住宅建設（国庫補助事業）
13-25	水笠遺跡第8次調査	長田区水笠通3丁目	財神戸市体育協会	関野 豊	347㎡ 700㎡	12．7．17～12．8．4	弥生時代の溝 平成14年度報告書刊行	個人住宅建設（国庫補助事業）
13-26	水笠遺跡第9次調査	長田区水笠通3丁目	財神戸市体育協会	関野 豊	45㎡ 45㎡	12．7．12～12．8．4	弥生時代？の溝、土坑、ピット 平成14年度報告書刊行	個人住宅建設（国庫補助事業）
13-27	水笠遺跡第10次調査	長田区水笠通3丁目	財神戸市体育協会	関野 豊	68㎡ 68㎡	12．7．12～12．8．4	弥生時代の溝、落ち込み、ピット 平成14年度報告書刊行	個人住宅建設（国庫補助事業）
13-28	水笠遺跡第11次調査	長田区水笠通3丁目	財神戸市体育協会	関野 豊	25㎡ 25㎡	12．8．7～12．8．11	弥生時代？の溝 平成14年度報告書刊行	個人住宅建設（国庫補助事業）
13-29	水笠遺跡第12次調査	長田区水笠通3丁目	財神戸市体育協会	阿部 敬生	35㎡ 35㎡	12．9．8～12．9．19	遺構は検出されず 平成14年度報告書刊行	個人住宅建設（国庫補助事業）
13-30	水笠遺跡第13次調査	長田区水笠通3丁目	財神戸市体育協会	関野 豊	20㎡ 20㎡	12．9．21～12．9．26	遺構は検出されず 平成14年度報告書刊行	個人住宅建設（国庫補助事業）
13-31	水笠遺跡第14次調査	長田区水笠通3丁目	財神戸市体育協会	関野 豊	30㎡ 30㎡	12．9．21～12．9．26	弥生時代の溝、ピット、平安時代の井戸、ピット 平成14年度報告書刊行	個人住宅建設（国庫補助事業）
13-32	水笠遺跡第15次調査	長田区水笠通3丁目	財神戸市体育協会	関野 豊	220㎡ 220㎡	13．2．14～13．3．9	弥生時代の溝、土坑、ピット 平成14年度報告書刊行	個人住宅建設（国庫補助事業）
28	二葉町遺跡第12次調査	長田区二葉町6丁目・久保町5丁目	財神戸市体育協会	安田・前田 須藤・富山 阿部坊	2,145㎡ 2,145㎡	12．4．3～13．2．8	弥生時代前期土坑、平安時代掘立柱建物、平安時代末～鎌倉時代掘立柱建物他 平成12年度報告書刊行済	新長田駅南再開発
29	二葉町遺跡第13次調査	長田区鹿塚町5丁目7番	財神戸市体育協会	浅谷 誠吾	1,500㎡ 1,500㎡	12．4．4～12．5．22	中世の耕作痕、溝	新長田駅南再開発

平成12年度埋蔵文化財発掘調査一覧表（復興事業に伴う調査）（5）

No.	遺跡名	所在地	調査主体	調査担当者	掘削面積 …… 届調査面積	調査期間	調査内容	調査原因
30	二葉町遺跡第14次調査	長田区久保町5丁目	神戸市体育協会	阿部　功	2,160㎡ …… 2,160㎡	13．2．13～13．3．21	弥生時代中期の溝、中世の溝	新長田駅南再開発
31	成町遺跡第30次調査	須磨区大田町3丁目1番24号	神戸市教育委員会	川上　厚志	290㎡ …… 460㎡	12．8．1～12．8．31	弥生時代中期土坑、ピット、弥生時代後期末廣伏遺構、落ち込み、古墳時代前期～鎌倉時代前半の溝	店舗建築 （国庫補助事業）
32	成町遺跡第31次調査	須磨区大田町3丁目5、19	神戸市教育委員会	山本　雅和	268㎡ …… 908㎡	12．10．2～12．12．26	弥生時代前期前半土坑、中期竪穴住居平地式住居？、後期末竪穴住居、古墳時代前期～鎌倉時代前半掘立柱建物他	共同住宅建設 （国庫補助事業）
33	行幸町遺跡第1次調査	須磨区行幸町3丁目	神戸市体育協会	西岡　巧次 石島　三和 阿部　功	2,400㎡ …… 3,236㎡	12．7．26～12．10．20 13．1．9～13．3．23	飛鳥時代～奈良時代の大溝、溝、土坑 掘立柱建物	中央幹線街路築造
34	垂水旧向遺跡第33次調査	垂水区天ノ下町	神戸市体育協会	石島　三和	1,450㎡ …… 3,900㎡	12．5．10～12．8．21	弥生時代末のピット、古墳時代の溝、土坑、ピット、平安時代末の掘立柱建物、中世の溝、土坑	市街地再開発事業
35	寺塚遺跡第8次調査	西区伊川谷町潤和字寺塚	神戸市教育委員会	黒田　慶正 中谷　正	337㎡ …… 337㎡	12．4．11～12．7．4	古墳時代後期の竪穴住居10棟、掘立柱建物2棟、土坑、人形土製品	個人住宅建設 （国庫補助事業）
36	新方遺跡	西区伊川谷町潤和字六反田072－1、2	神戸市教育委員会	中谷　正	115㎡ …… 115㎡	13．2．20～13．3．2	平安時代後期掘立柱建物3棟、柵、落ち込み、土坑、ピット	工場建設 （国庫補助事業）
37	丸塚遺跡第7次調査	西区玉津町丸塚西替地2街区1号	神戸市教育委員会	中谷　正	47㎡ …… 47㎡	13．3．14～13．3．19	中世の溝	共同住宅建設 （国庫補助事業）
38	目輪寺遺跡第7次調査	西区玉津町小山字目輪寺61－16	神戸市教育委員会	山本　雅和	720㎡ …… 720㎡	12．4．1～12．5．12 前年度から継続	弥生時代後期後半の竪穴住居1棟、土坑、ピット、平安時代後期末柱墓、掘立柱建物　平成13年度報告書刊行済	宅地造成 （国庫補助事業）
39	今津遺跡第16次調査	西区玉津町今津字石羽68－1、549－1	神戸市教育委員会	阿部　弥生	160㎡ …… 160㎡	12．4．11～12．4．24	弥生時代末～古墳時代初頭の溝	個人住宅建設 （国庫補助事業）

平成12年度埋蔵文化財発掘調査一覧表（通常事業に伴う調査）（１）

No.	遺跡名	所在地	調査主体	調査担当者	掘削面積 延調査面積	調査期間	調査内容	調査原因
1	深江北町遺跡第９次調査	東灘区深江北町１丁目３・４・５・６	神戸市教育委員会	山本　雅和 阿部　敬生 中谷　正	2,670㎡ 3,610㎡	12．5．8～12．7．31	奈良～平安時代の柵、掘立柱建物、溝大型土坑、流路他、『承和』銘木簡、『釋』墨書土器 平成13年度報告書刊行	共同住宅建設
2	郡家遺跡第66次調査	東灘区御影町御影字岸本1549－14	神戸市教育委員会	池田　毅	35㎡ 35㎡	12．6．22～12．7．4	弥生時代後期～古墳時代前期のピット、溝、落ち込み	個人住宅建設（国庫補助事業）
3	西平野遺跡第３次－１・２調査	東灘区御影町字上の山	神戸市教育委員会	須藤　宏 中居さやか	340㎡ 372㎡	12．5．8～12．5．22 12．8．4～12．8．21	弥生時代のピット、土器溜まり、古墳時代の土器埋納土坑、中世の石列、土器溜まり	区画整理事業
4	都賀遺跡第16次調査	灘区神前町３丁目９番	神戸市教育委員会	関野　豊	450㎡ 1,350㎡	12．4．1～12．4．28 前年度から継続	弥生時代中期の方形周溝墓？、弥生時代末の溝、ピット、石組、中世の掘立柱建物	公園造成事業
5	雲井遺跡第11次調査	中央区雲井通２丁目－５	神戸市教育委員会	池田　毅	60㎡ 60㎡	12．10．11～12．10．24	弥生時代中期の溝、ピット	店舗ビル建設
6	雲井遺跡第12次調査	中央区琴ノ緒町３丁目	神戸市教育委員会	富山　直人	100㎡ 100㎡	12．3．26～13．3．31 次年度へ継続	遺物包含層検出	個人住宅建設（国庫補助事業）
7	雲井遺跡・日暮遺跡（試掘）	中央区二宮町、旭通、雲井通、日暮通、八雲通、東雲通、雲井町	神戸市教育委員会	池田　毅	54㎡ 54㎡	13．1．26～13．2．8	雲井遺跡では弥生時代中期の遺物包含層、古墳時代後期の遺物、日暮遺跡では中世の遺物を確認した	詳細確認調査（国庫補助事業）
8	小野柄遺跡第１次調査	中央区小野柄通２丁目	神戸市教育委員会	内藤　俊哉 井尻　格	900㎡ 2,700㎡	12．5．29～12．8．1	縄文時代後期の落ち込み、弥生時代の溝、ピット、中世以前の溝	都市計画関連道路関連住宅建設事業
9	熊内遺跡第３次調査	中央区熊内橋通７丁目－１	神戸市教育委員会	安田　滋	3,400㎡ 3,400㎡	13．3．31～13．3．31 次年度へ継続	旧市電車庫、搬車台基礎	市バス車庫跡地整備事業
10	下山手遺跡第４次調査	中央区下山手通８丁目５番１	神戸市教育委員会	中谷　正	15㎡ 15㎡	13．3．5～13．3．8	近世の暗渠	個人住宅建設（国庫補助事業）
11	上沢遺跡第38次調査	兵庫区松本通８丁目	神戸市体育協会	富山　直人	398㎡ 722㎡	12．4．24～13．1．23	弥生時代後期の溝、平安時代前半の掘立柱建物、中世のピット	道路建設事業
12	中遺跡	北区八多町中143－１他	神戸市教育委員会	川上　厚志	500㎡ 500㎡	12．5．18～12．5．26	溝、ピット	商業施設建設
13	上小名田遺跡	北区八多町吉尾字上小名田	神戸市体育協会	富山　直人	560㎡ 560㎡	12．11．27～12．12．21	中世の溝、土坑、ピット	汚水管敷設事業
14	湯山遺跡第５次調査	北区有馬町	神戸市体育協会	富山　直人	450㎡ 450㎡	12．8．2～12．10．18	奥ノ院と考えられる掘立柱建物、石組等	銀の湯建設事業
15-1	勝雄遺跡第７次　１調査	北区淡河町勝雄字南垣内1294他	神戸市体育協会	西岡　巧次	197㎡ 197㎡	12．11．8～12．11．29	鎌倉時代の土坑、ピット	圃場整備事業

平成12年度埋蔵文化財発掘調査一覧表（通常事業に伴う調査）（2）

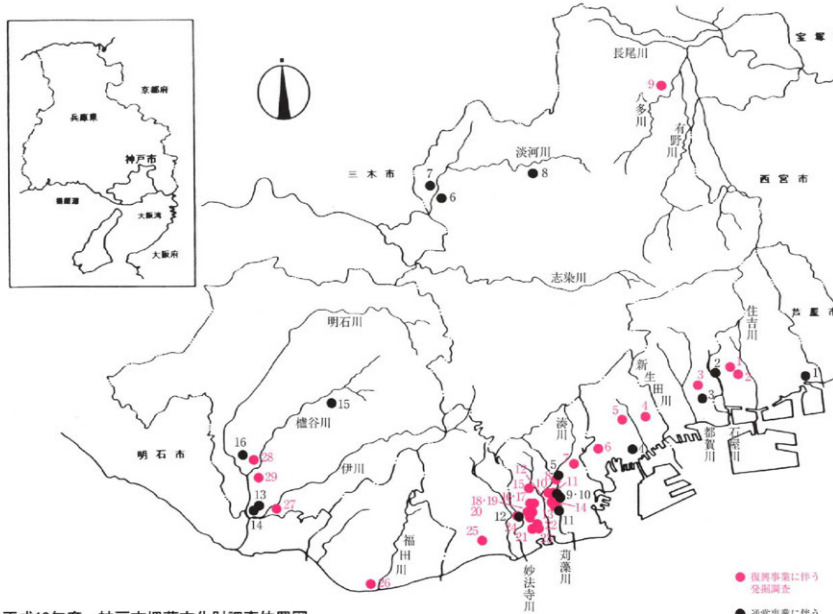
No.	遺跡名	所在地	調査主体	調査担当者	部所面積 発掘調査面積	調査期間	調査内容	調査原因
15 -2	勝雄遺跡第7次－2調査	北区淡河町勝雄字南垣内1274－1	神神戸市体育協会	西岡　巧次	17㎡ 17㎡	12.11.24～12.11.27	中世のピット	圃場整備事業 （国庫補助事業）
16	勝雄遺跡第8次調査	北区淡河町勝雄48他地先	神神戸市体育協会	西岡　巧次	800㎡ 800㎡	12.11.8～13.12.9	弥生時代後期末～古墳時代初頭の竪穴住居、中世の溝、ピット、落ち込み	圃場整備事業
17	本之元遺跡第4次調査	北区淡河町南畑尾字本之元	神神戸市体育協会	西岡　巧次	250㎡ 250㎡	12.4.6～12.4.21	ピット、落ち込み	圃場整備事業
18	野瀬遺跡第1次調査	北区淡河町字津本他	神神戸市体育協会	笹伯　二郎 阿部　敬生	3,198㎡ 3,198㎡	12.11.7～13.2.5	中世の溝、土坑、ピット	圃場整備事業
18 -2	野瀬遺跡第1－2次調査	北区淡河町野瀬字中嶋、沢	神神戸市体育協会	井尻　格	380㎡ 380㎡	13.1.26～13.2.13	中世のピット、落ち込み、牛馬足跡	圃場整備事業 （国庫補助事業）
19	五番町遺跡第8次調査	長田区四番町5丁目	神神戸市体育協会	笹伯　二郎	1,480㎡ 1,480㎡	12.8.16～12.10.25	古墳時代の溝、流路	長田駅東住宅建設事業
20	五番町遺跡第10次調査	長田区四番町6丁目4	神戸市教育委員会	川上　厚志	200㎡ 400㎡	13.3.13～13.3.31	縄文時代後期の土抗、弥生時代最終末？の溝	学生寮建設
21	御蔵遺跡第37次－1～4調査	長田区御蔵通4丁目	神神戸市体育協会	口野　博史 井尻　格 阿部　功	195㎡ 248㎡	12.5.29～12.11.7	飛鳥時代～平安時代の井戸、溝、落ち込み、ピット 平成14年度報告書刊行	国道28号線拡幅
22	戎町遺跡第32次調査	須磨区大田町2丁目2、3	神戸市教育委員会	小澤・鎌山・ 瀬田・保都・堀本・ 関野・発坂・谷谷	140㎡ 280㎡	12.11.6～12.11.10 12.12.8～12.12.13	弥生時代前期～中期の溝、土抗、落ち込み、ピット、弥生時代中期～後期の溝、土抗、落ち込み、ピット	共同住宅建設
23	戎町遺跡第33次調査	須磨区平田町4丁目1番1号	神戸市教育委員会	中谷　正	80㎡ 80㎡	13.3.26～13.3.31 次年度へ継続	中世後半の溝、大型土抗、土抗、ピット	共同住宅建設
24	野田遺跡第2次調査	垂水区馬場通44番1	神戸市教育委員会	中谷　正	60㎡ 60㎡	12.12.4～12.12.7	鎌倉時代初頭の土抗、近世、近代の溝	個人住宅建設 （国庫補助事業）
25	今池尻遺跡第2次調査	西区伊川谷町潤和字合木	神神戸市体育協会	安田　滋 浅谷　誠吾	1,200㎡ 3,000㎡	12.6.30～12.10.6	弥生時代中期土抗、溝、弥生時代末～古墳時代初頭河道跡、古墳時代後期水田、河道、平安時代後期掘立柱建物他	道路建設事業 （出合新方線）
26	小寺遺跡第4次調査	西区伊川谷町カイチ190	神戸市教育委員会	池田　毅	63㎡ 63㎡	12.12.22～13.1.5	古墳時代後期の溝、落ち込み	住宅付属建物建設 （国庫補助事業）
27	新方遺跡	西区伊川谷町潤和	神戸市教育委員会	川上　厚志	182㎡ 364㎡	12.4.24～12.5.15	弥生時代後期末の竪穴住居、掘立柱建物？、古墳時代後期の溝、落ち込み	工場建設
28	丸塚遺跡第6次調査	西区玉津町丸塚字古井82－1	神戸市教育委員会	中谷　正	40㎡ 40㎡	12.8.21～12.8.31	弥生時代末～古墳時代初頭の水田	個人住宅建設 （国庫補助事業）

平成12年度埋蔵文化財発掘調査一覧表（通常事業に伴う調査）（3）

No.	遺跡名	所在地	調査主体	調査担当者	掘削面積 延調査面積	調査期間	調査内容	調査原因
29	出合遺跡第43次調査	西区玉津町出合字中ノ田474－5	神戸市教育委員会	池田　毅	35㎡ 35㎡	12．7．25～12．8．2	古墳時代初頭頃の水田	個人住宅建設（国庫補助事業）
30	出合遺跡第44次調査	西区玉津町出合字中ノ田474－5	神戸市教育委員会	池田　毅	30㎡ 30㎡	12．9．4～12．9．7	古墳時代初頭頃の水田	個人住宅建設（国庫補助事業）
31	青谷南遺跡（試掘）	西区玉津町水谷397・24他	神戸市教育委員会	西岡　巧次	180㎡ 180㎡	13．3．13～13．3．28	弥生土器、飛鳥時代～奈良時代の須恵器が出土	玉津福祉ゾーン建設（国庫補助事業）
32	栃木遺跡	西区櫨谷町首野字野手	神戸市教育委員会	中谷　正	80㎡ 80㎡	12．9．13～12．9．19	古墳時代の溝	個人住宅建設（国庫補助事業）
33	福谷遺跡（試掘）	西区櫨谷町福谷	神戸市体育協会	川上　厚志	32㎡ 32㎡	12．5．16～12．5．17	遺構、遺物は確認されなかった	汚水管布設事業
34	寺谷遺跡－1調査	西区櫨谷町寺谷字五反田	神戸市体育協会	佐伯　二郎	1,473㎡ 1,473㎡	12．6．6～12．6．12	中世の土坑	圃場整備建設（国庫補助事業）
34-2	寺谷遺跡－2調査	西区櫨谷町寺谷字五反田	神戸市体育協会	佐伯　二郎	146㎡ 146㎡	12．6．9～12．8．1	中世の溝、土坑	圃場整備事業
35	西区No.255遺跡（試掘）	西区櫨谷町寺谷字下神尻、平尾	神戸市教育委員会	井尻　格	196㎡ 196㎡	13．3．14～13．3．23	溝、土坑を検出した	圃場整備建設（国庫補助事業）
36	居住小山遺跡（試掘）	西区平野町慶明字宮端201番	神戸市教育委員会	須藤　宏 橋詰　清孝 中谷　正	40㎡ 40㎡	12．7．11～12．7．17	古墳の周溝、溝	公会堂建設（国庫補助事業）
37	居住小山遺跡（試掘）	西区平野町慶明	神戸市体育協会	阿部　功	58㎡ 58㎡	13．1．22～13．1．30	遺構、遺物は確認されなかった	汚水管布設事業
38	芝崎遺跡（試掘）	西区平野町芝崎	神戸市体育協会	阿部　功	88㎡ 88㎡	13．1．10～13．1．19	遺構、遺物は確認されなかった	汚水管布設事業
39	玉津田中遺跡（立会）	西区平野町中津字橋爪	神戸市教育委員会	丹治　康明 池田　毅	23㎡ 23㎡	12．7．13～12．7．18	弥生時代～中世の遺物が出土	農業用倉庫建設（国庫補助事業）
40	玉津田中遺跡（試掘）	西区平野町芝崎	神戸市体育協会	阿部　功	33㎡ 33㎡	13．1．10～13．1．19	遺構、遺物は確認されなかった	汚水管布設事業
41	堅田遺跡	西区平野町堅田字前田298－1、2	神戸市教育委員会	井尻　格	240㎡ 240㎡	13．2．20～13．3．9	弥生時代の溝、落ち込み、ピット	個人住宅建設（国庫補助事業）
42	王塚古墳	西区王塚台3丁目	宮内庁書陵部	池田　誠志	260㎡ 260㎡	12．9．27～12．11．17	墳丘葺石、円筒埴輪等	護岸工事

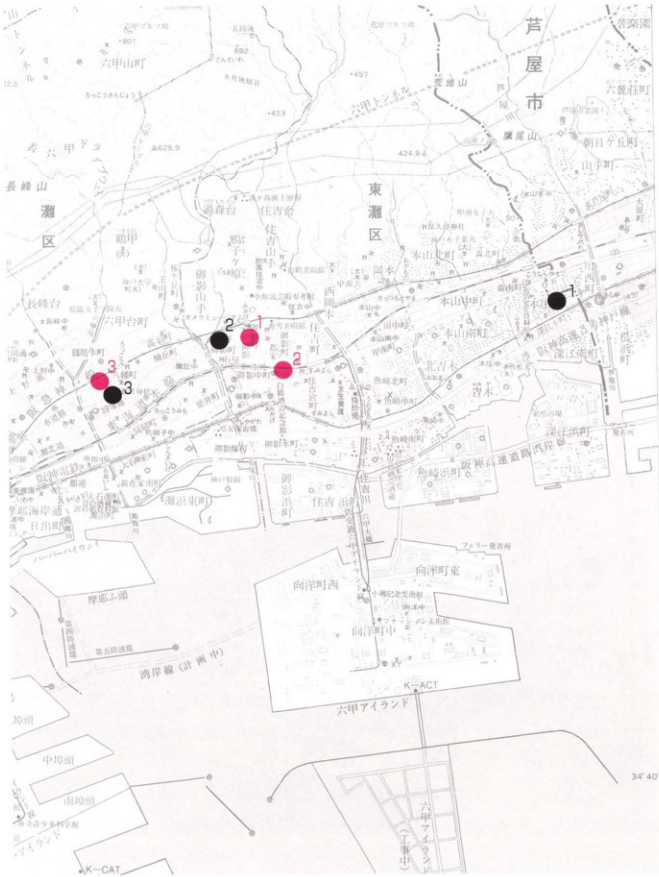
平成12年度埋蔵文化財発掘調査一覧表（通常事業に伴う調査）（４）

No.	遺跡名	所在地	調査主体	調査担当者	掘削面積 …… 延調査面積	調査期間	調査内容	調査原因
43	御船遺跡第11次調査	長田区大道通２丁目	兵庫県教育委員会	長濱　誠司 上田健太郎	656㎡ …… 656㎡	12. 12. 27～13. 2. 23	平安時代後半～鎌倉時代初めの掘立柱建物、井戸、土坑	道路建設 （高速２号線）
44	西神N. T. No.62遺跡	西区鍵谷町菅野地先	兵庫県教育委員会	山上　雅弘 柏原　正民 宮田　耕平	3,220㎡ …… 3,220㎡	13. 1. 15～13. 3. 23	弥生、古墳、奈良、中世の集落跡	道路建設 （神戸西バイパス）
45	南所３号墳	北区道場町塩田字南所	大手前大学考古学研究会	秋山　進午 藤本　史子	13㎡ …… 13㎡	12. 6. 1～12. 9. 15	墳丘測量、範囲確認 平成13年度報告書刊行済（大手前大学考古学研究会刊行）	確認調査

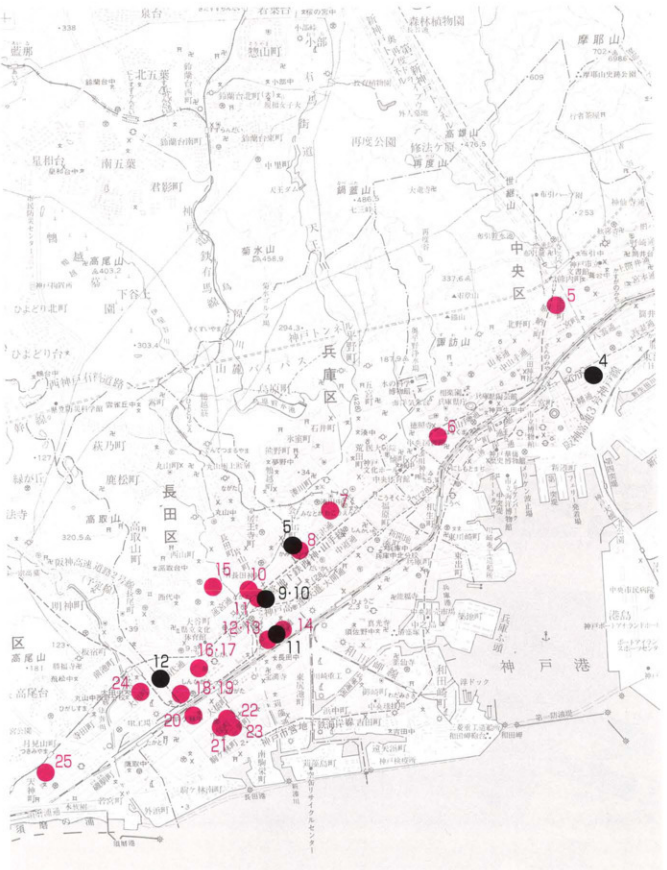


平成12年度　神戸市埋蔵文化財調査位置図

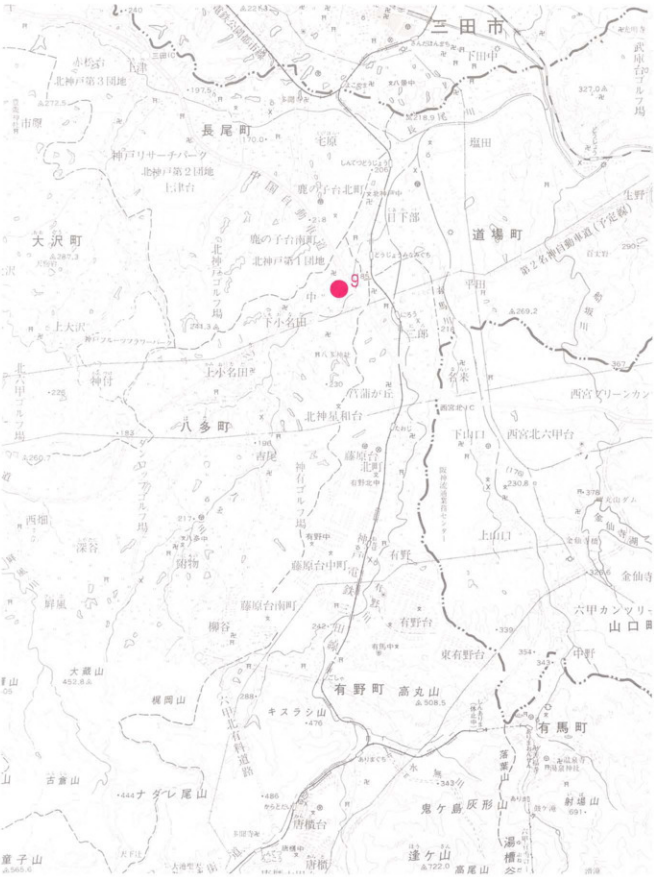
（各遺跡の番号は掲載遺跡と一致）



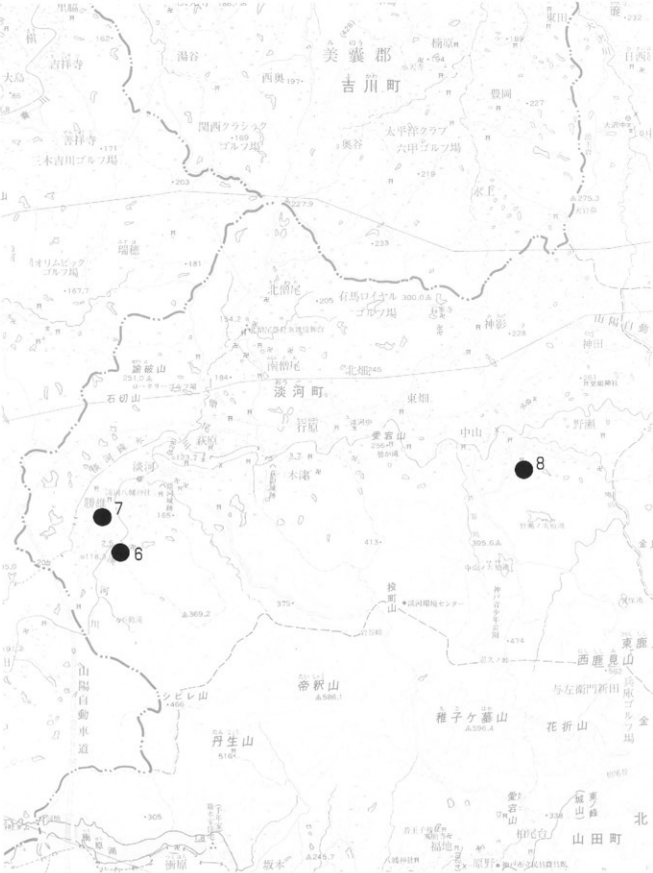
調査地点位置図１


5
4
6
7
5
8
15
10
9·10
11
12·13
14
11
16·17
12
24
18·19
20
22
23
21
25
中央区
兵庫区
長田区
神戸港

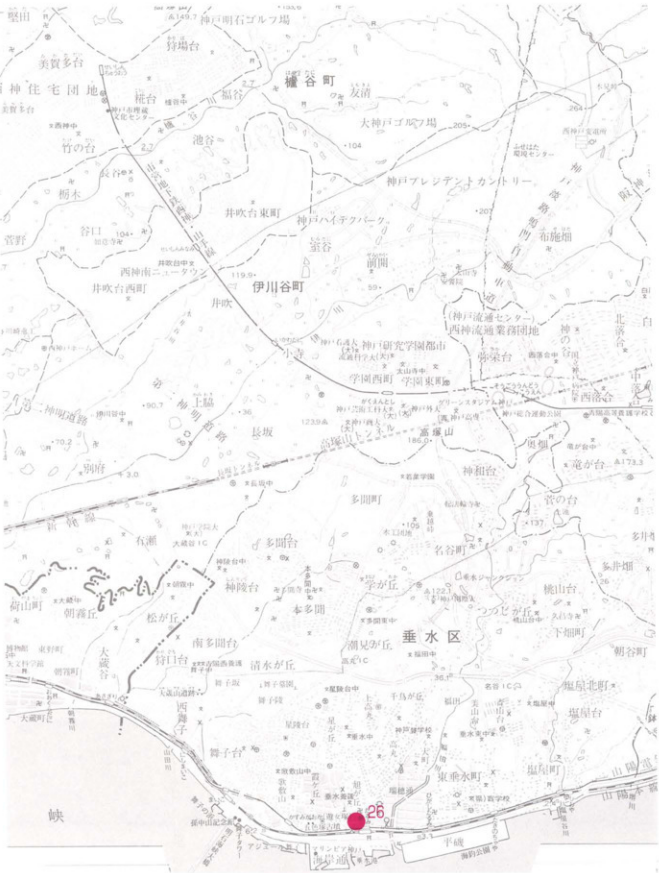
調査地点位置図 2


三田市
長尾町
大沢町
道場町
八多町
有野町
有馬町
北神戸第3団地
北神戸第2団地
北神戸第1団地
北神戸フルーツフラワーパーク
北神戸ゴルフ場
神戸リサーチパーク
上津台
鹿の子台北町
鹿の子台南町
下小名田
上小名田
北神泉和台
藤原台北町
藤原台中町
藤原台南町
有野台
東有野台
有野
中野
上山口
西宮北六甲台
西宮ゲリーンカン
六甲カンツリー
山口
金仙寺
有馬中
有馬
高丸山
キスラシ山
ナダレ尾山
唐櫃台
唐櫃
鬼ケ島
灰形山
蓬ケ山
高尾山
射場山
大藤山
童子山
古倉山
模岡山
六甲北有料道路
第2名神自動車道(予定線)
阪神北部広域水道企業団
西宮北JC
塩田
下田中
生野
西田
中
三部
名塩
下山口
柳谷
有野中
深谷
附物
鮎風
西畑
青尾
神有ゴルフ場
ゴルフ場
北甲ゴルフ場
神付
上大沢
大沢
坂川
武庫川
武庫ゴルフ場
市際
赤松台
上津
北神戸第3団地
下岡寺
宅原
日下部
塩田
327.0
197.5
272.5
241.3
289.2
290
367
230
183
196
217.5
242
339
354
343
378
230.8
178
452.8
486
444
343
691
722.0
565.6

調査地点位置図 3

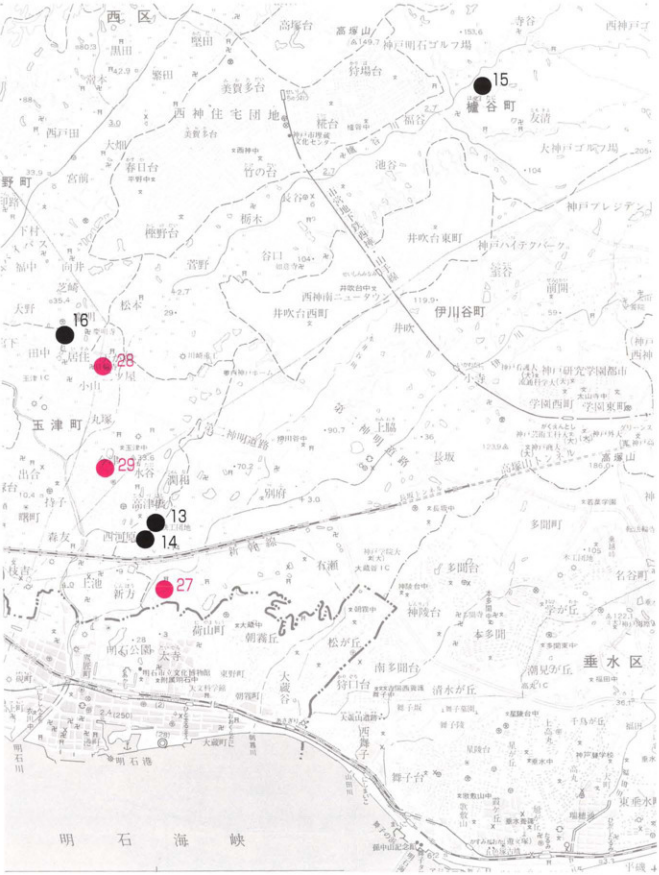


調査地点位置図 4



神戸明石ゴルフ場
狩場台
美賀多台
櫨谷町
友清
大神戸ゴルフ場
池谷
竹の台
栃木
井吹台東町
神戸ハイテクパーク
室谷
前開
伊川谷町
井吹台西町
西神南ニュータウン
井吹
神戸流通センター
西神流通業務団地
神戸研究学園都市
学園西町
学園東町
弥栄台
上脇
長坂
高塚山
別府
神和台
多聞町
多聞台
名谷町
神陵台
学が丘
本多聞
松が丘
南多聞台
狩口台
清水が丘
潮見が丘
垂水区
桃山台
下畑町
朝谷町
塩屋北町
塩屋台
塩屋町
東垂水町
舞子台
西舞子
大蔵谷
荷山町
朝霧丘
峡
平磯
26

調査地点位置図 5



調査地点位置図 6

Ⅱ．平成12年度の復興事業に伴う発掘調査

1．郡家（ぐんげ）遺跡　第67次調査

1．はじめに

郡家遺跡は、東灘区の西部、石屋川と住吉川に挟まれた扇状地上に位置する集落遺跡である。過去の数字にわたる調査において弥生時代～近世の遺構、遺物が確認されており、六甲山南麓屈指の複合遺跡である。

今回の調査は個人住宅建設工事に伴うもので、弥生時代後期～中世の遺構、遺物が確認された。

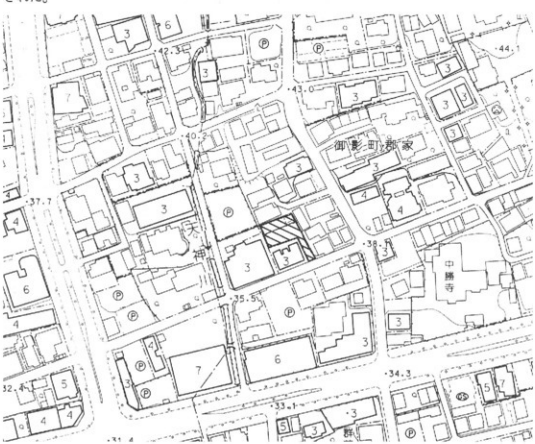


fig. 10
調査地位置図
1：2,500

2．調査の概要

調査は敷地内の住宅建物建築部分（1～3区）と排水路設置部分（4区）について実施し、2面の遺構面が確認された。

基本層序　上層より盛土、旧耕土層、遺物包含層の順で、遺物包含層の上面が第1遺構面、その下層上面が第2遺構面となる。遺物包含層は2区の南端部、3区の西半部、4区の南半部に5～10cm程度の層厚で存在する。第2遺構面の現GLからの深さは、遺構面ベースが北東から南西に向かって下り斜面になっていることから、1区の東端部で－30cm、2区の南端部で－70cmを測る。遺構面ベース層とその以下層は粗礫混りの砂質土層で、遺構面になりうる層位、遺物は確認されなかった。

遺　構　全体の攪乱が著しく、遺構面の遺存状況は決して良くないが、2面の遺構面が確認されて、掘立柱建物、ピット、溝、落ち込みなどの遺構が確認された。

第１遺構面　旧耕土層の下層、遺物包含層の上面で確認された遺構面で、１区と３区でピットが検出された程度である。時期の特定は難しいが、中世の範囲内に属する遺構面と推定される。

第２遺構面　遺物包含層の下層上面で確認された遺構面で、古墳時代後期～平安時代前期の遺構が検出された。

ＳＢ01　３区の東端部で検出された東西２間×南北１間以上の掘立柱建物で、調査区内に存在する柱穴の規模は、径約50～60㎝、深さ約30～55㎝、柱穴間隔８～２ｍを測る。柱穴内からの出土遺物から概ね平安時代前期に属するものと考えられる。

ＳＢ02　１区の西半部で検出された東西３間×南北３間と推定される掘立柱建物で、攪乱により多くの柱穴が失われているが、総柱である可能性が高い。遺存する柱穴の規模は、径約60～80㎝、深さ約40～60㎝、柱穴間隔約1.2～1.6ｍを測る。柱穴内からの出土遺物はほとんどなく、時期の詳細は不明である。

ＳＸ01　１区の東端部で検出された一辺約３ｍ程度と推定される方形状の落ち込みで、竪穴住居の可能性も考えられるが確証はない。出土遺物から古墳時代後期に属すると考えられる。

ＳＤ01　４区検出された幅約50㎝、深さ約10㎝を測る小規模な溝状遺構で、埋土中より奈良時代に属する須恵器の小片が出土している。

ＳＤ02　２区の北端部で検出された溝で、遺存する部分で幅約80㎝、深さ約15㎝を測る。埋土中より古墳時代のものと考えられる須恵器の小片が出土しているが、詳細は不明である。

ＳＤ03～06　２区の中央部で検出された幅約20～40㎝、深さ約15～30㎝を測る小規模な溝で、ＳＤ03より古墳時代に属する須恵器片が出土しているが、ＳＤ04～06については、ほとんど出土遺物はなく、詳細な時期比定は難しい。

ＳＤ07　１区の東端部で検出された溝で、幅約80㎝、深さ約20㎝程度と推定されるが、攪乱により失われている部分が多いため、詳細は不明である。出土遺物から古墳時代後期に属するものと考えられる。

ＳＰ01　３区で検出された方形状のピットで、一辺約70㎝、深さ約60㎝を測る。規模や位置関係

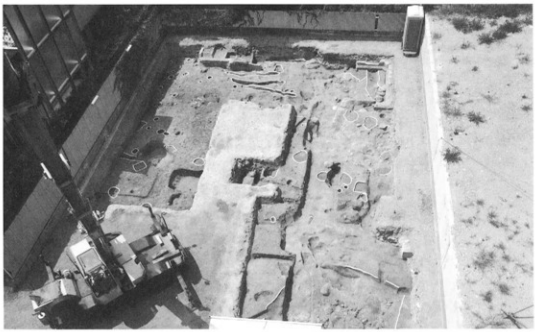


fig. 11
調査地全景

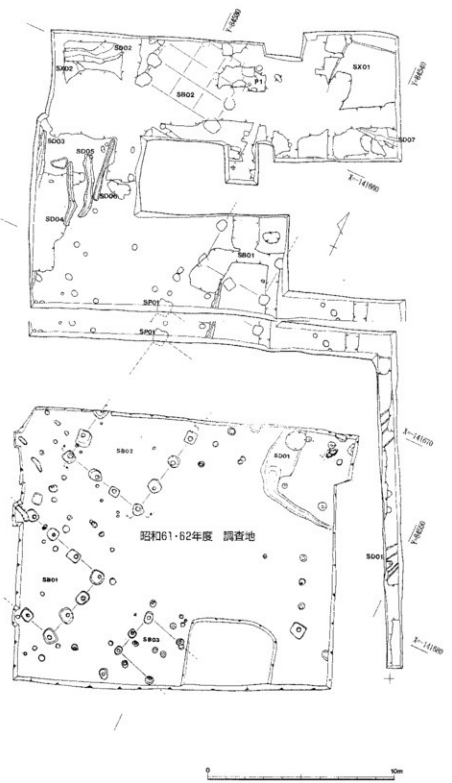


fig. 12　調査区平面図

から昭和61・62年度において検出された掘立柱建物（ＳＢ02）の北西隅の柱穴にあたる可能性が高い。

出土遺物　今回の調査では遺物包含層にあたる層位がほとんど遺存しておらず、また、攪乱によって遺構の多くが失われていることもあって、出土遺物は極めて少ない。時期別にみてみると、古墳時代後期（TK43型式併行期）のものが最も多く、ＳＸ01から特に多く出土している。器種としては、土師器甕、須恵器坏・壺・甕が大半である。その次に多いのが平安時代前期に属するもので、ＳＢ01の柱穴内より黒色土器片も出土している。その他、旧耕土層からは中世に属する白磁の破片も出土している。

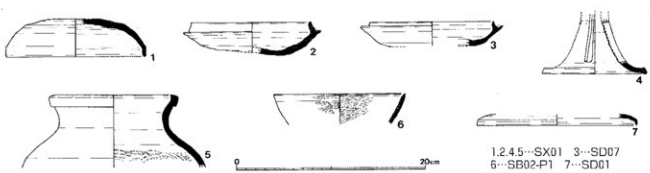


fig. 13　出土遺物実測図

3．ま と め　今回の調査では、主として古墳時代後期と平安時代前期に属する遺構が確認された。平安時代前期に属する遺構としては、先ずＳＢ01が挙げられるが、ＳＢ02も昭和61・62年度調査において検出された掘立柱建物やＳＢ01などと方向性が同じであることから、ほぼ同時期に存在した建物であると推測される。昭和61・62年度調査においても検出されたＳＢ01・ＳＢ02、今回の調査においてのＳＢ01・ＳＢ02は、計画性をもって、南北方向の軸線を基準として整然とコの字状に配置されており、官衙（郡衙）的な様相の強い建物群であることがうかがえる。古墳時代後期に属する遺構としてはＳＸ01、ＳＤ07などが挙げられるが、ＳＤ02～06も概ねその範疇に入るものと推定される。郡家遺跡は古墳時代中期～後期にかけて１つの盛行期が認められるが、昭和61・62年度調査においては、古墳時代に属する明確な遺構が確認されていない。しかし、今回の調査においては、古墳時代後期の集落が同地域にまで拡がることが明らかになり、今後において郡家遺跡の諸相を検討する上で重大な成果である。

2．郡家（ぐんげ）遺跡　第69次調査

1．はじめに

郡家遺跡は、石屋川と住吉川によって形成された扇状地上に位置する遺跡である。これまで70回近くにおよぶ調査の結果、弥生時代中期～中世にかけての遺構・遺物が確認されている。特に奈良時代の大型掘形をもつ掘立柱建物や緑釉陶器などが確認されており、郡衙等の役所の所在地と推定されている。今回の調査地である御影中町周辺では、これまでに古墳時代中期の水田・竪穴住居・掘立柱建物・祭祀土坑・玉類等が確認されている。

fig. 14
調査地位置図
1：2,500

2．調査の概要

今回の調査は、個人住宅建設に伴いその基礎等が遺跡に影響を与える範囲に限定して調査を行った。なお、基礎杭・梁部分毎に１～10区と小地区に分けた。

基本層序

現地表面から盛土・旧耕作土（灰褐色シルト・灰白色シルト質極細砂）・古墳時代遺物包含層および中世遺構面（暗褐色砂質土）・古墳時代中期～後期遺構面および地山（黄褐色粗砂）の順で堆積している。

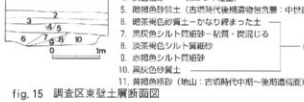


fig. 15　調査区東壁土層断面図

地表面から包含層までは、－110cm、遺構面までは－130cm前後である。

検出遺構

今回検出した遺構は、第１遺構面では溝１条・ピット３基を、第２遺構面では溝３条・土坑３基・落ち込み１基・ピット１基を検出している。

第１遺構面

ＳＤ01

検出長9.2m、幅25cm、深さ10cmの東西方向の溝である。埋土は灰色粗砂のみで、土師器・須恵器片を含む。耕作に伴うものと考えられる。

第２遺構面

ＳＸ201

４区で検出した落ち込みである。深さは20cmで肩口に40cmほどの突出部分がある。落ち際では土師器高杯２個体・土師器甕が出土している。高杯は、天地を逆にして設置されたような状況で出土した。周辺には焼土・炭等が広がっており、竈と考えられる。そのため、この落ち込みは、竪穴住居の可能性が高い。

ＳＤ201

10区で検出した検出長１m、幅70cm、深さ５cm前後の溝である。「＞」の字形に屈曲する。埋土は茶灰色粘質土で、遺物の出土は確認されなかった。

ＳＤ202

８区で検出した検出長1.1m、幅35cm、深さ10cm前後の南北方向の溝である。埋土は暗茶灰色シルト質細砂で、炭は含まれるが遺物の出土は確認されなかった。

ＳＤ203

６区で検出した検出長60cm、幅25cm、深さ10cm前後の東西方向の溝で、淡黒灰色シルト質細砂。遺物は出土しなかった。ＳＸ201との関連から竪穴住居の周壁溝の可能性がある。

ＳＫ201　２区で検出した直径90cm、深さ20cmの円形土坑である。埋土は茶灰色シルト質細砂で、古墳時代後期の土師器・須恵器片が出土している。

ＳＫ202　３区で検出した検出長60cm、深さ40cmの土坑である。埋土は上層に淡茶褐色土、下層に茶褐色砂質土である。埋土からは古墳時代の土師器・須恵器片が出土している。

出土遺物　ＳＸ201を中心に24ℓコンテナ２箱分の遺物が出土した。内容は中世・古墳時代中期～後期の須恵器・土師器・鉄製品などである。

先述の通り、遺物包含層が良好に堆積しているが、まとまった遺物の出土はなかった。また、他の溝・土坑からも若干の出土を確認するのみにとどまった。

３．ま と め

調査の結果、遺跡の東端と考えられていたが、遺跡がさらに広がることが認められた。ＳＸ201は竪穴住居と考えているが、他方の立上がりが確認されておらず、確証は得ていない。また出土遺物を洗浄したところ、古墳時代中期の土師器と共に、中世土師器鍋と類似したタタキ目をもつ土器片の出土が判明した。今後当該期の土器との検討が必要である。

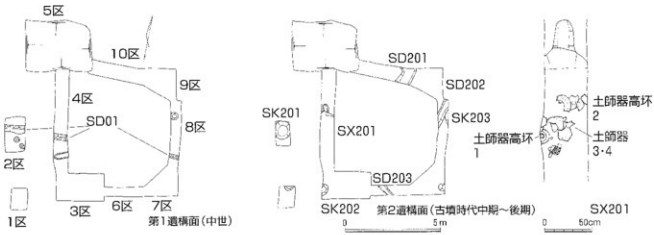


fig. 16　調査区平面図

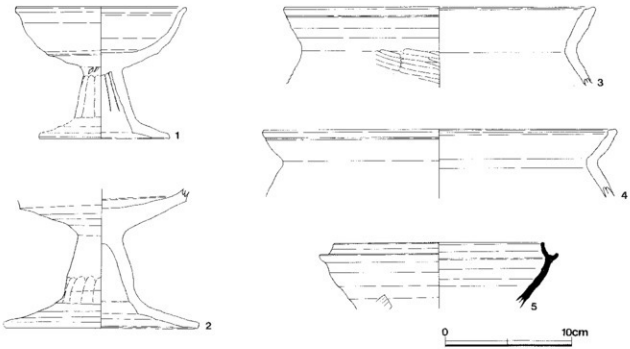


fig. 17　出土遺物実測図

3．篠原遺跡　第21次調査

1．はじめに

篠原遺跡は、都賀川が形成した丘陵扇状地に立地する縄紋時代から平安時代に及ぶ集落遺跡で、縄紋時代では中期の竪穴住居、後期の土坑、晩期の甕棺が、弥生時代では後期の竪穴住居、溝等が検出されている。

fig. 18
調査地位置図
1：2,500

2．調査の概要

現代の盛土直下には旧耕土・旧床土があり、その下には12～13世紀代の遺物を少量含む第４・５層が堆積する。第６層の上面が第１遺構面である。第７層は第６層との区別がやや困難であるが、出土遺物に平安時代のものを含まず、粗砂が混じり締まっていないことで分層した。第７層内の遺物は弥生時代後期末のものと思われる。第７層上面で検出したものは調査区西半で南北方向に流れる自然流路のみである（第２遺構面）。

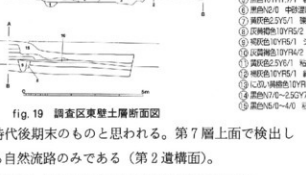


fig. 19　調査区東壁土層断面図

第７層除去後に検出したのが第３遺構面で、当調査区における最終遺構面である。

第１遺構面　南北４間（７m）以上、東西３間（5.7m）以上の総柱の掘立柱建物である。ＳＫ01・ＳＢ01　02に柱穴を破壊されていることから、13世紀前半以前と考えられるが、柱穴から検出した遺物もＳＫ01出土遺物と時期差は殆どない。

ＳＢ02　南北３間（5.5m）以上、東西１間（２m）以上の掘立柱建物である。

ＳＤ01　ＳＢ02南側で東西方向にのびる浅い溝状の遺構である。長さ３m以上、幅25cm、深さ２～３cmである。

ＳＫ01　南北1.8m、東西2.5m以上、深さ26cmの不整楕円形の土坑である。須恵器鉢・同碗、土師器皿、瓦器碗の他瓦質三脚鍋等が出土した。13世紀前半のものと考えられる。

ＳＫ02　南北1.4m、東西1.7m、深さ60cmの不整円形の土坑である。

ＳＫ03　南北2.2m、東西1.7m、深さ55cmの不整円形の土坑である。

第２遺構面　自然流路　調査区西半部で検出した、南北方向の自然流路である。南北長さ９m以上、幅2.8m以上、深さ30cmで、極少量の弥生土器片が出土した。

第３遺構面　壺　棺　ＳＸ01の埋土上面で検出した。二重口縁壺が据えられており、壺棺と推定される。調査区北東隅で検出した遺構で、南西隅にほぼ直角のコーナー部を持つ。床面は平坦で

ＳＸ01　南辺中央に焼土が残存する。竪穴住居の一部である可能性もある。東西4.3ｍ以上、南北3.3ｍ以上、深さ25～50㎝である。

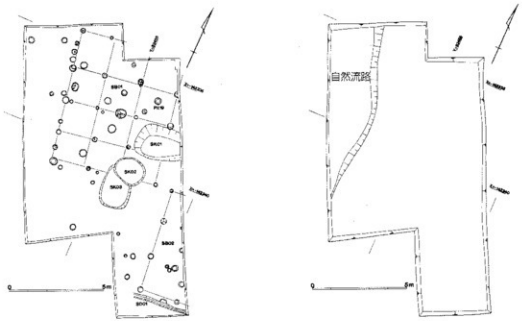
自然流路　調査区のほぼ中央部で南北に流れる自然流路である。幅１～1.8ｍ、深さ50～60㎝で弥生時代後期末の土器片が出土した。

ＳＤ02　ＳＸ01の南側で、これに北辺を切られる東西方向の溝状遺構である。幅2.3ｍ以上、東西長５ｍ以上、深さ30ｍである。

底部が平坦で底のレベルが等しい事などから、ＳＸ01とＳＤ02は一連の浅い土坑で、前者は最終埋土を掘削したものである可能性もあるが、現時点では別遺構と考えておく。

遺　物　遺物は28ℓコンテナで14箱分出土した。その90%は弥生時代後期末～古墳時代初頭のもので占められており、残りが平安時代～室町時代に属している。

弥生時代後期末～古墳時代初頭の土器の内、第６層～第７層の上面で出土した革袋形土器は市域では、長田区御蔵遺跡に次いで２例目である。



第1遺構面　第2遺構面

fig. 20　第１・２遺構面平面図

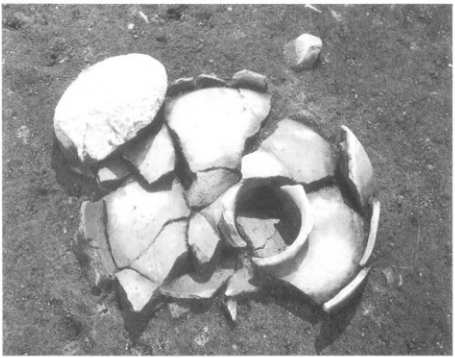


fig. 21
壺棺検出状況

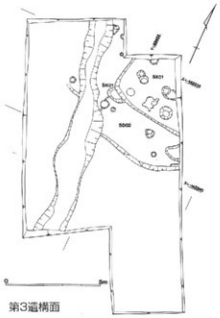


fig. 22　第３遺構面平面図

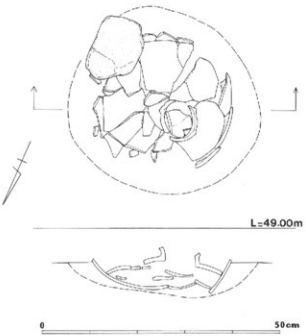
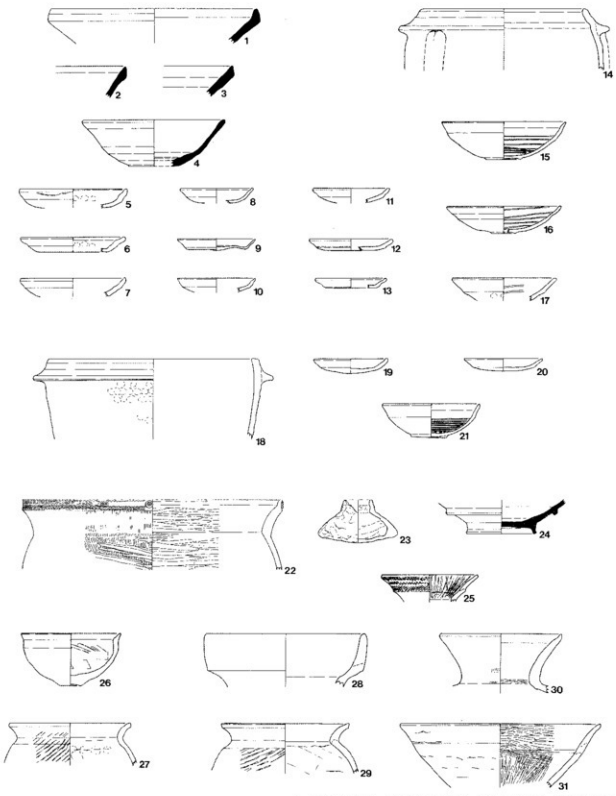


fig. 23　壺棺平面図・断面図



1～17:第1面SK01、 18・19:第1面SK03、 20:第1面SB02、 21:第1面Pit19
22:第7層、 23:第6層～第7層上面、 24:第6層、 25:第3面SK01、
26・27:第3面SX01、 28～31:第3面SD01
1～4・24:須恵器、 5～13・19・20:土師器、 14～18・21:瓦器
その他:弥生時代末～古墳時代初頭の土器類

fig. 24　出土遺物実測図

4．日暮（ひぐれ）遺跡　第19次調査

1．はじめに

日暮遺跡は生田川と西郷川に挟まれた地域にあり、扇状地末端から低位段丘面に立地する弥生時代から室町時代に及ぶ集落遺跡である。弥生時代後期末の竪穴住居、古墳時代前期・中期の竪穴住居、奈良時代中期の掘立柱建物、平安時代の掘立柱建物や鎌倉時代後期の土坑・溝・井戸等が今までの調査で検出されている。

今回の調査は、平成３年度に当教育委員会が実施した第４次調査地の東隣接地で、第19次調査である。

fig. 25
調査地位置図
1：2,500

2．調査の概要

基本土層

現地表下約50cmまでは現代の盛土層で、これを除去すると厚さ約20cmの包含層（第１包含層）に達する。包含層上面での標高は約16.00ｍである。この土層の直下に第２包含層があるが、この第２包含層の上面が、第１遺構面となっている。

第２包含層は厚さ約20～30cmあり、直下が地山面となっており第２遺構面はこの面で確認された。第２遺構面の標高は15.5ｍ付近である。

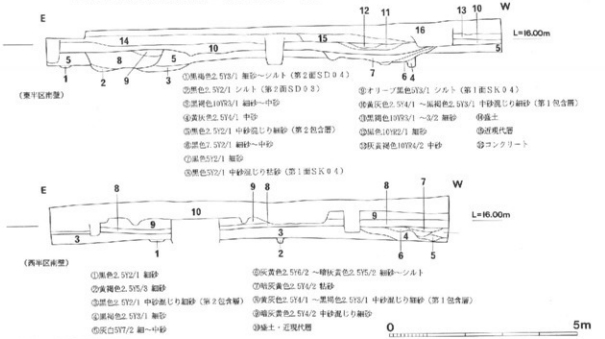


fig. 26　調査区南壁土層断面図

第１遺構面　第１遺構面は、黒色中砂混じり細砂をベースとするもので、溝・土坑・ピット等が検出された。遺構の所属時期は、15世紀前後と思われるが出土遺物が少なく、確定に至っていない。

ＳＤ01　幅50cm以上、長さ５ｍ以上、深さ約30cmの南北方向の溝である。土師器の細片が検出された。

ＳＤ02　幅１ｍ、長さ11ｍ以上、深さ約30cmの溝でＳＤ01と１～２ｍの距離をおいて、これとほぼ平行して走る溝である。南端近くで西へ分岐しているものと考えられる。土師器、平瓦片が出土した。

ＳＫ01～04　直径１～２ｍのものである。この中で遺物が出土し時期がほぼ特定できるのは、東端で検出されたＳＫ04のみである。ＳＫ04は南半が調査区外となるが、直径約２ｍ、深さ約40cmの土坑で、15世紀後半～16世紀代の土師器が出土した。

ピット　直径20～40cm大のもので、遺物を出土したものが少なく、またあっても細片が多いためその時期の決定については、遺物の整理作業が終了した段階で行いたい。

第２遺構面　地山である暗黄灰色礫混じり砂質土をベースとするもので、溝・土坑・ピット等が検出された。第１遺構面同様出土遺物が少なく、時期を決定する事が困難であるが、平安時代から鎌倉時代に属するものと推定される。

ＳＤ01　幅約50cm、長さ９ｍ以上、深さ約15cmの溝で、土師器・須恵器の細片が出土した。

ＳＤ02　幅約80cm～1.2ｍ、長さ20ｍ以上、深さ約15cm～30cmの溝で、西端は調査除外部分に重なり明確ではない。東部で大きく南に湾曲している。後述のピットの大半はこの溝の南側で検出されており、建物群を区画する溝であった可能性がある。土師器・須恵器の細片が出土した。

ＳＤ03　幅約50cm、長さ６ｍ以上、深さ約20cmの溝で、ＳＤ02と同様湾曲して南調査区外に続くものと考えられる。

ＳＤ04　幅約50～70cm、長さ９ｍ以上、深さ約30cmの溝で、これもＬ字状の溝である。土師器の細片が出土した。

ＳＤ05　幅約70cm、長さ５ｍ以上、深さ約20cmの溝である。土師器の細片が出土した。

ピット　直径20～40cm大のもので、遺物を出土したものが少ないが、Pit211からは13世紀末～14世紀中頃のものと考えられる土師器小皿が出土した。

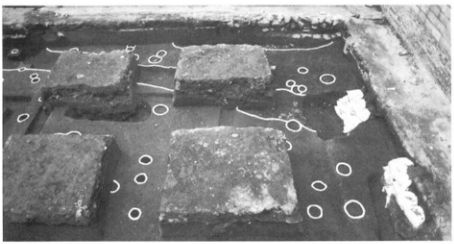
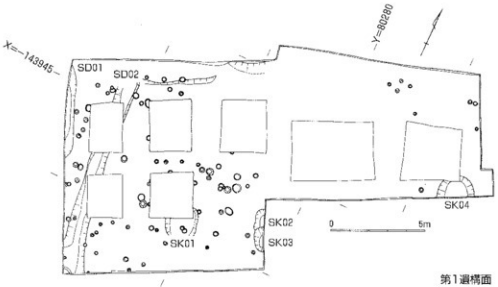
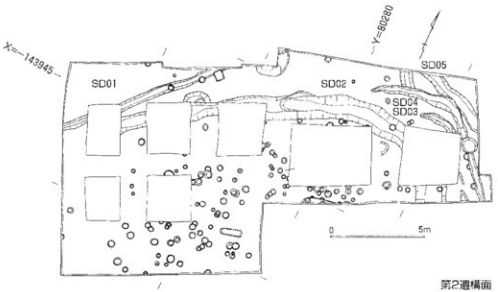


fig. 27
第１遺構面全景



第1遺構面



第2遺構面

fig. 28　調査区平面図

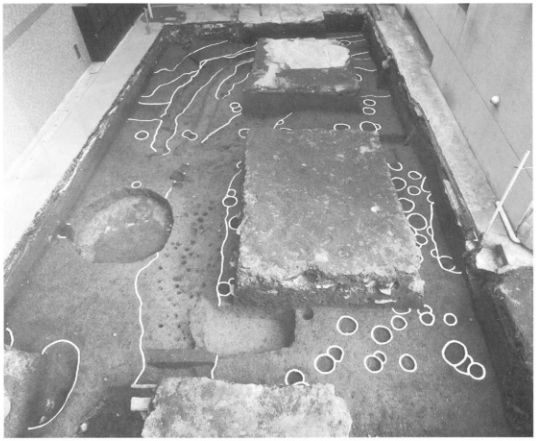
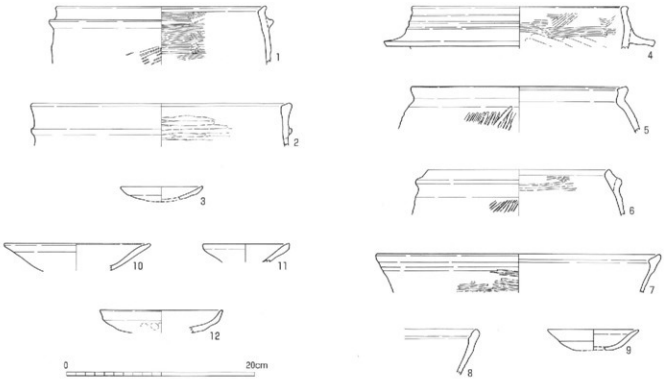


fig. 29
第 2 遺構面全景



1～ 3:第1遺構面 SD02　4～9:第1遺構面 SK04
10～11:第1遺構面ベース土　12:第2遺構面 pit221

fig. 30　出土遺物実測図

5．生田町（いくたちょう）古墳群　第１次調査

1．はじめに

生田町古墳群は、六甲山系南麓の新生田川右岸に位置する。この川は、明治初年に現在の位置に付け替えられたもので、本来は当古墳群の西側を流れていた。

当該地周辺には、かつては横穴式石室を持つ古墳が複数存在していたといわれているが江戸時代の開墾や明治以降の急速な市街地化により、現在は全くその姿を止めていない。

この古墳群については、明治～大正期に工事中に発見されたものの簡単な報告が、わずかに残されているだけで、その実態は明らかでなかった。

また、この周辺の遺跡の分布は明確でなかったが、平成元年以降、熊内遺跡（弥生時代後期～古墳時代初頭・集落址）、二宮遺跡（飛鳥時代・集落址）が発見され、遺跡の分布状況が次第に判りつつある。

今回の調査は共同住宅の建設によるもので、建設予定地の南半分について全面調査を実施した。なお、調査は前年度からの継続である。

fig. 31
調査地位置図
1：2,500

2．調査の概要　調査前の状況は、家屋が除去された更地であった。現況では北東～南西方向に下がる地形となっている。

平成11年度の調査　平成12年３月末までに、機械掘削、人力で攪乱坑の清掃や旧耕土を除去し、遺構検出作業と平行して、遺構埋土の除去を始めた。４月に入ってからは、前年度に引続き遺構検出作業、遺構埋土除去作業を行なった。その結果、古墳時代後期の土坑状の遺構や中世～近世の溝、ピット等が検出された。遺構埋土除去後、写真撮影・測量を行ない、調査を完了した。

基本層序　調査範囲内は、近世から現代に至る耕作と建築工事等によって掘り返されており、遺物包含層は全く存在せず、遺構検出面も攪乱坑の間にわずかに残されている状況であった。

基本層序は①現況表土、②瓦礫まじり赤褐色焼土（第２次世界大戦時の戦災によるもの）、③暗褐色腐食土（戦災直前の整地土、地表面）、④暗褐色混礫土（近代頃の整地土）、⑤暗褐色砂質土（近世～近代の耕作土）、⑥黄灰褐色～白色混礫細砂～粗砂（遺構検出面）、①～⑥層までの深さはおよそ60～80cmである。

主な遺構
ＳＸ01　調査地南西部に位置する遺構で、最大残存長約４m、幅約1.5m、深さ約40cm、Ｕ字形の断面形を呈する。内部には黒褐色砂質土が堆積していた。溝または細長い土坑状の遺構である。南側を近世の溝、北側を近・現代の建物基礎で潰されており、全体の形状は明らかでない。遺構の底面からやや浮いた状態で、古墳時代後期の須恵器（台付長頸壺、甕、坏身、蓋）、土師器が発見された。これらの土器は須恵器高杯の蓋１点を除いて、細かく割れた状態で出土した。なお、この遺構は、試掘調査の時に確認されたものである。

fig. 32　ＳＸ01遺物出土状況

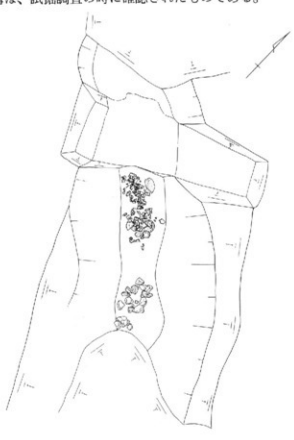


fig. 33　ＳＸ01平面図

ＳＤ01　検出長約８ｍ、幅約２ｍ、深さは南側は約70cm、北側は20～30cm程度で、逆台形状の断面形を呈する。堆積土の上層に10～20cm大の円礫が帯状に堆積しており、礫を投入して溝を埋め戻したことが判る。礫と共に近世の陶磁器が出土した。この遺構は先述のＳＸ01と重なるように掘りこまれている。

ＳＰ01・02　北東部で、直径約20cmのピットが２基検出された。中世～近世頃の遺構と推定されるが出土遺物がほとんどなく、正確な時期の判定はできない。

銅銭出土の土坑　北東部の現代攪乱坑の底面を清掃中に銅銭を２枚発見した。周辺を精査すると、直径約１ｍの土坑の底に置かれていたことが判かった。その他の出土遺物はなく、埋納の理由は不明である。

古墳時代の遺構？　南東部の建物基礎を除去中に、調査区壁裏近で、古墳時代後期の須恵器坏身が１点出土した。壁面の土層を観察すると、深さ約20cmの土坑または溝の一部とみられる黒色粘性砂質土の堆積層が、幅約１ｍにわたって認められた。遺構のほとんどが調査区外に出ており、また、調査区内の部分も建物基礎で壊されて、詳細は判らない。

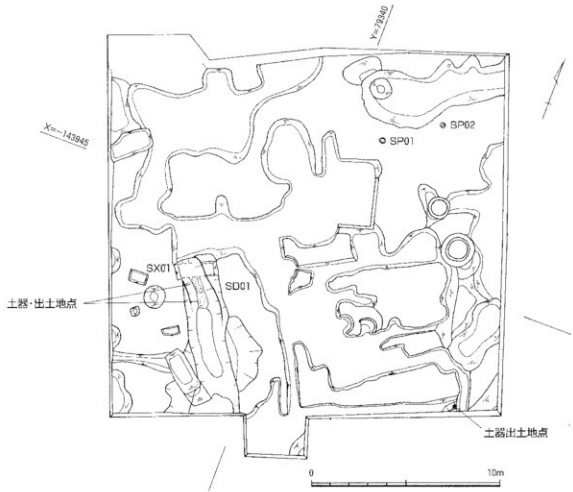
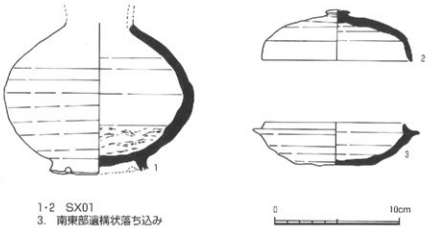


fig. 34　調査区平面図

fig. 35
調査区全景



1・2　SX01
3.　南東部遺構状落ち込み

fig. 36
出土遺物実測図

3．ま と め　調査の結果、古墳時代後期の溝または土坑状の遺構１条、近世の溝、ピット、土坑を検出した。

当該地周辺は、古くから生田町古墳群（６世紀～７世紀？）の所在した場所と伝えられている。今回の調査区では、古墳時代後期の遺構を確認したが、後世の攪乱が著しいためその性格は不明である。現在の段階では、古墳の周溝の一部である可能性を示唆するに止めたい。

今回の調査では、古墳としての明確な規模、形状等を捉えることができなかったが、周辺地に、当該期の遺構が残存する可能性を示しているものと言えよう。

6．下山手遺跡　第３次調査

1．はじめに

下山手遺跡は六甲山系の南麓、旧宇治川と旧鯉川に挟まれた段丘上に位置する弥生時代～近世の複合遺跡である。

今回の調査は共同住宅建設工事に伴うもので、平成３年度に実施された第１次調査地の周縁部にあたる部分である。

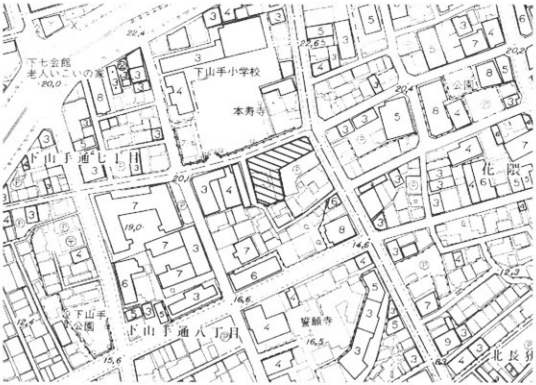


fig. 37
調査地位置図
1：2,500

2．調査の概要

基本層序

調査は便宜上、調査区域を１～６区に区分して行なった。

当地が傾斜地のため、層序は地区によって少し差異があり、遺構面までの深さにも違いがある。上層より盛土、旧耕土層で、１、４区旧耕土層の下層に遺物包含層（暗灰褐色砂質土）が存在し、その下層であるバイラン混りの砂質土層の上面が遺構面となる。現GLからの遺構面までの深さは、－80cm～－130cmを測る。そのさらに下層については、遺構、遺構面になりうる層位面、遺物が確認されなかった。

fig. 38
１区西壁
土層断面図

遺　構　検出遺構は1、4区に集中する傾向があるが、全体的に攪乱が多く、それによって遺構が失われている可能性もある。検出遺構の時期は概ね、弥生時代後期～古墳時代後期に属するものと考えられる。以下、主要遺構のみ概説しておく。

ＳＢ01　1区の南端部で検出された東西2間以上×南北2間以上の掘立柱建物で、柱穴規模は径約50～80cm、深さ約30～50cm、柱穴間隔は1～1.5mを測る。柱穴内からの遺物は、いずれも小片で少なく、詳細な時期は特定できない。

ＳＢ02　4区で検出された東西1間以上×南北2間の掘立柱建物で、柱穴規模は径70～120cm、深さ約20～30cm、柱穴間隔は1.6～1.8mを測る。柱穴内からの遺物は、いずれも小片で少なく、古墳時代のものと考えられる土器片も含まれるものの、時期の特定は難しい。

ＳＸ01　1区で検出された1辺約4.3m、深さ約50cmを測る方形状の落ち込み状遺構である。その形状から竪穴住居の可能性も考えられるが、攪乱が著しく、断定は難しい。かろうじて遺存していた埋土より、弥生時代後期後半に属すると考えられる土器片が出土している。

遺　物　遺物は土器類が大半で、遺物包含層（暗灰褐色砂質土）、旧耕土層からの出土が多い。遺物包含層からは弥生時代中期～古墳時代後期のものが確認されているが、弥生時代後期後半と古墳時代後期のものの比率が高い。旧耕土層からは先述した時期のものに加えて、中世のものも含まれる。遺構内からの出土は少なく、時期を特定できるものは少ないが、遺構の一部や遺物包含層からは、6世紀後半（TK43型式）に属する須恵器片が数点出土しており、集落の存続時期を考える上で重要な成果である。

3．ま と め

今回の調査では、弥生時代後期後半～古墳時代後期の遺構が確認され、下山手遺跡の集落様相がかなり明らかになったように思われるが、調査次数も未だ3次と少なく、北側の山麓地域には中宮黄金塚古墳をはじめとする複数の古墳が存在した可能性が高いこともあって、同地域における古墳時代後期の様相については不明な点が多い。今後の調査資料の蓄積を待って、さらに検討を進める必要があるように思われる。

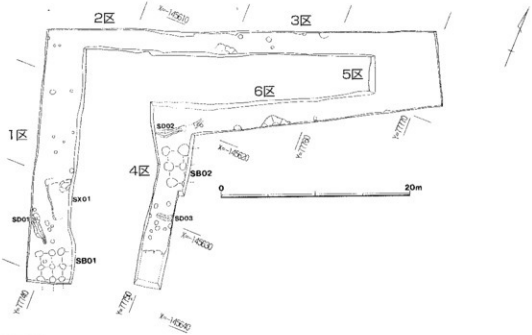


fig. 39　調査区平面図

7．兵庫松本遺跡　第３次－１～５調査

1．はじめに

兵庫松本遺跡は、平成９年度に実施した試掘調査で初めて発見された遺跡で、現在のところ、兵庫区松本通２丁目を中心とした南北100ｍ、東西100ｍの拡がりが考えられている。

これまでに２次にわたる調査を実施しており、今回の調査は第３次調査にあたる。市営住宅建設に伴って実施した第１次調査では、弥生時代前期の自然流路や弥生時代後期後半～古墳時代前期前半の竪穴住居、掘立柱建物、土坑、鎌倉時代後半の耕作痕などの遺構が確認された。また、先年度に実施した第２次調査では、弥生時代後期後半～古墳時代前期前半の自然流路や落ち込みなどが検出されている。

今回の調査は、区画整理事業地内の擁壁建設（第３次－１調査）及び街路拡張（第３次－２～５調査）に伴って実施したものである。

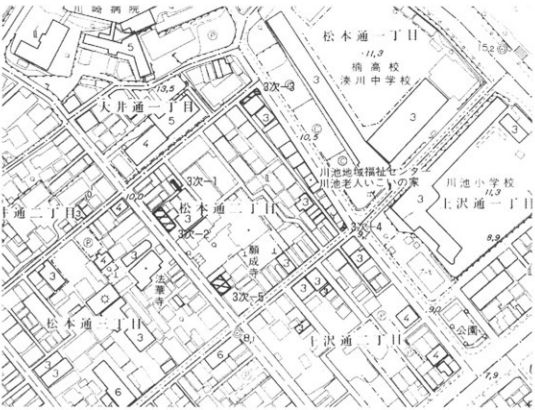


fig. 40
調査地位置図
１：2,500

2．調査の概要

第３次-1調査

盛土・旧耕土の下層（現地表下約0.9ｍ）で遺物包含層である。暗褐色シルト層（層厚約10㎝）上面を検出した。遺物包含層から出土する土器は少量で、時期については、小片が多く、また磨耗が顕著なためやや不明瞭であるが、概ね弥生時代後期～古墳時代前期のものと考えられ、弥生時代前期の壺底部などの破片も少量含まれる。包含層の下層で検出した淡褐色砂質シルト上面が遺構面である。遺構の密度は粗く、南部で溝状の落ち込みを１ケ所検出したのみである。深さは12～20㎝で、弥生時代前期の壺底部片などの土器が極少量出土している。

なお、下層の状況について、工事影響深度（現地表下約1.5ｍ）までについて一部深掘を実施して確認作業を行なったが、遺構・遺物ともに検出されなかった。

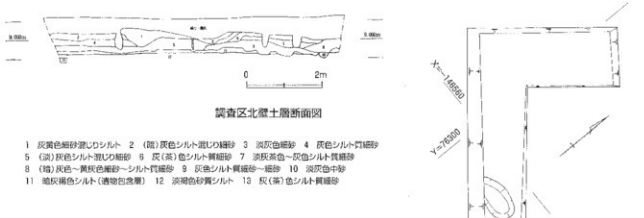


fig. 41 第３次－１調査区平面図・土層断面図

第３次-2調査　現況道路の拡幅部分について実施した調査で、調査地は第３次－１調査地の西側に位置している。２面の遺構面を確認したが、下層の遺構面は河道堆積中の一段階と判断できる。

第１遺構面　南部で溝２条、ピット３基、落ち込み２ケ所、北部で河道状の落ち込みを検出した。

ＳＤ01　調査区南部で検出した溝で、調査区内を北東～南西方向に流れる。緩やかに弧を描くものと考えられる。幅45～52cm、深さ９～15cmを測る。中央部付近で北側にやや幅の狭い溝（ＳＤ01－２）が取りつくが、切り合い関係がみられず、同一の遺構と考えられる。弥生時代後期頃の土器が出土している。

ＳＸ01　調査区南東隅で検出した落ち込みで、調査区外に延びている。調査区内での規模は、長径4.3m、短径2.2m、深さ12cmを測る。全体の形状は不明であるが、内部で径約20cmのピットが２基検出されており、平面形が多角形の竪穴住居址の可能性が考えられる。

ＳＸ02　調査区中央部で検出した落ち込みであるが、攪乱を受けているため本来の規模は不明である。検出した規模は、長径3.5m、短径2.0m、深さ12cmを測る。内部から弥生時代後期の土器が少量出土している。

ピット　ピットは３基検出したが、調査区内では建物としてのまとまりは認められなかった。

河道状落ち込み　調査区北半部は遺構面が西側に落ち込んでおり、弥生時代後期～古墳時代前期の土器が出土した。検出状況から、人為的な遺構というよりは、既往の調査でも検出されたような河道の一部と考えられる。

fig. 42 第３次－２調査区土層断面図

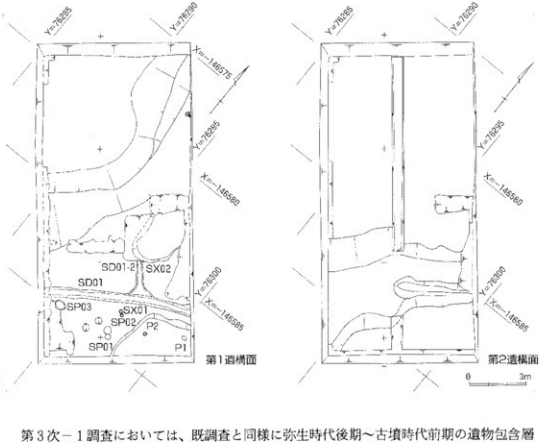


fig. 43
第３次－２
調査区平面図

小　　結　第３次－１調査においては、既調査と同様に弥生時代後期～古墳時代前期の遺物包含層が検出され、遺物が出土した。ただし、遺構は溝状の落ち込みが１ケ所検出されたにとどまり、第１次調査のような掘立柱建物などの明確な遺構は検出されなかった。以上の結果は今回の調査地の南側で実施した、第２次調査の１区の調査成果に近い。

第３次－２調査においても、弥生時代後期頃の遺構を検出した。ピットは３基検出したのみであり、掘立柱建物を構成するものかどうかは不明であるが、調査区南東隅部分では竪穴住居址の可能性のある落ち込みを検出しており、第１次調査で確認した弥生時代後期後半～古墳時代前期前半の居住域が当調査地まで延びている可能性が高くなった。また、調査区北半部で河道を検出し、河道の左岸（南東側）に当該期の居住域が拡がることが概ね判明してきたものと考えられる。尚、第１遺構面よりも下層で検出した流路からも弥生時代後期頃の土器が出土しているが、第１遺構面出土の遺物との詳細な時期差については今後の整理作業の進展を待って検討を加えたい。

第３次-3調査　現道路沿いの拡幅部分の調査である。東側が現況では高くなっているが、発掘調査の結果、現代の盛土であることが確認された。東側でG.L.－80㎝、西側でG.L.－40㎝で中世の遺物を含む灰色砂質シルトである。須恵器・土師器・青磁などが出土している。これより以下灰褐色シルトまで弥生時代後期～中世に至る遺物が含まれる。暗褐色シルトが遺構面であると考えられ、精査を行なったが遺構は確認されなかった。調査後に下層の状況を確認するために、２ケ所の断割調査を行なったが、遺構・遺物共確認はされず、全体の状況としては黄褐色粘質土以下では遺物の出土を確認することはできなかった。

本調査区の東西両端は緩やかに下がっており、調査区西端部の流路への落ち際では、弥生時代後期の遺物がややまとまって出土した。

小　　結　第３次－３調査においては、調査区の東西両端が緩やかに下がっており、出土した遺物も流入したものと考えられ、調査地は緩斜面の変換点に位置するものと考えられる。尚、調査区の西側は自然流路若しくは、湿地状の様相が推定され、平成９～10年度に実施された第１次調査で確認された流路に続くものと推定される。

出土遺物には中世の青磁等も含まれることが特筆される。

第３次-4調査　第３次－３調査区の南側に位置する調査区で、現道路部分沿いの拡幅部分の調査である。

層序の堆積状況は第３次－３とほぼ同様であったが、遺物の出土量は極わずかであり、遺構面を構成する生活面も確認することはできなかった。

小　　結　第３次－３調査区よりも本調査区は低く、これまでの調査成果から北側の丘陵の南側には南北方向の自然流路が存在すると推定され、本調査区は層序の断面観察からも自然流路内に位置するものと考えられる。

第３次-5調査　層序は現代盛土（１～３層）、近現代耕土（４層）、洪水砂（５層）、近世耕土（６層）、以下灰褐色砂質土（７層）、淡灰褐色砂質土（８層）、淡黄色灰褐色砂質土（９層）となる。８・９層より古墳時代から中世にかけての土師器・須恵器が少量出土した。９層の上面を遺構面として遺構検出を行なったが、遺構は検出されなかった。この面の標高は８ｍ前後である。

調査後部分的に断ち割り調査を実施し、９層以下の層の遺構、遺物の有無を確認する作業を行なった。調査の結果、11～13層から微量の土師器が出土した。13層から、さらに17層まで断ち割り調査を実施したが、遺構・遺物は確認されなかった。

堆積層は、ほぼ水平に近い堆積を示し、少なくとも古墳時代から近世にかけて幾度となく洪水による堆積を繰り返し、畑や水田としての土地利用が行なわれたようである。また中世から近世・現代に至る耕作痕の方向は現在の町割りとほぼ同様の南北方向である。

小　　結　僅かな面積の調査区であるが、攪乱を受けることなく比較的良好に遺構面が遺存していた。しかしながら遺構・遺物とも殆どなく、時期や調査対象地の性格などを明確にすることはできなかった。

これまでの調査結果から、当調査区は遺跡の南西端部にあたり、遺構・遺物ともに稀薄になっている空間ではないかと考えられる。

現状の点的な調査成果を整合させることによって、今後遺跡の性格などが明らかになると考えられる。

３．ま　と　め　今回の調査は限られた面積ではあったが、兵庫松本遺跡の中でその端部にあたると考えられる地点に位置し、遺跡全体の中で広くデータを得ることができたのは、兵庫松本遺跡の広がり、性格を考える上で貴重なデータとなったと考えられる。

8．上沢遺跡（第37・39・42・43・44次調査）

1．はじめに

上沢遺跡は、六甲山系から南に派生する会下山丘陵の南東側に広がる遺跡である。平成元年の房王寺線街路築造工事に伴う調査で発見されて以来、山手幹線拡幅に伴う調査や震災復興に伴う個人住宅建築に伴う調査により、縄文時代から中世にかけての複合遺跡であることが明らかになってきている。

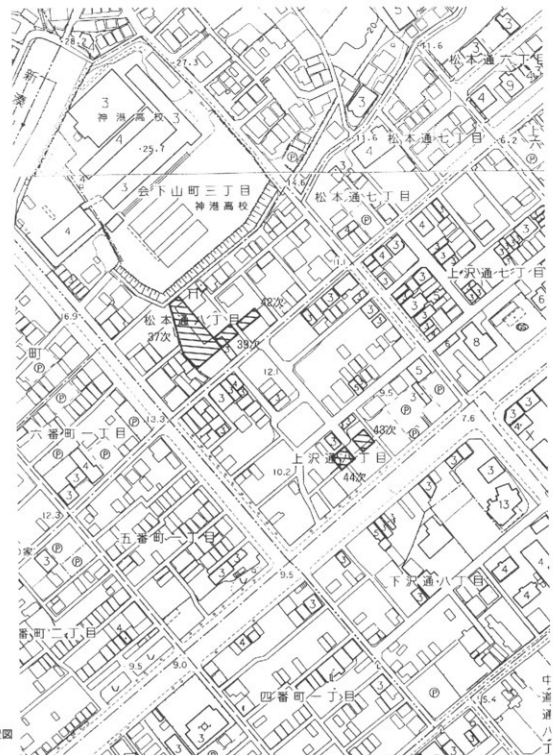


fig. 44
調査地位置図
1：2,500

第 37 次 調 査

1．調査の概要　作業は都合上、Ⅰ区とⅡ区に分割して調査を行なった。

基本層序は、盛土、旧耕土、灰褐色礫混粗砂（中世遺物包含層）、灰茶色砂質土（第１遺構面及び弥生時代終末期遺物包含層）、白灰色シルト（弥生時代後期後半～終末期遺物包含層）、黒褐色粗砂混シルト（第２遺構面及び弥生時代後期後半遺物包含層）、暗黒褐色粗砂混粘土（第３遺構面）となる。

Ⅰ区については削平を受けていて、旧耕土の下層が暗黒褐色粗砂混粘土（第３遺構面）になっている。そのため人為的な遺構はほとんど確認されなかった。Ⅱ区でも、調査区の北側についてはⅠ区と同じような状況が確認されたが、南側では暗黒褐色粗砂混粘土（第３遺構面）の傾斜変換点あたりから、遺物包含層の堆積が確認できた。

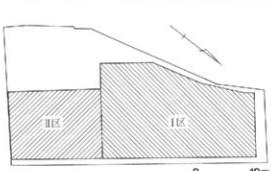
Ⅰ　区　調査区の西半で、南北方向に流れる自然流路を検出した。検出当初は、１本の自然流路であると考えていたが、南北の土層断面より、灰色シルト～暗茶褐色粗砂混細砂層が、ほぼ水平に堆積している南側の流路（ＳＲ01－２）を切る流路（ＳＲ01－１）が確認できた。

ＳＲ01-1　ＳＲ01－１の埋土の大半は細砂層であるが、下層では薄いシルト層が細砂層と互層に堆積している。検出長11m、検出幅約４m、深さは最深で130cmで、西側は調査区外のため検出できていない。調査区のほぼ中央で大きく西に向きを変えていて、それより南側にＳＲ01－２が確認できる。埋土より14世紀後半～15世紀前半の土師器の皿などが出土している。堆積状況より急激な流れであったことが推定できる。

ＳＲ01-2　検出長10m、検出幅５m、深さは約90cm、西側は調査区外へ延びている。13世紀～14世紀前半に最終的に埋没した緩やかな流れで、埋土からは土師器や須恵器、青磁などの磁器や陶器類の他、漆椀が出土している。また東側片の裾部分には、等間隔で木杭が打ち込まれていた。

ＳＲ02・ＳＲ03　調査区の東半に位置する東西方向に流れる自然流路で、西半はＳＲ01に削平されている。埋土は褐色の礫混じり粗砂層で、自然流路の肩部分には、黒色シルトが堆積している。ＳＲ02は幅約３m、深さは約50cm、埋土より弥生時代終末期の土器が少量出土している。ＳＲ03は検出幅３m以上で、北側は調査区外に延びている。深さは最深で90cmである。これらは１本の大きな流れの埋没時の最終堆積であることが、後の断ち割り調査で確認された。

Ⅱ　区　調査区のほぼ全域で堆積が確認できる暗黒褐色粗砂混粘土（第３遺構面）の状況から、



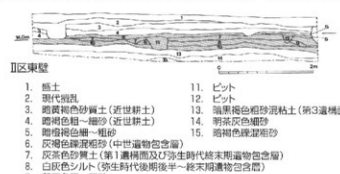


fig. 45　調査区地区割図・土層断面図

この調査区は北から南へ、東から西へと傾斜していることが分かる。そして、高い部分にあたる北側及び東側は旧耕土の下が暗黒褐色粗砂混粘土（第３遺構面）になっていて、Ⅰ区同様上層の遺構面は削平を受けている。つまり中世からの遺構面が遺存していたのは、調査区の南西部分ということになる。

鎌倉時代の土器を含む遺物包含層（灰褐色礫混粗砂）の下層、灰茶色砂質土（第１遺構面）の上面で遺構検出を行なったが、はっきりと確認できなかったため、黒褐色粗砂混シルト上面（第２遺構面）まで掘り下げて再度遺構検出を行なった。10基ほどのピットを確認したが、掘り込みは浅く、第１遺構面で確認すべきピットの残りであると考えられる。また、北側で検出したピットも同様のものと考えられる。

なお、南半については第３遺構面を検出するまでに工事掘削影響深度に達したため、遺物包含層を掘削した時点で調査を終了している。

2．ま と め

今回の調査地は、現地形では平坦であるが、急な斜面の裾に位置していることから、ある時期に造田のため、大きな削平を受けていると考えられる。そのため調査地の北側ではほとんど人為的な遺構は確認できなかった。しかし南側では、中世からの遺構面が遺存しており、また今回は遺構を確認できなかったものの、弥生時代後期後半～終末期にかけての遺物も出土している。隣接する南西側で調査を行なった第38次調査では、弥生時代後期後半～終末期、古墳時代、中世にわたる遺構が検出されており、本調査地より南側には、これまで、上沢遺跡で確認されている時期の遺構が広がるものと思われる。

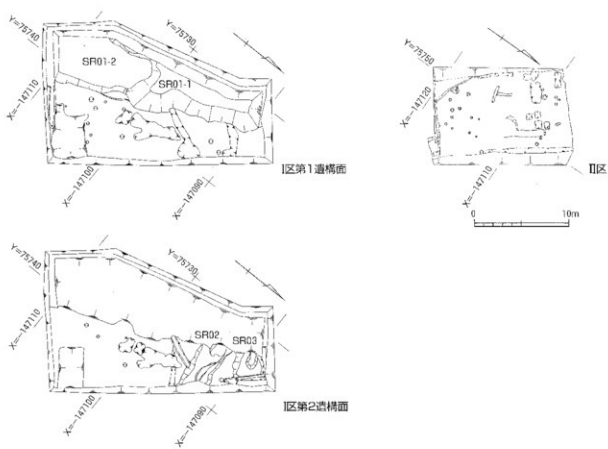


fig. 46　調査区平面図

第 39 次 調 査

1．**調査の概要**　基本層序は、盛土、旧耕土、暗褐灰色砂質土、灰褐色砂質土、灰褐色シルト質土、淡黒褐色粘性砂質土、黒褐色砂礫土、茶褐色シルト質土、灰褐色シルト性細砂質土である。

調査区の南半は攪乱が著しく、北半で遺構面が良好に残存していた。

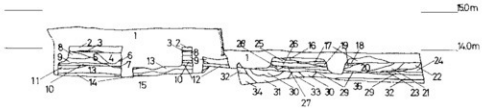
第１遺構面　旧耕土掘削後、平安時代の土師器を含む淡灰色細砂を検出した。この層を除去後の面では遺構を検出することができず、さらに下層の灰褐色砂質土を掘削して第１遺構面の検出にいたった。包含層からの遺物は、古墳時代と思われる土師器が多く、古墳時代の須恵器や平安時代の遺物がわずかに出土している。また、韓式系土器も出土している。

ＳＰ01　直径45～50cm、深さ18cmで、埋土は灰褐色粗砂質土である。

ＳＰ02　直径20cm、深さ22cmで、埋土は茶灰色粗砂質土である。須恵器椀底部や瓦、土師器が出土している。須恵器椀の時期は11世紀後半と思われる。このピットはＳＰ01同様、ＳＸ01を切っている。

ＳＰ03　直径22～26cm、深さ25cmで、埋土は茶灰色砂質土である。土師器片が出土している。

その他、中央部で不整形の落ち込みＳＸ01や、北端で落ち込みを検出した。



1. 攪乱・盛土
2. 灰色砂
3. 灰黄色粘質砂
4. 明茶褐色粗砂質土
5. 淡茶灰色砂
6. 灰茶色細砂
7. 黄灰色シルト
8. 灰色砂
9. 淡茶灰色粗砂
10. 褐灰色シルト質土
11. 暗茶褐色粘性砂質土
12. 暗茶褐色シルト質土
13. 黒褐色粘性砂質土～シルト質土
14. 暗灰褐色粘性粗砂質土
15. 暗灰黄色砂（地山）
16. 淡灰色細砂
17. 淡灰色砂
18. 淡灰色砂利
19. 褐灰色細砂質土
20. 灰褐色細砂
21. 灰褐色砂礫
22. 淡黄褐色細砂
23. 褐灰色細砂質土
24. 淡灰褐色シルト
25. 灰褐色シルト質細砂
26. 茶灰色シルト質土
27. 灰茶色シルト
28. 淡褐色シルト質土
29. 黒褐色シルト質土
30. 黒褐色シルト質土
31. 淡黒灰色シルト質土
32. 黒褐色砂質土
33. 淡黒褐色砂礫土
34. 茶灰色砂質土
35. 茶灰色粘質砂

fig. 47　調査区東壁土層断面図

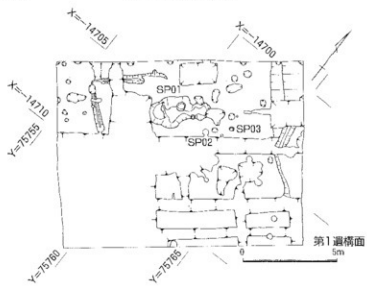


fig. 48　第１遺構面平面図

第２遺構面　第２遺構面までの包含層は弥生時代後期後半の土器を多く含む。遺構は、ピットと土坑を検出した。

ＳＫ01　西隅で検出した120×60cmの細長い土坑で、埋土は茶灰色シルト質土である。

ＳＫ02　西側で検出した75×62cmの土坑で、埋土は茶灰色シルト質土である。

ＳＫ03　西側で検出した方形と思われる土坑である。南側・東側は削平のため不明である。埋土は茶灰色シルト質土で、弥生時代終末期～古墳時代初頭の遺物が出土した。

ＳＫ04　東半で検出した96×62cm、深さ８cmの土坑である。

ＳＸ02　中央北寄りで検出した265×215cmの楕円形の浅い落ち込みで、埋土は淡灰褐色細砂質シルトである。

第３遺構面　黒褐色シルト質土を掘削して、第３遺構面を検出された。土器は主に上層部からの出土が多く、弥生時代後期のものと思われる。第３遺構面の北側は礫層で、南側はシルト系の土壌になる。遺構は、土坑とピット、溝を検出した。

ＳＫ05　中央北寄りで検出した。108×90cm、深さ８cmのやや歪な土坑である。埋土は黒褐色砂質土である。

ＳＫ06　東半で検出した70×60cm、深さ15cmの土坑である。

ＳＫ07　東半で検出した125×80cm、深さ14cmの土坑である。埋土は黒褐色シルト質土である。

ＳＫ08　東側は調査区外のため不明である。南北長90cm、深さ20cmである。

ＳＤ01　西半で検出した長さ３m、幅45cmの西から東への溝である。埋土は淡黒褐色粘性細砂質土である。

また、西半で東西方向のピット列を検出したが、建物としては確認できなかった。

第３遺構面以下は、東端で断ち割りを行ない下層を確認したが、遺構・遺物などは検出できなかった。

２．ま と め　今回の調査では、調査区南半がコンクリート基礎攪乱や耕作地造成のために削平されており、良好な状態ではなかった。しかし、北半については遺物包含層が比較的良好に残存し、３面の遺構面を検出することができた。遺物の詳細な検討は行なえていないが、韓式系土器が出土するなど、特徴も見いだせる。遺物のほとんどは、より上方に存在する生活区域からの流れ込みであろうか。

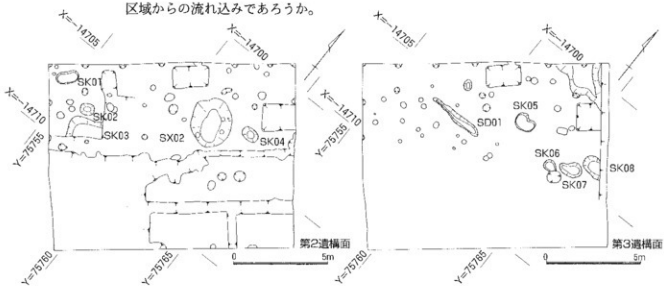


fig. 49　第２・３遺構面平面図

第 42 次 調 査

1．調査の概要　個人住宅の建設によって、遺跡の破壊される部分について発掘調査を行なった。調査の結果、遺構面４枚が確認された。

第１遺構面　表土直下、３a層上面で確認できる遺構面。この面の遺構は下の第２遺構面でプランを検出したが、調査区壁面の土層断面の観察により、第２遺構面とは別の遺構面のあることを確認した。土層断面によって確認できる第１遺構面の遺構は、調査区南隅にあるＳＲ02のみ。第２遺構面よりも新しい時代、古代末から中世の面と考えられる。

ＳＲ02　遺構を検出した第２遺構面での幅1.7ｍ以上、調査区南西壁で確認できる深さは約90cmを測り、北西から南東に流下する自然流路。覆土は殆ど砂で弥生土器のみが出土している。洪水等により上流部の弥生土器を含む遺物包含層を削り込んだものと考えられる。

第２遺構面　３a層下面で検出された。弥生時代末の土器を含む洪水砂の堆積ＳＲ01と掘立柱建物ＳＢ01・土坑等が確認されている。

ＳＢ01　ＳＲ01と切り合い関係にあり、ＳＢ01の方が新しい。主屋部分は東西３間分、南北１間分が検出されたが、北及び東は調査区外になる。柱間は芯々間で約2.0ｍ～2.2ｍで、およそ７尺になろう。柱穴は掘形の径50cm程のプラン円形、柱の直径が約20cm、遺構検出面からの深さ25～55cmを測る。Ｐ２・Ｐ５などは柱を抜いた痕跡が残り、Ｐ２は柱の抜き痕に一辺10数cmのチャート２個と石英１個が納められていた。また、南辺及び西辺に縁を支える柱穴が確認されている。南辺のものは柱穴が２個対になっており、縁部分の改築があったことを伺わせる。建物の規模は確定できなかったが、縁をもつことや柱の状況からはかなり上等な建物であったことを推測できる。

柱穴から出土した遺物は小片ばかりだが、Ｐ８から平安時代前半の土師器高台付椀、ＳＰ15から古代の須恵器壺が出土しており、平安時代の建物と考えてよいだろう。

ＳＰ13　調査区の北隅で検出された柱穴。掘形の径60cm程で柱径は30cmを越える。ＳＢ01の柱よりは大きなもので、掘立柱建物等の一部の可能性がある。瓦片・土師器片・須恵器片が出土している。

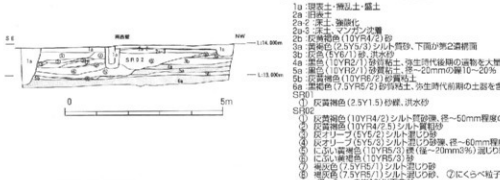


fig. 50　調査区土層断面図

第２遺構面-2　弥生時代末の遺物包含層である４a層上面で確認した。第２遺構面で検出しきれなかった遺構もあるが、両面についての写真による検討の結果、杭列ＳＡ01など４a層上面に至って検出される遺構も存在する。或いは４a層が埋没した段階の遺構面として別に把握すべきものかもしれない。ＳＡ01の他、柱穴状ピット若干が検出されている。

ＳＡ01　北西－南東方向（＝条里方向）の杭列。調査区内で４本が確認された。杭自体腐朽して痩せているが、全て遺存していた。残りの良かったＰ１は先を削って尖らせた径４cm程の棒杭である。杭の周囲は土壌が青っぽく変色し、柱穴状に見える。杭の間隔は芯々間でＰ１－208cm －Ｐ２－121cm －Ｐ３－153cm －Ｐ４である。

第３遺構面　４a層の下面。４a層は弥生時代末の遺物を多量に含む表土層であり、その下面で遺構が検出されると思われたが、全く遺構は検出されなかった。

第４遺構面　無遺物層である５a層・５b層下の６a層には遺物が含まれ、この層下面で検出した。６a層出土の遺物から弥生時代前期の遺構面と判断される。ただし検出された遺構は不整形の溝状・土坑状の落ち込みで、人為になるものとは思われない。落ち込み内からの出土遺物もごくわずかである。遺物包含層は土壌化がすすんだ安定した地表面であり、この地点では遺構が確認されなかったが、近辺に弥生時代前期の遺構が存在するものと思われる。

２．ま　と　め

平安時代の大型建物が確認されたことが第一に注目される。第33次調査で確認された井戸は奈良時代後半のもので、今回確認された建物は平安時代前半のものである可能性が高い。寺院房王寺の存続期間と考え合わせ、調査地周辺には寺関係の施設ないしは富裕層の屋敷地が奈良時代から平安時代にかけて存在していたものと考えられる。

弥生時代の遺構については第３遺構面の後期、第４遺構面の前期ともに遺構は検出されなかった。しかし第３遺構面では大量の土器が投棄されたかのような状態で出土しておりごく近辺に遺構が存在するものと推測される。

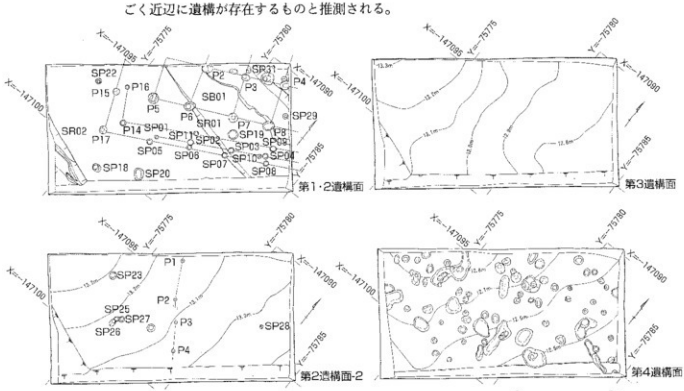


fig. 51　遺構平面図

第43次調査

1．調査の概要　共同住宅の建設に伴い、その基礎等が遺跡に与える範囲について発掘調査を実施した。

基本層序は現地表面から盛土・耕作土・旧耕作土・中世遺構面（飛鳥～平安時代遺物包含層）・古墳時代初頭～平安時代遺構面（古墳～飛鳥時代遺物包含層）・弥生時代終末～古墳時代初頭遺物包含層・地山（暗黒茶色粗砂混じりシルト）の順で堆積している。

中世遺構面（第1遺構面）までの深さは1.3m、古墳時代初頭～平安時代遺構面（第2遺構面）までは1.5mである。

今回検出した遺構は、第1遺構面では溝3条・土坑1基・ピット7基、第2遺構面では河道1条・溝3条・土坑2基・落ち込み1基・ピット6基が検出されている。

第1遺構面

ＳＤ01　検出長9m、最大幅3.5m、深さ20cmの東西方向の溝である。第2遺構面で検出した河道ＳＲ01の最終流路と考えられる。底部には3ケ所の土器群を確認している。土器群1では中世の須恵器椀を数個重ねて据えたような状況で検出されている。また土器群3では土師質土器坏が数個体集中して投棄された状況で検出されている。なお、遺構名については、ＳＲ01の中世段階での状態として便宜上ＳＤ01と呼称した。

ＳＤ02　検出長1.1m、最大幅40cm、深さ10cm前後の南北方向の溝である。灰褐色粗砂のみが堆積し、遺物はほとんど含まれていなかった。

ＳＤ03　検出長5m、最大幅40cm、深さ10cmの南北方向の溝である。灰褐色粗砂のみが堆積し、遺物はほとんど含まれていなかった。底部には幅約20cm前後、深さ5cm前後の鋤の痕跡が数ケ所残されていた。遺物は出土しなかった。

ＳＫ01　1辺90cm、深さ20cmの不整形な方形土坑である。淡茶灰色シルトのみがレンズ状に堆積し、鎌倉時代の須恵器・土師器片が出土した。底部は凹凸が激しく、墓坑とは考え難い。

第2遺構面

ＳＲ01　検出長5.6m、最大幅30cm、深さ80cmの南北方向の河道である。断面観察から本来は中世面で検出されるべき遺構であったことが確認された。埋土は大きく分けて上層ではシルト系、下層では人頭大の礫を含む砂礫で分けられる。その境目からは奈良～平安時代の須恵器・土師器・緑釉陶器・獣骨？が出土している。断面は階段状で、底部は凹凸が激しい。

ＳＤ201　検出長3m、最大幅30cm、深さ10cmの東側にやや彎曲する南北方向の溝である。断面はU字形で、黒灰色シルト質極細砂のみが堆積し、弥生時代終末期～古墳時代初頭の土師器が出土している。

ＳＤ202　検出長3.6m、最大幅30cm、深さ10cmの東西方向の溝である。ＳＤ201と同様の堆積状態で、遺物等の出土は確認されていない。

ＳＤ203　検出長2.5m、最大幅40cm、深さ15cmの南側に彎曲する溝である。埋土は黒灰色シルト質細砂である。埋没後にピットが穿たれたように、灰白色粘土が柱状に断面観察された。

ＳＸ201　約1m以上×1.5m以上の規模で検出された土坑である。深さは20cm程度あり、4層に分けられる。それぞれの層からは、須恵器・土師器片が多数出土している。底部中央には落ち込みが存在するようである。影響範囲のため部分的な検出であったが、形状から竪穴住居の可能性がある。

ＳＫ201　ＳＲ01の底面で検出した直径70cm、深さ20cmの円形土坑である。断面は皿形で、黒灰色粗砂混じりシルトのみが堆積しており、底部には弥生時代終末期～古墳時代初頭の土師器が出土している。

ＳＫ202　ＳＲ01の東肩部付近にある直径70cm、深さ25cmの円形土坑である。淡黒灰色砂質シルトのみが堆積し、弥生時代終末期～古墳時代初頭の土師器が出土している。

出土遺物　28ℓコンテナ８箱分の遺物が出土した。内容は弥生時代終末期～中世の土師器・須恵器・瓦・骨などが出土しており、また緑釉陶器も１点であるが出土している。

2．ま と め

調査の結果、中世の段階では土器が集中して出土しているため、ＳＲ01の最終流路を利用し、祭祀が行なわれていたようである。土器群毎に異なった様相はみられるが、必ず土師器１枚を伴うという共通性がある。出土状況や器種構成等、当時の祭祀を復原する良好な資料といえる。またＳＲ01内の砂礫から、小規模な土石流が平安時代頃に起こったようである。

一方、ＳＲ01による攪乱等により、古墳時代以前の遺構は東半部での検出に終わった。しかし竪穴住居を始め、比較的多くの遺構を検出し、当時の様子を解明するための重要な資料を得た。

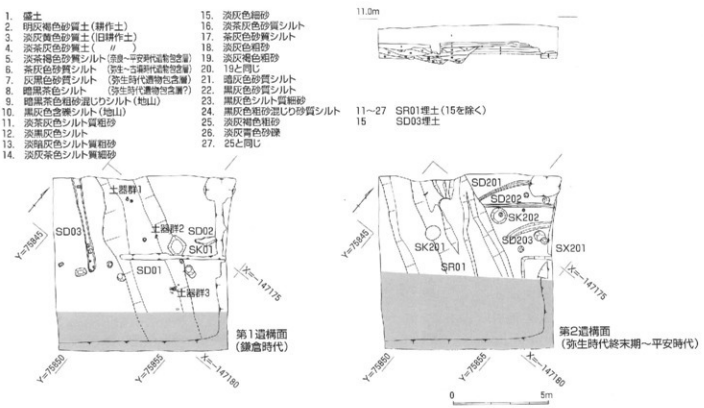


fig. 52　調査区平面図・土層断面図

第 44 次 調 査

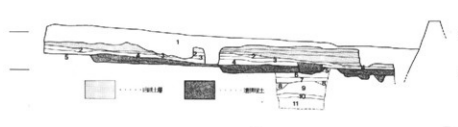
1．調査の概要　今回の調査は個人住宅建設工事に伴うもので、敷地内の住宅建物建設部分について発掘調査を実施した。古墳時代初頭～奈良時代後期の遺構、弥生時代中期から中世の遺物が確認された。

基本層序は上層より盛土・旧耕作土・褐灰色砂質土（中世遺物包含層）、暗褐灰色砂質土（奈良時代遺物包含層）、暗灰褐色砂質土（古墳時代遺物包含層）の順で、それぞれの遺物包含層の下層上面が遺構面になりうるが、中世については遺構は全く検出されず、奈良時代についても調査区の東端部でピット状の落ち込みを確認した程度で、明らかに遺構面として認識できたのは暗灰褐色砂質土（古墳時代遺物包含層）の下層上面のみである。古墳時代の遺構面までの深さは、現GL－70～80cmを測る。その以下層については、時期不詳の土器の小片が数点出土した程度で、遺構も確認されなかった。

遺　構　古墳時代の遺構面において、竪穴住居、掘立柱建物、ピット、落ち込みなどが検出された。これらの遺構には時期差がみられ、埋土の出土遺物から、古墳時代初頭（庄内併行期）～古墳時代中期（5世紀後半）の範囲内のものと推定される。

竪穴住居　6棟検出された。SB02が一辺約4m、SB05が一辺約4.5mを測るが、調査区域が限られているため、その他のものについては規模が不明である。それぞれの切り合い関係からSB02が最も古く、SB05、SB04・06、SB01の順に新しくなっている。その出土遺物から判断すると、SB02・05が古墳時代初頭（庄内併行期）、SB04・06が古墳時代前期（布留併行期）、SB01・03が古墳時代中期（5世紀後半）に概ね該当するものと考えられる。

その他の遺構　その他の遺構については、埋土からの出土遺物が少なく、時期の特定は難しいが、先述した時期の範疇に入るものと推定される。SH01は調査区の南西部で検出された東西1間以上×南北4間以上の掘立柱建物で、柱穴規模は径約30～65cm、深さ約20～40cm、柱穴間隔は80～130cmを測る。



1. 盛土・撹乱土
2. 褐灰色砂質土（中世包含層）
3. 暗褐灰色砂質土（奈良時代包含層）
4. 暗灰褐色砂質土（古墳時代包含層）
5. 暗褐色鍵混じり砂質土（遺構面ベース層）
6. 暗灰褐色砂質シルト
7. 濃灰色細～中砂
8. 淡灰茶色極細砂混じり砂質土
9. 濃灰褐色鍵混じり中～粗砂
10. 灰色極細砂
11. 暗灰色シルト

fig. 53
調査区東壁
土層断面図

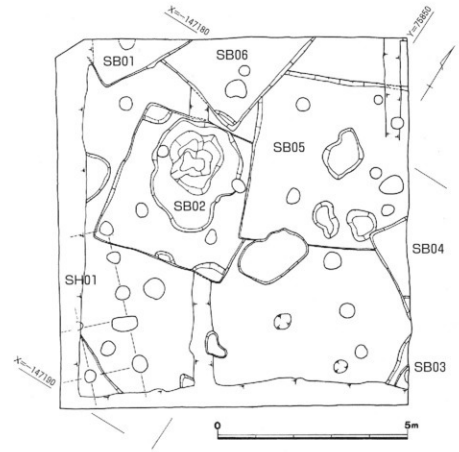


fig. 54
調査区平面図

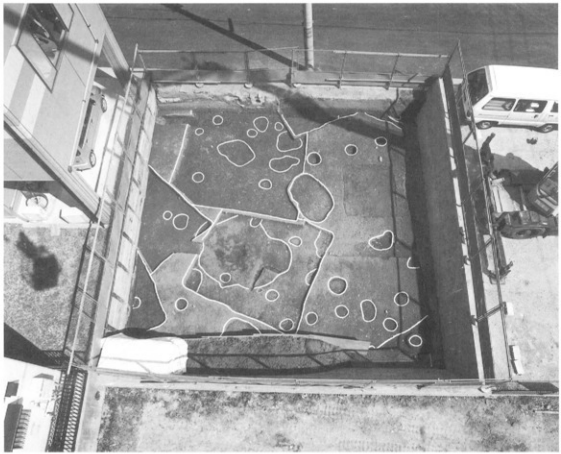


fig. 55
調査区全景

出土遺物　遺物は土器類が大半で、遺物包含層、竪穴住居からの出土が多く、古墳時代初頭（庄内併行期）に属するものの比率がやや高い。器種としては壺、甕、坏、椀などの日常雑器類が中心である。また、遺物包含層からの出土ではあるが、中世のものとしては白磁片、奈良時代のものとしては緑釉陶器片、古墳時代のものとしては韓式系土器片なども確認されている。

2．ま と め　今回の調査地においては、中世、奈良時代、古墳時代の遺物包含層が比較的良好に遺存し、遺構面になりうる層位もそれぞれ確認できたが、遺構が検出された遺構面は古墳時代のみであった。しかしながら、竪穴住居をはじめ多くの遺構の存在が明らかになり、同時期における集落の中心区域にあたる可能性が高く、上沢遺跡の様相をさらに深く追究していく上で、重要な成果であると言えよう。また、上沢遺跡は過去の調査成果から、古墳時代～奈良時代においては他の遺跡と比べて、特殊性のある集落遺跡であることが認知されているが、今回の調査においても緑釉陶器、韓式系土器が確認されており、今後において特殊集落としての具体相が徐々に明らかにできるものと予測される。

fig. 56
調査地遠景

9．中（なか）遺跡

1．はじめに

中遺跡は旧摂津国の八田郷にあり、武庫川の支流である八多川と有野川の合流点付近、八多川左岸に位置する。八多川流域の平野には、上流から附物遺跡・古尾遺跡・上小名田遺跡・下小名田遺跡・中遺跡・日下部遺跡・日下部北遺跡と、縄文時代から江戸時代に至る各地代の遺跡が互いに隣接して存在する。そのなかで上小名田遺跡では平安時代から鎌倉時代の大型建物が多く確認されており、この時期、上小名田遺跡周辺がこれらの村々のなかで中核的な位置を占めていたようである。江戸時代には日下部の地から中世の轡が出土しており、『集古十種』に図が掲載されている。平成９年度に行なわれた中遺跡および日下部遺跡の発掘調査では古墳時代前期の河道・後期古墳・平安時代末頃の掘立柱建物・中世の掘立柱建物・江戸時代の鍛冶屋などの存在が確認されている。

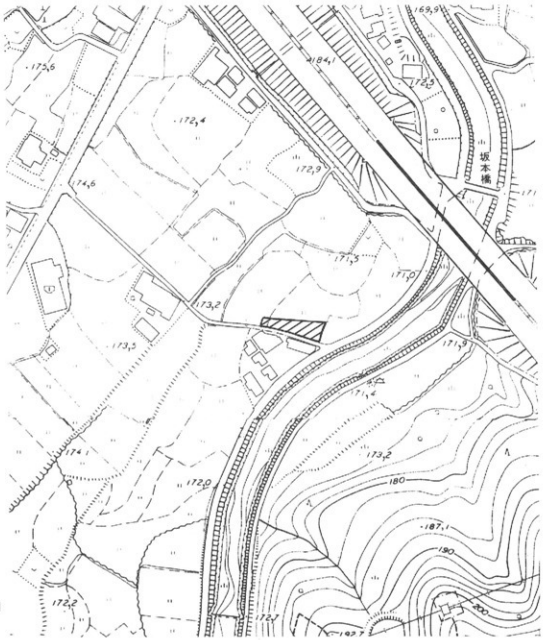


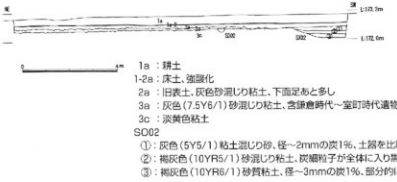
fig. 57
調査地位置図
1：2,500

2．調査の概要

道路敷設によって遺跡の破壊される部分について発掘調査を行なった。調査地の現況は水田である。調査の結果、遺構面1枚が現地表下約60cmで確認された。現況および遺構面ともに傾斜はなく、現地表の標高は173.0m、遺構検出面の標高は172.4mを測る。

現耕土および床土の下層に2a層旧表土がある。この層の下面、3a層上面も動物の蹄あとと推測される細かい凹凸が調査区全体に広がっている。

遺物包含層である3a層からは鎌倉時代から室町時代にかけての土器類が出土している。遺構面となる3a層下面、3c層「地山」淡黄色粘土上面にもおそらくは牛と推測される動物の蹄あとが、遺存状況の良い悪いはあるにせよ、調査地全面に残されていた。また蹄あとに踏み込まれ、「地山」に食い込んで縄文時代のサヌカイト製三脚石器が出土している。



1a：耕土
1-2a：床土、強酸化
2a：旧表土、灰色砂混じり粘土、下面足あと多し
3a：灰色(7.5Y6/1)砂混じり粘土、含鎌倉時代～室町時代遺物、下面が第1遺構面
3c：淡黄色粘土
SO02
①：灰色(5Y5/1)粘土混じり砂、径～2mmの炭1%、土器を比較的多く含む
②：褐灰色(10YR5/1)砂混じり粘土、灰細粒子が全体に入り黒っぽい、径～3mmの炭2%
③：褐灰色(10YR6/1)砂質粘土、径～3mmの炭1%、部分的に4%、下位やや土壌化

fig. 58
調査区東壁
土層断面図

fig. 59　調査区全景

fig. 60　調査区平面図

遺　構　　蹄あとの他、柱穴２・溝２（ＳＤ01・02）・土坑３（ＳＸ01～03）が検出された。

ＳＤ01　　ゆるやかに蛇行し、北東－南西行する溝。幅約1.0ｍ・遺構検出面からの深さ約10㎝を測る。土器片若干と、弥生時代のサヌカイト製石鏃１点が出土した。

ＳＤ02　　幅約80㎝で北東－南西行する浅い溝。底面の凹凸が顕著。

ＳＸ01　　径２ｍ強を測る不整形の土坑。底面の凹凸も著しい。遺構検出面からの深さ約55㎝。倒木址の類化。

ＳＸ02　　遺構の大部分が調査区外にある。北東－南西辺2.4ｍ以上を測る楕円方形？の遺構。遺構検出面からの深さ約50㎝を測る。覆土上位に野焼きの土器片を含む。須恵器はない。

ＳＸ03　　ＳＸ01と同じような遺構。遺構検出面からの深さ約60㎝。覆土中位やや下に炭を比較的多く含む層がある。

３．ま　と　め　　今回の調査には顕著な遺構は存在しなかった。全体に牛の蹄あとが顕著であり、中世においてこの地点は牛の飼育場所であることが多かったようである。ただし、土器類の出土量はややあり、付近には住民の居住域が存在するものと推測される。また、縄文時代・弥生時代の石器類の出土は、これまで八多川流域では数少なかった点から注目される。

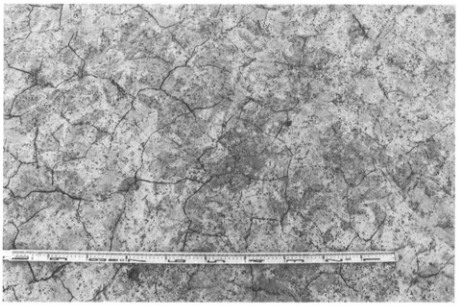
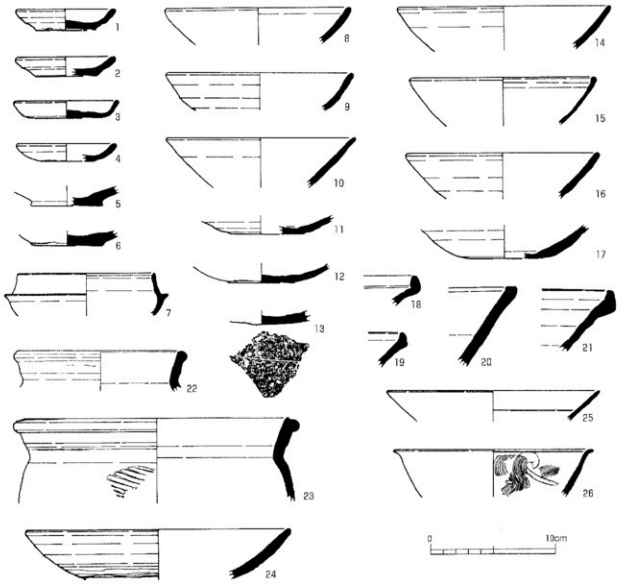
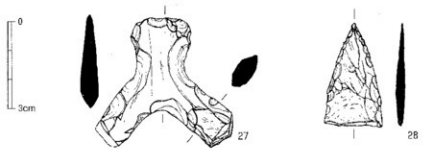


fig. 61　牛の蹄あと検出状況





1～21:須恵器、 22・23:陶器、 24:瀬戸美濃、 25:白磁、26:青磁 27・28:サヌカイト
(1～27:3a層、 28:SD01)

fig. 62 出土遺物実測図

10. 五番町（ごばんちょう）遺跡　第７次調査

１．はじめに

五番町遺跡は、標高10ｍ前後に位置する海岸線に近い遺跡である。これまでの調査で、縄文時代から近世にかけての遺構・遺物が出土している。発掘調査は、これまで６次にわたって行なわれており、第２次調査では奈良時代から平安時代の掘立柱建物が検出され、第５次調査では縄文時代後期と晩期の遺構と遺物が検出されている。

今回、当地区においてマンション建設が行なわれるため、工事に伴い影響を及ぼす範囲を対象として発掘調査を実施した。

fig. 63
調査地位置図
１：2,500

２．調査の概要

市街地での調査であるが、低層住宅の密集地域であったため、層序に大きな乱れはなかった。基本層序は、T.P.10.000ｍまでは盛土及び撹乱であり、その下に耕土、旧耕土、灰黄色シルト、T.P.9.600ｍで第１遺構面となっている。第１遺構面を形成している暗褐色土が第２遺構面の遺物包含層である。T.P.9.400ｍで第２遺構面の褐色土、その下層に淡茶灰色シルト質中砂～細砂、暗墨灰色粘質土があり、T.P.9.200ｍで第３遺構面である黄灰色粘質土の層序となっている。

下層確認のために調査区を東西方向と南北方向に断割トレンチを設定した。その結果、T.P.7.600ｍ付近の青灰色粗砂礫から縄文時代後期の遺物片が出土したが、土層の状態から遺構の存在は考えられない。

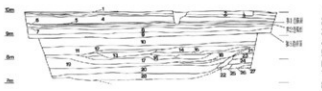


fig. 64　２区西壁土層断面図

1. コンクリート
2. 盛土及び撹乱
3. 耕土
4. 旧耕土
5. 灰黄色シルト
6. 暗褐色土
7. 褐色土
8. 淡茶黄色シルト質中砂～細砂
9. 暗墨灰色粘質土
10. 黄灰色粘質土
11. 乳灰茶色シルト質極細砂
12. 淡茶灰色シルト質極細砂
13. 乳茶灰色シルト質極細砂
14. 淡褐灰色シルト質中砂
15. 暗茶褐色シルト質極細砂
16. 茶褐色中砂～粗砂
17. 黄褐色極細砂シルト
18. 茶褐色シルト質細砂
19. 乳灰黄色極細砂シルト
20. 乳青灰色極細砂シルト
21. 淡茶褐色中砂
22. 茶褐色シルト質中砂
23. 暗黒灰色粘質土
24. 明黄灰色粘質土
25. 暗青灰色シルト質細砂
26. 乳青灰色シルト質極細砂
27. 青灰色粗砂礫
28. 明青灰色シルト

第１遺構面　旧耕土直下で検出される中世の遺構面と考えられる。２区については鋤溝などの痕跡は旧耕土面により削平を受けているため検出されなかった。１区では、現在の町割りとほぼ同一方向の鋤溝が南北方向を主として検出された。鋤溝の規模は、幅20～30cm、深さ２～５ｍを測る。１区中央の西よりには大きな溝状のものが南北にあり、直径５cm前後の小さな杭跡が多数検出された。これらは、耕作地を画するものと考えられる。

１区東端では、不明大型土坑（ＳＸ101）が検出された。規模は南北４ｍ、東西は調査区外に延びるため不明であるが、径2.5ｍ以上、深さは遺構面から30cmである。調査区の東側で深くなる可能性もある。出土遺物は、極少量の中世の須恵器、土師器片のみである。

第２遺構面　溝１条と土坑１基、ピット６基、井戸２基を検出した。溝はほぼ南北方向に検出され、幅50cm前後で深さ20cmの断面がＶ字をしたものである。埋土内からは遺物は出土しなかった。土坑は長径４ｍ、短径2.8ｍの楕円形を呈しており、遺構面からの深さは25cmを測る。ピットは直径20cm前後、深さは15cm前後の規模で、建物などを構成するものではなく、疎らに検出された。井戸についてはＳＥ201が直径1.3ｍ、深さが1.2ｍの規模のものである。

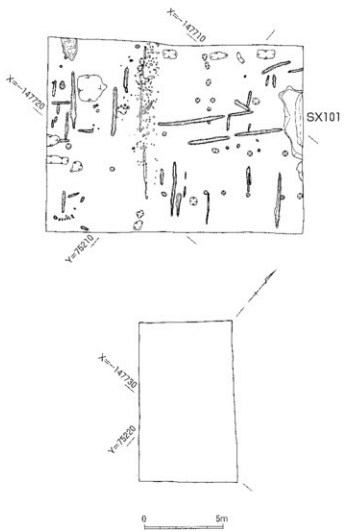


fig. 65　第１遺構面平面図

最終埋土からまとまって遺物が投棄された状態で出土した。ＳＥ202は直径80cm、深さが80cmの規模のものである。この井戸の中からは、庄内併行期の完形の壺や甕が埋納したような状態で５個体出土した。しかし、井戸の底からは浮いた状態であり、据置いた状態とは言いがたい。

第３遺構面　流路１条と、土坑、ピット多数を検出した。流路（ＳＲ301）は、東西方向のもので、幅２ｍ、深さ30cmの規模である。出土遺物はなかった。土坑は、２区で検出されたが、いずれも浅い窪み状の遺構であり、出土遺物はなかった。ピットは多数検出されたが、ＳＲ301の西側で検出したものは直径10～50cmで、深さが10～20cmの規模のものであるが、掘り込みの緩いものであるのに対し、東側で検出したピットは、直径20～40cmで深さが20～40cmの規模のもので、掘り込みも明確なものである。特にＳＰ301からは口縁部に返りがあり、平坦面をもつ鋸歯文が施された高杯が出土している。また、２区の遺構面直上では、太い突帯に貝殻背面押捺した、底の欠失した鉢が１点出土している。その他、遺物包含層

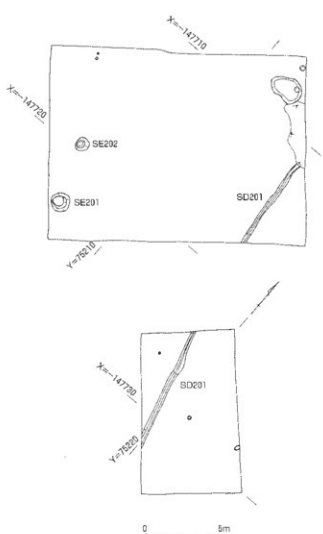


fig. 66　第２遺構面平面図

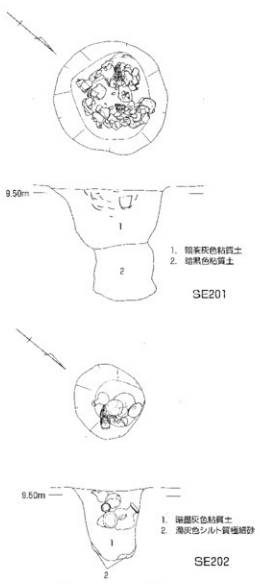


fig. 67　ＳＥ201・202平面図・土層断面図

やピットから、突帯文土器が出土しており、縄文時代晩期（長原併行期）の遺構面と考えられる。

第３遺構面のベース層である黄灰色粘質土内からは、滋賀里Ⅲｂに相当する遺物が出土しているが、遺構面を形成していないため、遺構も確認されなかった。

下層断割　下層確認のため、１区中央から２区西壁に沿う方向と、１区南壁に沿う方向の２ヶ所に断割トレンチを設定した。その結果、第３遺構面から1.5ｍ下がった青灰色粗砂礫から流されて磨滅した遺物片が１点のみ出土した。また、２区では南側に極端に落ち込む土層が確認された。

３．ま と め

調査の結果、第１遺構面（中世）、第２遺構面（弥生時代最終末・庄内併行期）、第３遺構面（縄文時代晩期・長原併行期）の遺構面を検出した。

第２遺構面は西に存在する長田神社境内遺跡との関連が考えられ、ＳＥ202からは庄内併行期の一括資料として良好な資料が得られた。

第３遺構面では、縄文時代晩期の遺構と遺物が比較的良好な状態で出土しており、遺構の検出状況から北方に集落址が検出される可能性が高い。

fig.68　第３遺構面平面図

11. 五番町（ごばんちょう）遺跡　第9次調査

1．はじめに

五番町遺跡は、市営地下鉄建設に伴う試掘調査ではじめて発見された遺跡である。平成11年度までに、6次にわたる発掘調査が行なわれている。特に、第2次調査では奈良時代から平安時代の掘立柱建物が確認されている。当遺跡は、縄文時代～平安時代・中世の遺構・遺物が確認されている。

今回の調査は、山手幹線拡幅工事に伴うもので、平成11年度に調査を実施した箇所のそれぞれ西側部分について行なった。

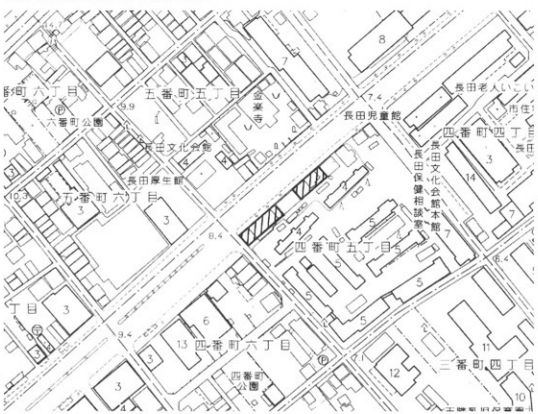


fig. 69
調査地位置図
1：2,500

2．調査の概要

調査区は2ケ所に分かれ、西側の調査区をA区、東側の調査区をB区と設定した。今回の調査地点の標高は約7.4mを測っている。

A　区

層序は盛土、旧耕土である灰黄褐色砂質土・褐灰色砂質土、遺物包含層の暗灰黄色シルト、そして現地表下約80cm程で黄灰色粘質シルトの遺構面となる。

第1遺構面　暗灰黄色シルト層上面で同一方向の近世溝を数条検出し、この下層の黄灰色粘質シルト層の遺構面で溝状遺構5条を検出した。

ＳＤ101　調査区中央から東方向に流れる溝状遺構である。横断面がU字形を呈し、幅1.5～1.7m、深さ35～40cmである。溝内からは、少量であるが土師器が出土している。

ＳＤ102　ＳＤ105から分岐して東方向に流れる溝状遺構である。横断面がU字形を呈し、幅0.7m前後、深さ約15cmである。溝内からは、少量であるが土師器が出土している。

ＳＤ103　調査区中央から東方向に流れる溝状遺構である。幅1.8～2m、深さ35cm前後である。溝内からは、少量であるが土師器が出土している。

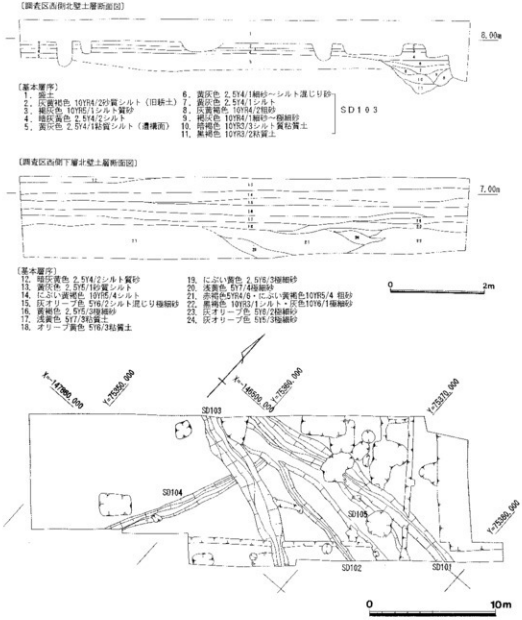


fig. 70　A区土層断面図・第１遺構面平面図

ＳＤ104　ＳＤ103に切られて検出された南方向に流れる溝である。幅１ｍ前後、深さ約35㎝で、横断面が凹状を呈している。出土遺物がなく、時期については不明であるが、ＳＤ103よりも以前と思われる。

ＳＤ105　調査区中央から東方向に流れる溝状遺構である。幅1.7～2.1ｍ、深さ20㎝前後で、溝内からは少量であるが土師器が出土している。

第２遺構面　第１遺構面から少し下がった面で、流路を１条検出した。

ＳＲ201　調査区中央から東方向に流れる流路である。第１遺構面で検出したＳＤ105とほぼ重なるように下層で検出され、幅３～4.3ｍ、深さ30㎝である。出土遺物がなく、時期については不明である。流路の横断面は緩やかなＵ字形を呈し、調査区南端では、高低差約1.3ｍを測り滝壺状に落ち込んでいる。そして、第８次調査地の方向に流れ込んでいる。

下　層　調査区の中央に下層断割トレンチを設営し、遺構面から－１ｍ（標高約6.4ｍ）まで人力掘削を行なった。層序は黄褐色砂質シルト、灰色～黄褐色砂となり、灰色系粗砂から縄

fig. 71
A区全景

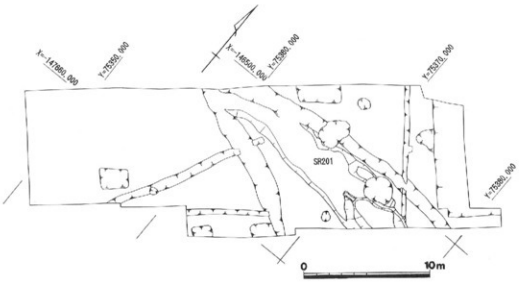


fig. 72　A区第２遺構面平面図

文時代後期の土器片が数点出土した。土層状況から、下層には縄文時代の土器を含む自然流路が推察される。

B　区　　基本層序は盛土・旧耕土、遺物包含層の黒褐色シルト、そして現地表下約１ｍ程で黄灰色粘質シルトの遺構面となる。遺構は、溝数条とピットを数基検出した。

ＳＤ107　　調査区東半を北西～南東方向に蛇行して流れる溝状遺構である。断面は浅いＶ字形を呈し、幅約２～３ｍ、深さ約80㎝である。溝内からは、土師器が出土している。

ＳＤ108　　調査区中央を東西方向に流れる溝状遺構である。断面はＵ字形を呈し、幅約90㎝、深さ約30～60㎝である。埋土は黒褐色土で、土師器が出土している。ＳＤ109、110を切り、ＳＤ107に切られる。

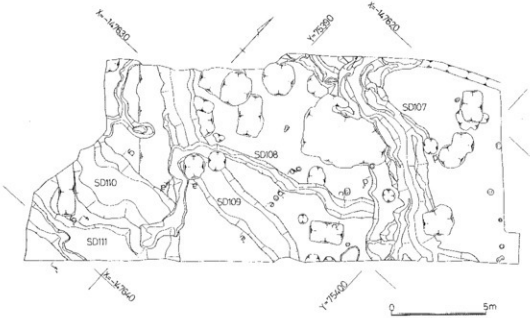


fig. 73　B区平面図

SD109　調査区西半を北西から南東方向に流れる溝状遺構である。幅約1.7m、深さは約60cmである。遺物は出土していない。

SD110　調査区西端を東西方向に流れる溝状遺構である。幅約3m、深さ約80cmとして検出したが、断割の結果、幅4m以上、深さ約1.4mであることが判明した。湧水のため南肩は十分に調査できていない。土師器が少量出土している。

SD111　調査区西端を東西方向に流れる溝状遺構である。幅約2.5m、深さ約40cmである。東側でSD110と合流する。遺物は出土していない。

3．まとめ

A区の調査では、溝状遺構を第1遺構面で5条、第2遺構面では、流路1条を検出したが、いずれの遺構においても遺物が少量しか出土しておらず、明確な時期についての決定に欠くが、出土遺物と隣接する調査から検証すると、第1遺構面の時期は、おそらく古墳時代と考えられる。第2遺構面で検出した溝状遺構は時期については不明であるが、古墳時代以前としておきたい。B区では、溝状遺構を数条検出した。特に、東半での検出状況は第6次調査と同様であり、関連性が伺える。遺物は少なく詳細な時期は不明であるが、おそらくは古墳時代のものと思われる。その他、東半でピットを数基検出したが、建物としては認識できなかった。

今回の調査、隣接して南側で同時に実施した第8次調査、そして前年度に実施した第6次調査の結果を併せて考えると、この地域には多くの溝・流路が北から東西方向に存在していると考えられる。これらの溝は検出状況から考えると、人工的に掘削されたものと考えるよりも、自然的なものと思われる。但し、SD104にみられるように溝の断面形がV字形に近く直線的なものもある。この溝は、各溝に対して直交し南の方向に延びている。今回の調査地域では、建物等の遺構は確認されていないが、この溝が取水のため掘削されたものであれば、調査地の南側に集落域が存在する可能性がある。

12. 御蔵遺跡　第32次－1～8調査

1．はじめに

御蔵遺跡は長田神社北方から流れる苅藻川が形成した、扇状地扇央に位置する遺跡である。湊川の付け替えに伴って開削された新湊川は、ほぼ直線的に南西流した後に苅藻川と合流し、苅藻川の流路を踏襲して海に流れ込むが、御蔵遺跡の西側を流れる新湊川は流路を踏襲した部分であるため、現在の地形は近代以降に改変されたものではなく、概ね自然地形を留めていると考えられる。調査地点周辺の微地形を見ると、北西から南東へ低くなる緩斜面地であるが、西側の新湊川に沿った自然堤防と考えられる高まりが続いており、その後背地に相当している。平成元年度の第1次調査以降、しばらく発掘調査を実施する機会がなかったが、平成9年度以降は御菅西地区区画整理事業とその受皿住宅・区画整理後の個人住宅の築造に伴う調査事例が増加し、今回で第32次を数えることとなった。これまでの調査によって、大別して弥生時代後期～末頃・古墳時代前期・奈良～平安時代・中世の複合遺跡である事が判明している。中でも奈良～平安時代の遺構として比較的大きな掘立柱建物群が検出されており、一般の集落とは異なる可能性も考えられている。

今回の調査は、区画整理事業地内の街路建設に伴う発掘調査である。

なお当調査については、既に平成12年度に『御蔵遺跡第4・6・14・32次発掘調査報告書』を刊行しており、本書では概要を示すに止めるため、詳細は報告書を参照されたい。

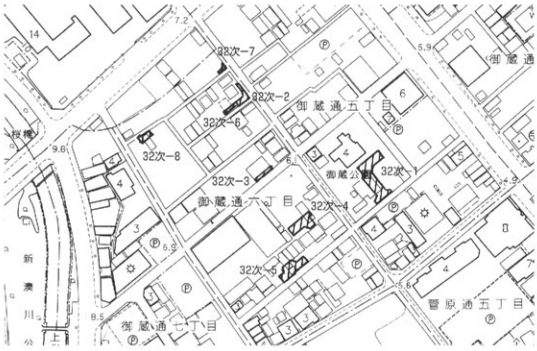


fig. 74
調査地位置図
1：2,500

2．調査の概要

第32次-1調査

2面の遺構面が検出された。第1遺構面からは掘立柱建物1棟、ピット60基、溝状遺構8基、落ち込み状遺構3基が検出された。特記すべき遺物として、遺構面上から富壽神寶（初鋳818年）3枚が重なって出土した。第1遺構面の時期は平安時代前半頃の時期が考えられる。第2遺構面からは溝状遺構7条、落ち込み状遺構2基、ピット14基などが検出された。また、古墳時代前期（庄内併行期）の土器が集中して検出された箇所があった。

第32次-2調査　2面の遺構面が検出された。第1遺構面からは水路状の遺構を検出したのみである。中世末～近世初めにかけての遺物が出土した。第2遺構面からは小区画の水田6面を検出した。いずれも部分的で1枚の水田の広さは不明である。水口、稲株、足跡等はみられなかった。今回検出された水田面は、細片ではあるが、古墳時代と思われる須恵器を含む土石流に切られていることや、周辺のデータからおそらく庄内期のものと考えられる。

第32次-3調査　2面の遺構面が検出された。第1遺構面から溝1条、ピット1基、第2遺構面からは溝1条、落ち込み1ケ所、ピット1ケ所が検出された。

今回の調査では、中世と平安時代前後の溝を検出した。中世の溝SD01は直線的に掘られた素掘りの断面U字形の溝で、耕作に伴うものと考えられる。一方平安時代前後の溝S201は、第20次調査第8調査区B検出のSD203に構造・方向が類似し、遺跡を北西から南東に貫流する溝と考えられる。

第32次-4調査　中世と奈良～平安時代の2時期の遺構面が確認された。第1遺構面からは調査区を東西方向に流れる溝1条を検出した。第2遺構面からは調査区の西側で、南北方向に流れる溝1条を検出した。この下層では洪水砂を掘削すると庄内期の水田面の広がりを確認した。この地域の古墳時代以降は水田などの生産域として利用されていたと考えられる。

第32次-5調査　検出した遺構は溝1条、浅い落ち込み1基を検出した。今回の調査区は湿地となっていく境界付近部分に相当する位置で、旧耕作土が厚く、7層も確認できたこともその傍証となろう。奈良～平安時代の遺構は検出されたが少ない。溝は集落中心から湿地方向へ排水する溝であったと考えられ、やはり北側に集落の中核部分が存在するものと思われる。弥生時代・古墳時代・中世の遺構は検出されず、遺構の分布範囲から外れているものと推定される。

第32次-6調査　2面の遺構面が検出された。第1遺構面からは土坑1基、畦状遺構3状を検出した。第2遺構面からは南北方向の畦状遺構を検出した。

それぞれの遺構面において遺物の出土量が少量で、時期決定が困難であるが、周辺の調査内容を比較して検討すると、第1遺構面は奈良～平安時代の遺構面と考えられる。第2遺構面は湿地状の堆積がみられ、周辺で確認されている庄内期の水田土壌に類似する。

第32次-7調査　これまでの周辺地域の調査例から見て、今回の調査地は、御蔵遺跡内において弥生時代末の水田地帯にあたる部分の一部であると考えられるが、さらに上層の中世あるいは古代の層については顕著な遺構は確認できなかった。中世に堆積したと考えられる粘土層の直下に庄内期に起きた洪水によって堆積したと見られる砂層が堆積しており、これらの層上から該当時期の遺構は確認されなかったことからも、比較的この時期の遺構の分布が稀薄な地帯であるといえる。

第32次-8調査　3面の遺構面を検出した。第1遺構面では平安時代前期（10世紀代）の鋤溝、第2遺構面ではピット、第3遺構面では、水田畦畔とともに足跡を多数確認した。水田の時期については、この水田を覆っていた砂層から5世紀代の遺物が出土しており、それ以前と考えられるが、出土遺物に乏しく、特定しにくい状況である。なお、東端部分で大畦畔と思われるものを検出しているが、部分的であり、あまり明確ではない。

13. 御蔵遺跡（第33～36・39～43次調査）

1．はじめに

御蔵遺跡は長田神社北方から流れる苅藻川が形成した、扇状地扇央に位置する遺跡である。調査地点周辺の微地形を見ると、北西から南東へ低くなる緩斜面地である。平成元年度の第1次調査以降、しばらく発掘調査を実施する機会がなかったが、平成9年度以降は御菅西地区区画整理事業とその受皿住宅・区画整理後の個人住宅の築造に伴う調査事例が増加した。これまでの調査によって、大別して弥生時代後期～末頃・古墳時代前期・奈良～平安時代・中世の複合遺跡である事が判明している。中でも奈良～平安時代の遺構として比較的大きな掘立柱建物群が検出されており、一般の集落とは異なる可能性も考えられている。今回の調査は、個人住宅建設に伴う発掘調査である。なお当調査の中で、第40・42次以外については、平成14年度に『御蔵遺跡第5・7・11～13・18～22・24・28・29・31・33～36・41・43次発掘調査報告書』を刊行しており、本書では概要を示すに止めた。詳細は報告書を参照されたい。

fig. 75
調査地位置図
1：2,500

2．調査の概要

第33次調査

弥生時代～中世の6面の遺構面が検出された。律令期の遺構面では遺構は検出されなかったが、硯、緑釉陶器、灰釉陶器などが出土している。上層の遺物包含層からの出土ではあるが瓦もあり、出土した遺物の内容は御蔵遺跡の名にふさわしい。また、火を焚いた痕跡・馬歯などの出土はどういった行為の痕跡であるのか興味をひかれる。他の遺構面の多くでは水田、畠が確認され、長くこの地が耕作地として土地利用されてきたことを示している。この中で第6遺構面の弥生時代の水田の存在は、御蔵遺跡の歴史を1枚遡らせるものである。

fig. 76
第34～36次－1
調査区全景

第34～36次-1調査　隣接する3軒分の調査である。尚、換地の都合上、調査ができなかった第36次調査については後日、第41次調査と同時に第36次－2として実施された。

検出された遺構は、平安時代の掘立柱建物3棟、中世の掘立柱建物2棟、中世の井戸1基の他、溝数条、ピット多数を検出した。特に井戸は、建築部材を転用した井戸枠が良好に遺存し、掘形内外から平安～鎌倉時代の須恵器、土師器、白磁、緑釉陶器の他、動物遺体、富壽神宝（初鋳818年）1点、寛平大宝（初鋳890年）2点が出土した。

第36次-2調査　2面の遺構面が検出された。第1遺構面からは掘立柱建物2棟、ピットが30基、溝2条落ち込み条遺構1基等を検出した。この遺構面では奈良～平安時代及び中世の遺物が出土している。また、調査区の南側で、下層面から第41次調査区に続く落ち込み状遺構を検出した。

第39次調査　3面の遺構面が検出された。第1遺構面は畦畔等は確認できなかったが、土壌、近隣のデータから水田面と考えられる。奈良時代～中世の遺物が出土した。第2遺構面では西半部から溝3条、土坑1基、ピット2基、落ち込み状遺構2基を検出した。東半部は湿地状を呈していたものと考えられる。遺物包含層から奈良～平安時代の遺物が出土した。第3遺構面では溝7条、ピット2基が検出され、遺物包含層から奈良時代の遺物が出土した。

第40次調査　調査の結果、工事の掘削深度が全体として遺物包含層に達しなかった。

第41次調査　2面の遺構面が検出された。第1遺構面からは掘立柱建物3棟、ピット80数基、土坑4基、落ち込み状遺構3基等が検出された。この遺構面では奈良～平安時代の及び中世の遺物が出土した。第2遺構面ではピット、落ち込み2基を検出し、飛鳥・奈良時代の遺物が比較的まとまって出土した。

第42次調査　2面の遺構面が検出された。第1遺構面からは平安時代（12世紀初頭）と考えられる掘立柱建物1棟の他、ピットが検出された。第2遺構面からは溝2条を検出した。溝の時期については奈良時代以降12世紀以前と考えられる。

第43次調査　調査の結果、調査区内は自然河道内に位置し、東端で肩を検出した。出土遺物から埋没時期は中世以降で、近世までには埋没し、以後水田化したものと考えられる。

14. 御蔵遺跡　第38次－1～3調査

1．はじめに

平成17年1月17日に発生した阪神・淡路大震災では、神戸市長田区御蔵通一帯は甚大な被害を受けた。その復興に伴う区画整理事業・市営住宅建設・個人住宅建設に伴う発掘調査は平成9年度から実施されており、これまでに奈良時代、平安時代の掘立柱建物、中世の墓など弥生時代後期末～中世にかけての遺構・遺物が確認されている。

御菅東地区では、区画整理事業に伴う発掘調査は平成11年度から実施され、飛鳥時代の掘立柱建物や、奈良時代～中世の溝、ピットなどが確認されている。

今回の調査地は御菅東地区震災復興土地区画整理事業に伴うもので、昨年度調査時に、既存建物の除却作業が完了していなかったために未調査となっていた箇所である。

なお、今回の調査については、既に平成12年度に『御蔵遺跡　第17・38次発掘調査報告書』を刊行しており、本書では概要を記すに止まった。詳細については報告書を参照されたい。

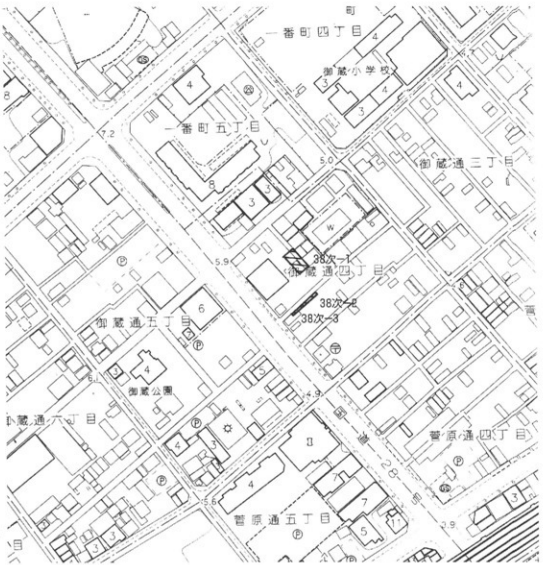


fig. 77
調査地位置図
1：2,500

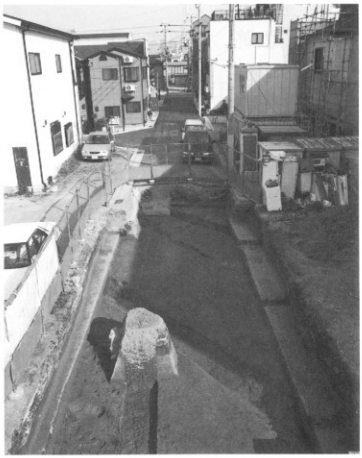


fig. 78
第38次－１
調査区全景

２．調査の概要　調査地は平成11年度の第17次－６及び－４調査区に挟まれた部分である。溝３条、落ち込み状遺構３基、ピット４基を検出した。

第38次-1調査　ＳＤ03と04は東西方向の溝で、規模は、ＳＤ03が幅90～115㎝、深さは20㎝前後、ＳＤ04が幅65～90㎝、深さは25㎝前後で奈良時代～平安時代の須恵器・土師器が出土した。この溝の間は道路の可能性がある。

第38次-2調査　調査地は北側が平成11年度の第17次－２調査区に隣接する。ピット４基を検出した。

第38次-3調査　調査地は第38次－２調査区の西側に隣接する。溝１条、ピット２基を検出した。

３．ま と め　今回の調査では、第38次－１調査は、昨年度の調査（第17次－４・－６調査）の間を埋めるものとなったが、第17次－４で一部が確認されていたＳＤ04と、ＳＤ03はほぼ東西方向であることが特筆される。溝間の距離は約５ｍである。出土した遺物の大半が微細な小破片であるため、詳細な時期の確定は困難であるが、奈良時代～平安時代のものと考えられる。その性格が区画を目的とするものか、また、灌漑に伴うものであるかは不明である。並行する溝という状況から道路である可能性も考えられるが、これまでに御蔵遺跡において確認されている奈良時代の掘立柱建物とは方向が同一とはならない点から、区画を目的とするには疑問が残る。

第38次－２調査、第38次－３調査では、ピットを検出したが、この内第38次－２調査のＳＰ01と第38次－３調査のＳＰ02は、両調査区のすぐ北側で平成11年度に行なった、個人住宅建設に伴う第30（旧35）次調査で検出された２基の柱穴と合わせて、２間×４間の掘立柱建物になる可能性がある。

15. 長田神社境内遺跡　第14次調査

1．はじめに

長田神社境内遺跡は六甲山系南面、苅藻川右岸に位置する。これまでの13次にわたる発掘調査の結果、縄文時代晩期から近世にいたるまでの遺構・遺物が確認されている。近接する地点の調査としては、平成８年度に今回の調査地点の北東70ｍの苅藻川沿いで第７次調査が行なわれ、弥生時代中期・古墳時代前期・同中期・同後期の自然流路、古墳時代前期の掘立柱建物、鎌倉時代～室町時代の溝・土坑・井戸、江戸時代の長田神社神官の屋敷跡などが確認された。古墳時代前期の流路からは土器が出土しており、この西側の段丘部に大規模な集落の存在が推定されている。また、神官の屋敷跡では建物・園池・水琴窟・築地・井戸・石組み溝などが確認されている。

今回の調査地は福聚寺の境内である。福聚寺は臨済宗の寺院で、明和２年（1765）銘のある現本堂の棟札には、永和２年（1376）開山、永禄３年（1560）兵火により堂宇焼失、慶長５年（1600）再建、明和２年（1765）破損のため建て替えなどの記事がある。現本堂を解体した際、本堂の建築材に古い部材を転用したもののあったことが確認されている。

現在福聚寺の境内には薬師堂があり、薬師如来・日光菩薩・月光菩薩が祀られている。節分に長田神社で行われる追儺式に先立ち鬼役の七人は福聚寺の薬師堂に参詣、太刀渡しの儀式を行っているが、これは廃仏毀釈によりもともと長田神社にあった薬師堂が福聚寺に移されたという経緯があってのことである。長田神社の祭神は薬師如来の本地とされ、古く神社境内に薬師堂があり、本来追儺式はこの薬師堂で行われていた行事であった。

福聚寺は東に下る斜面地と苅藻川沿いの平地との傾斜の変換部に位置する。北西側約50ｍは山塊から派生するピークとなっており、この尾根上は古くから墓地（長田墓地）として利用されている。傾斜地にあたる今回の調査地西側は境内の平坦面を造成するため傾斜地を切り削していることが現況でも明らかである。

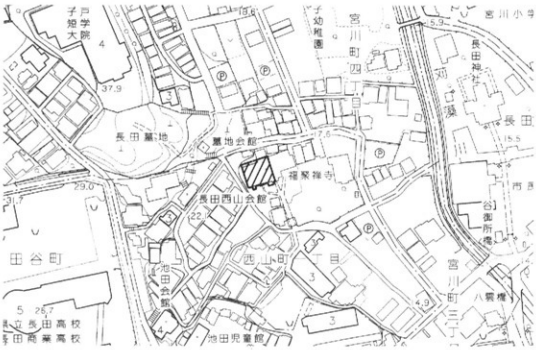


fig. 79
調査地位置図
1：2,500

調査区東壁（第2遺構面まで）とトレンチ1東壁（第2遺構面以下）の断面図を合成

fig. 80　土層断面図

2．調査の概要　今回の発掘調査は寺院本堂の再建によって遺跡の破壊される範囲・深度について、これを行なった。ただし、下層の状況について確認を行うため、工事影響深度以下についても一部トレンチによる調査を行っている。

発掘調査の結果、3枚の遺構面が確認された。それぞれの標高は以下の通りである。

遺構面　現地表（1a層上面）：約20.6m～約20.5m
第1遺構面（1a層下面）：約20.5m
第2遺構面（2b層下面）：約20.5m～約20.2m
第3遺構面（4層下面）：約20.5m～約20.1m

第1遺構面　明和2年（1765）に建立された旧本堂に対応する遺構面。本堂（SB01）に直接伴うものとして礎石の他、水琴窟を伴う縁先手水鉢（SG02）・池（SG01）・排水用の土管（SX05）・便所遺等がある。この他大型掘立柱建物（SB02）が確認された。また、本堂建立に際し山側の斜面部がカットされ、逆に調査区の東半は盛土（2層）がなされている。

SB02　本堂造成の盛土上面から掘り込まれる掘立柱建物。柱間はそろわないが、東西4間（15m）以上×南北5間（9.6m）以上がある。柱はすべて抜き取られ、抜き跡にはベースとなる土が単層で入る。柱穴の深さは50cm以上を測るものもあり、かなり深い。痕跡から柱が角材であることも確認された。本堂建設に伴う仮設的構造物であろう。

SG02　水琴窟を伴う縁先手水鉢。本堂北辺西隅に位置する。本堂裏手の西側は現状も築山と大池がある。池は大正時代末に一部埋め立てられ、現状が改変されているが、築山部分は現状では機能していないものの守護石・滝など作庭当初からの造作が残されている。これらは江戸時代の作庭の特徴を示し、おそらく明和2年の本堂建設に伴う庭と考えられるが、この縁先手水鉢も庭の一部として作られたものであろう。現本堂本尊の置かれる内陣の西隣に位置する上宮とよばれる部屋の北側縁先に設置される。庭全体もこの部屋から眺めるように設計されている。

この手水鉢は大正末の改築の際に撤去され、水琴窟などは埋められていたが、移動されてはいるものの手水鉢自体は寺に残され、また、他の役石などもそのままの状態で埋められていた。遺存状況が良好であるため、遺構截ち割りに先立ち手水鉢を元の位置に戻した上で記録を作成した。

この遺構は、手水鉢をはじめ清浄石・水汲石・水揚石・蹲石・水掛石などの役石がそろい、定石通りの配置となっている。

水揚石と手水鉢の間に挟まれトンネル状となっている部分から池の方向に延びる暗渠と土管が存在する。底のレベルは両者共手水鉢側が高く、池側が低い。手水鉢側からの排水施設と思われる。両者は共存したものではなく暗渠が排水機能を果たさなくなったため、付け替えとして土管を設置したものと考えられる。ただし、その底レベルは水掛石以上で

あり機能として不審が残る。水琴窟の甕内部に溜まった水の排水施設は存在しなかった。古い水琴窟には土中のしみ込みだけに任せ、特段排水施設を設けないものがあるということで、その例かとも思われる。ただし、甕の周囲の土層は粘土が多く、どの程度水のしみ込みが期待できるのか不安が残る。水琴窟の音響効果を高めるためもあり、甕の周囲には堀方内に大小の礫が詰められている。その隙間にもある程度水を溜める事は期待できる。

逆さに置かれた甕の底部は執拗に打ち欠かれ、現状では径17cmほどの穴になっている。古式の水琴窟には甕底の穴が大きいものがあるというが、これが本来の形なのか、後に割られたものなのか判然としない。水琴窟内部底面には大ぶりな平石が据えられているが、その上にこの甕底部の破片・剥片がかなりの割合、少なくとも8割以上が残されていた。

ＳＧ01　内陣の東隣の部屋、下宮に面する池、石材はほとんど使用されず、しっくいで作られるひさご形のもの。甕を横にして、魚の寝床としている。排水の土管ＳＸ05に石組みの溝でつながる。

ＳＸ05　排水用の土管。旧本堂西裏手の大池の方向からの北側を通り東へ延びる。西端は土管が割られ、口に石が差し込まれていた。この土管は江戸時代の印籠式に分類されるものであるが、これまでに報告されているものに類例を見ない形状をもつ。ほぼ水平に設置されているが、土管の接続部分の形態から西方、大池側から東へ排水するものと推測される。設置の方法は溝底のバラス敷きの上に土管を置き、接合部には土砂の流入を防ぐため丸瓦片で蓋をし、さらにバラスで土管を包むように埋めるものである。

盛　土　本堂造成の際の盛土（２層）。調査区の西半は斜面地をカットしているため、地山面＝遺構面となるが、東半は第２遺構面の上に盛土がなされている。盛土は灰褐色シルト質粘土と真砂土の混ざった土で、飛鳥時代の土器片が多く含まれる。調査地が丘陵斜面であるという立地もあり、この遺物の出土状況はこの丘陵における古墳の存在を推測させる。

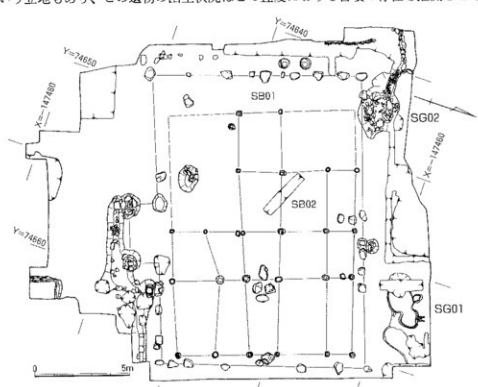


fig. 81
第１遺構面
平面図

第２遺構面　２層を除去すると現れる遺構面。遺構面は全体に薄く炭で覆われている。火災面に多い焼土・炭化材の遺存、あるいは瓦の散乱などがみられないことから、この炭層は火災ではなく、第１遺構面の旧本堂造成に先立つ野焼きのような行為の痕跡と推測される。この炭層からは陶磁器・寛永通宝・桟瓦などが出土した。遺構面は南半が低く、北半が段をもって一段高くなる。この壇上で礎石建物（ＳＢ03）・雨落ち溝（ＳＤ01）などが検出された。南半の低い部分は何度かの造成が行われ、そのたびに利用状況が異なっている。

壇上の遺構
ＳＢ03　柱間２間×２間の礎石建物。礎石は全て抜かれている。壇部分の盛土は建物部分とその東側で異なっている。建物部分は真砂土を主体とし、灰褐色シルトの混じるものであるのに対し、その東側は黄褐色シルトで貼り床されている。礎石の抜き痕や、遺構面を覆う炭層などから瓦が出土している。

ＳＤ01　ＳＢ03の西側にある石組みの溝。石材は１段積みで、その半数ほどが遺存しており、抜かれている部分も石材の痕跡が残されていた。調査区北半、この溝よりも西の部分は削平されているためか、この面の遺構は確認されなかった。

ＳＤ11　ＳＢ03の南側にある雨落ち溝。壇前面をのびる。

壇前面の遺構
ＳＸ03　壇の前面は数次にわたり土盛りや掘削などの造成が行われている。第１遺構面、旧本堂造成の際の盛土である２層を盛った際には、この部分は施設のない更地であったと考えられる。その前には調査区の南西隅に石組みの池（ＳＧ03・ＳＸ06？）が存在した段階、さらにその前に調査区南半中～西部にかけての、プラン東西幅約9.8m、南北7.0m以上、深さ約1.0mの掘削造成（ＳＸ03）が行われた段階、そしてそれ以前の遺構面と少なくとも４枚の遺構面が確認された。

ＳＸ03については、当初方形の池かと考えたが底面にヘドロの堆積がなく、池とは考えにくい。段造成であろうか。

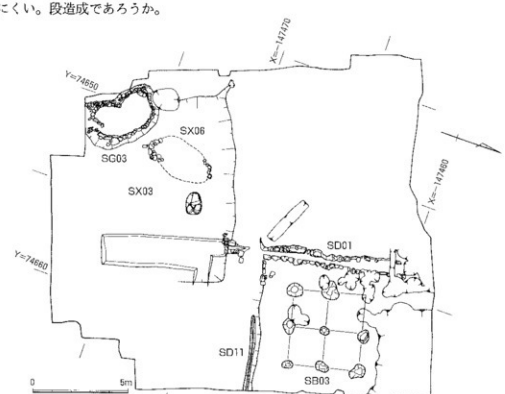


fig. 82
第２遺構面
平面図

第３遺構面　工事の影響を受ける調査区北部と下層の確認を行うため、トレンチを設定した調査区南東部について調査を行った。４区では古墳時代前期から飛鳥時代の遺構群ののる面が、東端でほぼ南北方向で直線的に40～50cmカットされ、以東は一段下がる平坦面が造成されている。この造成は中世であろうか。調査の結果、上段の４区、下段にあたるトレンチ１・２ともに濃密に遺構の存在することが確認された。なお、第２遺構面と同様、調査区北西部は削平され遺構面が残らない。中世の火災面と溝・土坑・柱穴など、飛鳥時代の柱穴、古墳時代後期の掘立柱建物（ＳＢ04他）、古墳時代前期の落ち込み（ＳＸ02）・溝（ＳＤ09）・自然流路（ＳＸ04）などが確認された。

中世火災面
中世の遺構　トレンチ１・２で確認された。第３遺構面を覆う灰・焼土層で出土遺物から中世の火災面と推定される。４区は第１遺構面から第３遺構面まで同一面であるため、火災は残らない。中世の遺構として溝（ＳＤ06・07）・土坑（ＳＫ20・21・27・37等）・柱穴などがある。瓦の出土はなかった。

古墳時代の遺構　４区で確認された巨大な落ち込み、或いは段造成ＳＸ02は古墳時代前期のもので、その中に土器の集中する部分がある。北西隅の土器集中部分は高杯が多い。ＳＸ02の検出時に出土したものであるため、この遺構に伴うかやや不安はあるが、碧玉製管玉１点がこの土器集中地点から出土した。また、旧石器のポイント・縄文時代の異形石器・滑石製紡錘車もＳＸ02から出土している。

柱穴群　ＳＸ02の埋没後、その上面から堀り込まれる掘立柱建物等の柱穴が多数存在する。ただし、ＳＸ02上面でこれらのプランを検出することは困難で、ＳＸ02の床面で確認したものがほとんどであった。したがって４区には本来確認できた以上に柱穴が存在したと考えられる。これらの柱穴のうち、掘立柱建物として把握できるものが数棟ある。柱穴から出土

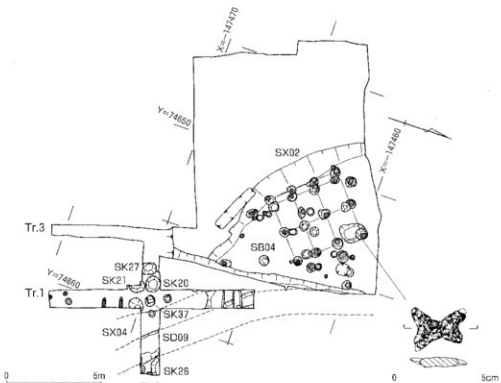


fig. 83
第３遺構面
平面図

した土器には古墳時代後期のもの・飛鳥時代のものなどがある。建物としての柱穴の把握や、その時期の比定は整理の進んだ段階でこれを確定したい。

ＳＤ09　幅約1.3m、遺構確認面からの深さ約70cmを測る、古墳時代前期の溝。粗砂で埋没しているが、その中に多量の古式土師器が含まれる。

ＳＸ04　ＳＤ09に切られる自然流路。シルト質の埋没土にやはり多量の古式土師器が含まれている。ベース土と土質が似ているためＳＸ04の検出は困難であり、プラン確認はできなかったが、トレンチ１の北部の第３遺構面或いは４区のＳＸ02底面には土器片がみられ、ＳＤ09と同じ方向にこの自然流路が続くものと考えられる。

ＳＫ26　トレンチ２東隅で検出された土坑。古式土師器が多く出土した。

３．ま　と　め

各時代にわたり当初の予想を超える成果が上がった。以下、時代順に述べる。

①縄文時代の異形石器に加え、当遺跡では初めての旧石器が出土し、当地の歴史が一気に１万年ほど遡ることになった。

②第７次調査と同様、古墳時代前期の溝・自然流路が検出され、そこから多量の土器が出土した。付近に当該期のかなり大きな集落の存在することが確定的となった。

③古墳時代前期から後期、そして飛鳥時代にかけての掘立柱建物を構成する柱穴群が多数検出された。遺構密度の高さは、この地点がこの時期の長田神社境内遺跡の中心部分のひとつであることを示している。

④福聚寺旧本堂造成時の盛土から飛鳥時代の蓋坏が多く出土した。これは造成に際して切り崩した地点に古墳が存在したため、盛土中に古墳の副葬品が混入した可能性が高い。出土した土器は須恵器蓋坏ばかりが目立つこともこの推測を助ける。そうであるなら調査地の北西部分は丘陵斜面がカットされており、ここに古墳のあった可能性が高い。まだこの丘陵上、現在墓地となっている尾根部分に後期群集墳のある可能性が考えられる。

⑤中世以降の造成面として、ⅰ火災層に覆われる中世の造成面（第３遺構面）、ⅱ盛土の基壇上にあり、礎石をもつ２間×２間の瓦葺き建物（第２遺構面）、ⅲ盛土上に建てられた明和２年（1765）建立の旧本堂（第１遺構面）と、３枚の遺構面がある。これは、ⅰ永和２年（1376）開山、永禄３年（1560）兵火により堂宇焼失、ⅱ慶長５年（1600）再建、ⅲ明和２年（1765）破損のため建て替えという旧本堂棟札の記事とうまく対応するようにみえる。今後出土遺物を検討することによって、考古学的にこの棟札の記事の裏付けがとれる可能性がある。

⑥旧本堂に付属していた水琴窟をもつ縁先手水鉢を、復元して記録作成を行うことができた。明和２年という年代のはっきりしたものであり、その構造を地下構造まで確認できたことは資料的に重要なものとなる。また、類例の少ない江戸時代の土管について新例を加えることができたことも特筆される。なお、この手水鉢は後日庭園の整備とあわせ、発掘された石材を使用して復元されることになっている。

16. 水笠遺跡 第4次調査

1. はじめに

今回の調査地は、平成11年度に調査を実施した第1次調査の街路継続部分である。第1次調査においては、弥生時代と考えられる溝・ピット等が検出されているものの、遺物包含層は検出されず、遺構の精細な所属時期は不明であった。今回の調査は、第1次調査で検出した遺構の広がりを確認し、遺構の性格を明確にする目的で実施した。

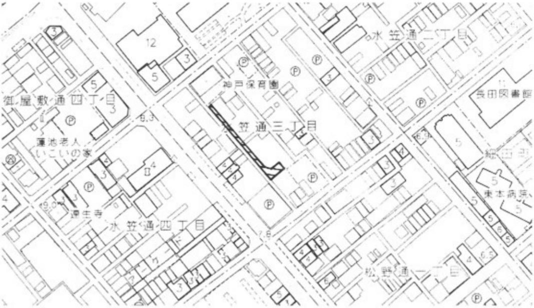


fig. 84
調査地位置図
1 : 2,500

2. 調査の概要

基本層序

調査した街路のうち、東西街路部をA区、南北街路を南から順にB・C・D区に地区割して調査を実施した。重機掘削の結果、須恵器・土師器を含む暗灰褐色粘性砂質土の遺物包含層A・B区で5cm～15cm前後で残るが、C・D区では攪乱・削平のため一部に遺物包含層を残すにとどまる。この遺物包含層の下層黄灰色砂質土の上面で遺構を検出したが、B・C区で土層を観察した結果、一部のピットに遺物包含層上面から掘り込まれているものがあり、2時期の遺構面があったと考えられる。

検出遺構

検出した遺構は、溝5条、性格不明遺構1ケ所、ピット35ケ所である。

SD01

溝SD01はA・B区のコーナー部で検出した、やや弧状に掘られた素掘りの溝である。断面形はU字形で、幅40cm、深さ10cm前後を計測する。溝内の埋土は暗灰色粘性砂質土で周辺のピット内の埋土と同じであり、埋土内からは須恵器・土師器の細片が出土した。

SD02

溝SD02はB区の南部で検出した調査区にほぼ直交して掘られた素掘りの溝である。溝は調査区の東壁沿いでやや北に屈折する。断面はU字形で幅70cm、深さ20cm前後を計測する。溝内の埋土は、下層に暗褐色砂、上層に暗灰褐色粘性砂質土が被覆していた。埋土内からは弥生土器の細片が出土した。

SD03

溝SD03はA区東端で検出した東西の素掘りの溝である。中央部南肩が現代のマンホール漏斗状をしている。溝の上端幅1.7m、2段目の上端部50cm、深さ50cm前後を計測し、東に行くにしたがって深くなる。溝内の埋土は、下層に茶褐色砂・灰茶褐色砂が南側から流れ込み、さらに灰褐色砂質土が上層部に堆積していた。溝の埋土内からは弥生土器が出

土している。

ＳＤ04　溝ＳＤ04はＡ区南西端で検出した断面皿状の浅い素掘りの溝である。幅1.0ｍ～1.2ｍ、深さ13㎝前後で暗灰色粘性砂質土を埋土とする。溝の埋土内からの出土遺物はない。

ＳＤ05　溝ＳＤ05はＤ区北端で検出した素掘りの溝である。現地表下30㎝で現在の耕土・床土直下で検出したが、東西にほぼ直線的に掘られている。溝は２段に掘り込まれ、断面形は漏斗状で底部はＶ字形となっている。溝上端幅1.2ｍ、深さ60㎝を計測する。溝の埋土は、下層部に暗灰褐色シルトが埋まり、上層部に明灰色粘質土・黒灰色粘質土が順次堆積している。埋土内からは、弥生土器細片が１点出土している。

ＳＸ01　性格不明遺構ＳＸ01はＣ区南端で検出した弧状に巡る溝に画された落ち込みである。南側は後世の攪乱・削平によって破壊され、溝は確認されなかったが、東南部の浅い不整形な落ち込みが溝の継続部の可能性がある。溝は幅20～60㎝、深さ５～26㎝、を計測する。溝の内側は平坦で、溝が竪穴住居の壁溝とすれば径５ｍ前後の多角形住居址の可能性がある。また溝内側の平坦面では径40～50㎝、深さ25㎝前後の円形柱掘形３ケ所を検出した。溝及び周辺では遺物の出土はない。

ピット　ピットは全調査区で35ケ所検出したが、建物等にまとまるものはない。一部のピットは深さ15～30㎝を測り、柱痕跡及び柱抜き取り痕跡が観察できる。

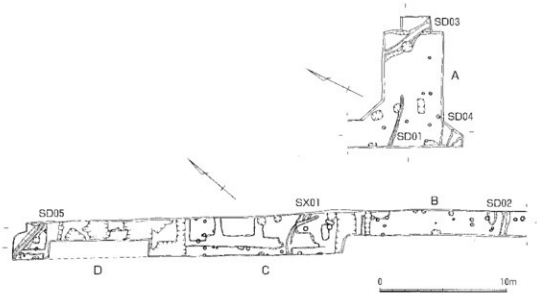


fig. 85　調査区平面図

３．ま　と　め　今回の調査では第１次調査と同様に、削平を被った溝ＳＤ03・ＳＤ05を検出した。しかしながら、溝内及びその周辺において、時期の明確な出土遺物がない。このため溝の時期を比定しうるには至っていないため、遺構の性格は特定できないが、弥生土器片のみがわずかながら出土しており、弥生時代の水田及び集落関連の溝が削平されながら残存したものと考えられる。今年度当該街路周辺の宅地で住宅再建に伴う発掘調査を実施しており、それらの成果とともに、水笠遺跡の性格を明らかにする必要がある。

17. 水笠（みずかさ）遺跡　第5～15次調査

1．はじめに

水笠遺跡は六甲山系西端付近の南側に広がる沖積地の微高地に立地する遺跡である。当地一帯は新長田駅北地区震災復興土地区画整理事業が進められている地域で、平成11年度に対象地域内で工事に先立って遺跡の有無を確認する試掘調査が実施された。その結果水笠通２・３丁目の街区で新たな遺跡が確認され、地名をとって水笠遺跡と命名された。試掘調査以降、区画整理事業と個人住宅建設に伴う発掘調査が順次実施され、今回で第15次を数えることとなった。これまでの調査により弥生時代・古墳時代・中世の遺構が存在する複合遺跡であることが判明したが、市街地であるため遺構面の遺存状況は概して悪い。

今回の調査は区画整理区域内における、個人住宅建設に伴うものである。尚、今回の調査については平成14年度に『松野遺跡第11～23・25・26・29～31次　水笠遺跡第２・３・５～15・17～21次発掘調査報告書』を刊行しており、本書では概要を記すに止まった。詳細については報告書を参照されたい。

fig. 86
調査地位置図
1：2,500

2．調査の概要

基本層序　大別して上から順に、近現代の整地土、都市化直前の耕作土、旧耕作土、遺物包含層、地山と続く。現地調査時には遺物包含層と地山を区別したが、遺物包含層から地山へ徐々に変化して層界の不明な部分もあり、遺物包含層は地山の上部が土壌化したものと判断される。したがって本来の遺構面は遺物包含層の上面と考えられるが、ほとんどの遺構は基盤層上面まで掘り下げなければ確認できなかった。

第５次調査　平成11年度に実施した、第１次調査の都市計画街路部分東側に接する角地にあたる。第１次調査においては、溝・ピットが今回の調査地に接して検出されており、当該地においても連続する遺構が検出すると考えられた。検出した遺構はピット14ケ所、溝１条で、ピットの内、調査区中央の４ケ所のピットで構成される柱列１条を検出した。溝からわずかに弥生土器片が、遺物包含層から中世の土師器・須恵器細片が出土した。

第６次調査　今年度実施した、第４次調査の北東隣に位置する。溝１条、ピット８基を検出した。遺

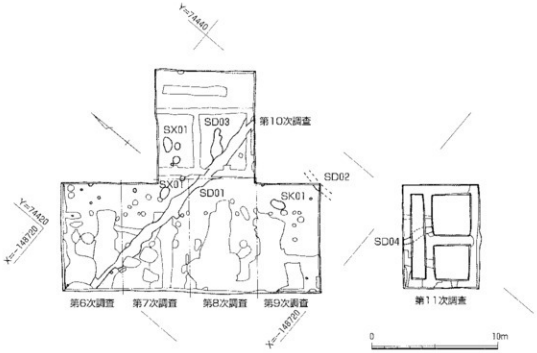


fig. 87　第６～11次調査区平面図

構内からの遺物の出土はなかった。

第７次調査　第４次調査の北東隣、第６次調査の南東隣に位置する。溝１条、落ち込み１基の他、ピットを３基検出した。

溝（ＳＤ01）は中央で検出した東西方向の溝で、弥生土器片が出土した。

第８次調査　第４次調査の北東隣、第７次調査の南東隣に位置する。溝１条を検出した。

溝（ＳＤ01）は、調査区北隅で検出した東西方向の溝である。遺物は、弥生土器片が少量出土した。

第９次調査　第４次調査の北東隣、第８次調査の南東隣に位置する。溝１条、土坑１基の他、ピットを３基検出したが、遺構から遺物は出土しなかった。

第10次調査　第１次調査の南西隣、第７・８次調査の北東隣に位置する。溝２条、落ち込み１基、ピットを３基検出した。

ＳＤ01は、調査区の南半で検出した東西方向の溝である。遺物は、弥生土器片が少量出土した。

ＳＤ02は、調査区の南西寄りで検出した北東から南西方向の溝で、調査区の南西隅で検出した北東から南西方向の溝、調査区の南西辺でＳＤ01と合流する。遺物は出土しなかった。

第11次調査　第４次調査の北東隣、第９次調査の１軒置いて南東隣に位置する。幅約60cmのトレンチを外周に４本、内部に２本設定した。溝１条を検出した。

第12次調査　第１次調査の２本の調査区に挟まれた地点に位置する。調査の結果、遺物包含層は殆ど確認されず、遺構も検出されなかった。また、遺物も旧耕土層及び遺物包含層から極少量出土したにとどまった。以上の結果は、後世の削平や攪乱の影響が大きいことをしている

ことに加え、今回の調査地が現在考えられている水笠遺跡の北端部に位置していることから、元来遺物包含層や遺構が存在しなかった可能性も十分考えられる。平成11年度に実施した試掘調査の結果と合わせて考えると、今回の調査成果からも、当調査地が水笠遺跡の北端部に位置していることが確認できたものといえる。今回の調査地以北の地点には、埋蔵文化財が存在しない可能性が高くなったといえる。

第13次調査　第４次調査の北東隣、第11次調査の１軒置いて南東隣に位置する。幅約60cmのトレンチを外周に４本、内部に１本設定した。しかし工事影響深度内では西隅の一部分で遺構面に達したのみで、大部分は遺物包含層中に収まった。遺構は検出されなかった。

第14次調査　第４次調査の調査区が屈曲する部分の北隣に位置する。敷地の南西半分はほぼ前面掘削し、北東半分は幅約50cmのトレンチを外周に２本、内部に２本設定した。当初北東側外周に、もう１本トレンチを設定する予定であったが、既に攪乱を受けていたことが明白であったため、設定しなかった。溝１条、井戸１基の他、ピット３基を検出した。

ＳＤ01　調査区の北東辺で検出した東西方向の溝である。方向や埋土の類似性から第６次～10次調査で検出した溝ＳＤ01の西側延長部分と考えられる。弥生土器片が少量出土した。

ＳＥ01　調査区の南半で検出した井戸である。これのみ明らかに遺物包含層の上面で検出した。平面は直径0.9～1.1ｍの不整な円形であるが、底面は直径0.5ｍの整円形である。深さは2.0ｍで、埋土は地山構成土が塊状に混和したものである。井戸最下部の地山は緑青色砂で、この層が涌水層となっている。井戸枠は存在しないのみならず、枠材の断片であった可能性のある木片も全く出土しなかった。埋土が地山土を混和したものであることを考慮すると、井戸を開削したものの十分な水量が得られなかったためか、井戸枠を構築することなく埋め立てた可能性が推量できる。土器片も全く出土しなかったため詳細な時期は不

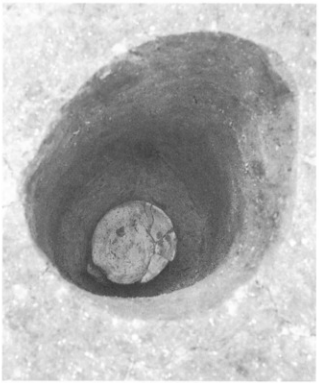


fig. 88　ＳＰ03遺物出土状況

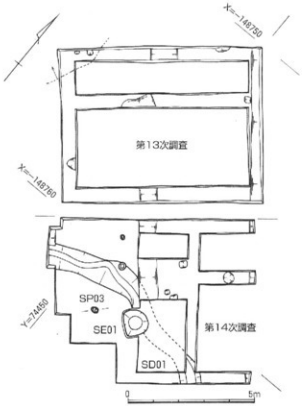


fig. 89　第13・14次調査区平面図

明であるが、遺物包含層の上面で検出されたこと、地山上面で検出したＳＰ03から平安時代頃の土器が出土したことから判断して中世頃と推定できる。

ピット　ＳＰ02から弥生土器が少量、ＳＰ03から土師器１点が出土した。平安時代頃の完形の皿で柱穴の底に置いていた。柱を抜き取った後で柱穴に入れたと考えられる。

第15次調査　水笠通３丁目街区の西隅に位置する。工事予定地は約450㎡であるが、今回は先行調査が可能であった部分のみを調査し、既存家屋の移転が完了していない残り約半分は来年度に調査を実施する予定である。調査区は「Ｌ」字状になっており、溝２条、土坑２基、ピット31基を検出した。また、遺物包含層は削平されて遺存していなかった。

ＳＤ01　調査区の北東辺で検出した東西方向の溝である。方向や埋土の類似性から第６次～10次調査で検出した溝ＳＤ01の西側延長部分と考えられる。弥生土器片が少量出土した。

ＳＫ01　調査区のほぼ中央で検出した菱形状の土坑である。長軸1.0m、短軸0.6m、深さ約0.15mで断面は椀状である。遺物は弥生土器片が少量出土した。

出土遺物　今回の調査では第１～14次調査と比較して多くの遺物が出土した。ただし遺物包含層が遺存していないためほとんどが旧耕作土からの出土である。しかし中には少量であるが緑釉陶器・灰釉陶器・瓦の破片が含まれていた。これらは一般の集落では多くは見られない遺物であるため、近隣に該当時期の特殊な建物等が存在していた可能性が考えられる。

３．ま　と　め

第15次を数える水笠遺跡の発掘調査であるが、第１・４次調査が区画整理の街路部分の調査で、それ以外は区画整理後の個人住宅の調査である。第１・４次調査では、主として弥生時代の溝が多く検出されているが、当時の居住を示す遺構は検出されていない。竪穴住居等の浅い遺構は後世の耕作によって削平されて消滅し、比較的深い遺構のみが遺存している状況であると推定され、遺跡の実態がまだよく判明していない状況である。個人住宅の調査では調査面積に制限があるため、その傾向はさらに強く、遺構が散漫な状態で検出されるのみである。そのような状況の中、今回の一連の調査では第１・４次調査で確認されていた弥生時代の溝の延長部分を２条、新たな溝を５条検出し、土坑・落ち込み・ピット等を検出した。また第14次調査では、柱穴１基のみであるが平安時代の遺構を検出した。平安時代の遺構は初めての確認で、近隣に当時の掘立柱建物等が存在していた可能性が考えられる。さらに遺物包含層上面を遺構面とする井戸を１基検出した。遺物が全く出土しなかったため詳細な時期は不明であるが、上下各層から出土した遺物から判断して中世頃と推定される。これまでの調査では遺物包含層上からは遺構は確認されていないが、今回の確認によって水笠遺跡は地山上の遺構面以外にも遺構面が存在する複合遺跡であったことが明らかとなった。また、第15次調査では旧耕作土からではあるが緑釉陶器・灰釉陶器・瓦の破片が出土した。近隣に一般の集落とは異なる特殊な性格の建物が存在していた可能性も考えられる。以上本遺跡では、未だ各時期の住居等の遺構は検出されていないが、今後も調査を継続することによって、当時の人々の生活の痕跡が確認されていくものと思われる。今後も関連遺構の検出が期待されよう。

18. 松野遺跡　第16次－１～７調査

１．はじめに

松野遺跡は六甲山系西端付近の南側に広がる沖積地の微高地に立地する遺跡である。昭和56年度に市営松野住宅建設事業に先立つ試掘調査で発見され、第１・２次調査で周囲を掘立柱塀と溝で区画された古墳時代後期前半の豪族居館が確認されている。その後暫く発掘調査は実施されなかったが、平成７年度以降、阪神・淡路大震災後の復興土地区画整理事業で調査事例が増加し、今回で第16次を数えることとなった。これまでの調査によって古墳時代後期の他に弥生時代前期、弥生時代後期、平安時代後半から鎌倉時代前半の遺構が確認され、豪族居館に関わる時期以外の遺構も有する複合遺跡であったことが明らかになっている。

松野住宅北側の当地一帯は新長田駅北地区震災復興土地区画整理事業が進められている地域で、昨年度には区画整理の街路予定地の内現況の道路部分を除く範囲に関し、20ヶ所の発掘調査が実施されている。今年度の調査は、それに継続して実施されたものである。

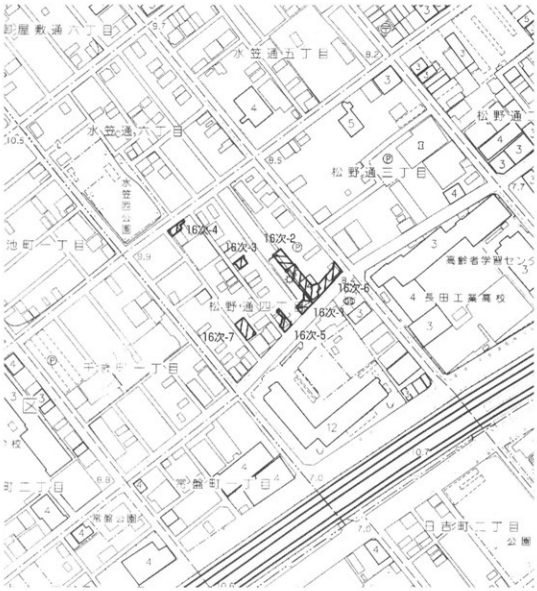


fig. 90
調査地位置図
1：2,500

2．調査の概要

基本層序　大別して上から順に、近現代の整地土、都市化直前の耕作土・床土、旧耕作土、遺物包含層、基盤層と続く。現地調査時には遺物包含層と地山を区別したが、遺物包含層から基盤層へ徐々に変化して層界の不明な部分もあり、遺物包含層は基盤層の上部が土壌化したものと判断される。したがって本来の遺構面は遺物包含層の上面と考えられるが、ほとんどの遺構は基盤層上面まで掘り下げなければ確認できなかった。また、後世の耕作によって遺物包含層が削平されて消滅している部分もあった。

16次－1　街区南辺東寄の調査区である。南隣の市道の拡幅部分であるが、東端は交差点計画地のため北側に三角形に突き出ている。調査区中央部には既存の建物基礎を解体した時、コンクリートを搬出せずに埋め立てた攪乱で大規模に破壊されているため、遺構面の遺存状況は極めて悪い。遺構はピットを5基検出したのみである。

ピット　検出したピットはすべて直径あるいは長径20～35cm、深さ10～25cmの小規模なもので、掘立柱建物を構成するようにはまとまらなかった。ピットの1基から土師器の細片が1点出土したのみであるため、ピットの時期は不明である。

遺物包含層から、弥生時代から鎌倉時代の土器が少量出土した。その中には古墳時代後期前半の須恵器片が数点認められた。昨年度の調査ではこの時期の遺構・遺物はほとんど確認できなかったが、南隣の第1・2次調査で確認した古墳時代後期前半の豪族居館の時期と一致するため、近隣にはこの時期の遺構が存在する可能性が考えられる。

16次－2　街区南東寄の調査区である。既存の建造物の基礎や現代の瓦礫投棄坑のため、1区同様に遺構面の遺存状況が特に悪い。当調査区では遺物包含層は存在せず、遺構もピット8基を検出したのみである。

ピット　検出したピットはすべて直径あるいは長径10～30cm、深さ5～10cmの小規模なもので、掘立柱建物を構成するようにはまとまらなかった。遺物が出土しなかったため、ピットの時期は不明である。

16次－3　街区北寄の調査区である。検出した遺構は溝とピットである。また、黒褐色粘質土上面では、耕作痕や足跡などが若干検出された。遺物包含層は、上面が東側へ徐々に低くなっており、西側では層厚が10cm程だが、東側はほとんど存在しない。さらに西壁沿いで断ち割りトレンチを設定し、下層の確認を行ったが、埋蔵文化財は存在しなかった。

溝　溝は幅約50cmで、北から南へ円弧を描く。土師器の極小片が出土している。

ピット　ピットは2基検出したが、遺物は出土していない。

遺物は、須恵器・土師器などが出土しているが、全体的に量は多くはない。その他に弥生時代のものと思われる土器片も出土している。また暗灰黄色砂質土からは、中世の須恵器・土師器・瓦器が出土した。

16次－4　街区北辺西寄の調査区である。調査の結果、現地表下50～55cmで遺物包含層である暗灰褐色シルト層を検出した。遺物包含層は北半部では削平のため、遺存状況は良くないが、南半部では厚さ5cm程度を測る。遺物包含層からは、弥生土器と考えられる土器の小片が数点出土したのみであった。遺物包含層の直下で検出した淡灰（黄）色シルト質細砂層上面が遺構面で、ピットを5基検出した。

16次－5　街区南辺中央の調査区である。調査区の北東辺は新設の水道管が通っていたが、それ以

外は他の調査区と比較して遺構面の遺存状況が良好であった。遺物包含層も厚く、弥生時代後期の土器が多く出土した。土坑１基とピット13基を検出した。

ＳＫ01　調査区の南辺中央で検出した土坑である。南東側半分は調査区外に続くが現状では直径0.6ｍの円形で、深さ約0.4ｍ、断面は袋状である。埋土は上が暗灰茶色砂混じりシルト、下が黒灰色砂混じり粘土である。遺物は弥生土器が出土した。

ピット　検出したピットの多くは直径あるいは長径10～30㎝、深さ５～20㎝の小規模なものであった。深さ約50㎝もあって柱痕を有するピットも３基存在したが、掘立柱建物を構成するようにはまとまらなかった。遺物が出土しなかったピットと出土したピットがあるが、いずれも細片であり、直接時期を示すものとはなり難いが、遺物包含層が弥生時代後期と考えられるため、ピットの時期は弥生時代であると思われる。

16次－６　街区南東隅の調査区である。現代の盛土の下には、旧耕土・旧床土があり、その下に土師器・須恵器の細片を含む遺物包含層（黒褐色中礫混じり粘土）がある。この遺物包含層下の淡黄～淡黄色シルト層の上面が第１遺構面で柱穴が検出された。第１遺構面ベース土を除去すると黄灰～暗灰黄色粘土混じりシルトとなっており、直下の土層に鉄分の沈着が見られること等から見て水田耕作土の可能性がある。この土層の下、約40㎝で厚さ５～10㎝の黒色粘土層を確認しているが、この土層が水田耕作土であるかどうかは不明である。土壌のサンプルを採取し、調査を終了した。

調査区はＬ字形を呈し、東西方向をⅠ区、南北方向をⅡ区として調査を実施した。Ⅱ区の南半は現在の建物基礎により大きく破壊されており、遺構の残存状況はよくない。

第１遺構面　G.L.－約0.8ｍ、T.P.約8.2ｍで検出された遺構面で、ピット、土坑が確認された。

Ⅰ区西半に集中部分があるが、調査区が狭小のため建物としてまとまるものはない。ピットは径10～15㎝前後で深さ10～20㎝のものが多いが中に深さ60㎝に達するものもある。ピット、土坑内から出土遺物がなく、時期を特定することはできない。

第２遺構面　G.L.－約0.8～1.1ｍ、T.P.約8.0～7.8ｍで検出した土層で、耕土層と推定される。

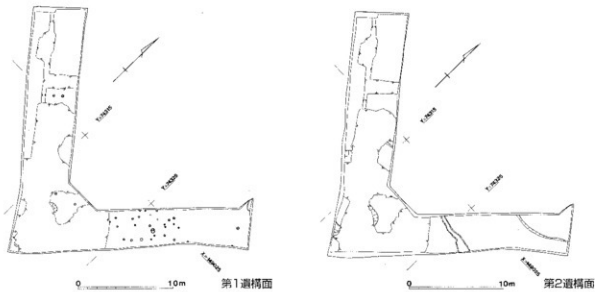


fig. 91　第16次－６調査区平面図